

松本市神田遺跡

— 団体営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書 —

1989・3

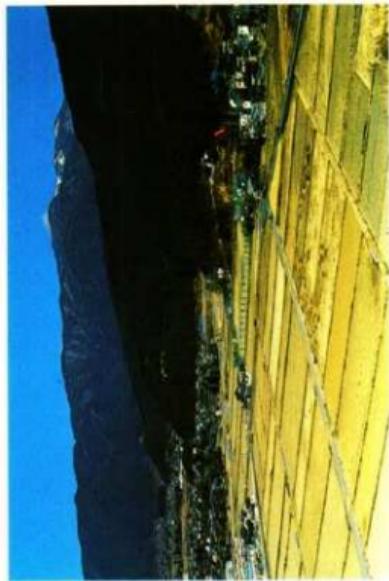
松本市教育委員会



A地点基本土層(西壁)



ヒサイ(A地点地表)



神田蓮野跡(弘法山古墳群から望む)



B地点基本土層



A地点第3号住居址
カマド上部



同
カマド土層断面



同
カマド下部
カマドは上部から土師器の甕、
下部から須恵器の杯4点が出土
している。しかし、須恵器の环
については2次的な被焼痕はみ
られなかった。



C地点第5号住居址・カマド



同・カマド断面

序

松本市街地の東南に位置する神田地区は、以前より縄文時代から平安時代にかけての様々な土器や石器が出ることから遺跡の存在が知られていました。また、背後に控える中山丘陵には県下最古の弘法山古墳をはじめとする中山古墳群があります。さらに、最近では隣接する里山辺の林地区でも大きな古代集落が見つかっています。このように、神田遺跡のある神田地区は埋蔵文化財の豊かな、郷土の歴史を解く上で重要な地であるといえます。

折しも、この遺跡に団体営ほ場整備事業が及ぶことになり、松本市農業協同組合から委託を受けて松本市教育委員会が発掘調査を実施することになりました。

調査は昭和63年11月末から平成元年1月の寒さの中で行われました。成果は奈良・平安時代の集落址の一部を確認するにとどまりましたが、今回の調査を踏まえてさらに、調査が推し進められることが期待されます。

松本平では近年大型開発が進み、多くの遺跡が次々と失われていきます。そこで、これらの歴史的財産を記録にとどめておくことは私たちに課せられた責務と考えております。本書が神田地区の埋蔵文化財保護をいっそう高める一つの契機となれば幸いです。

最後に、この調査にあたり多大なご理解とご協力をいただいた神田地区ほ場整備組合、地元のみなさまに心から感謝の意を表し、序とさせていただきます。

平成元年3月

松本市教育委員会

教育長 中島俊彦

例　　言

1. 本書は昭和63年11月22日から平成元年1月19日にかけて行われた松本市大字神田に所在する神田遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は団体営ほ場整備事業に伴う事前の緊急発掘調査であり、松本市が松本市農業協同組合より委託を受け、松本市教育委員会が調査を行ったものである。
3. 本書の執筆は第3章第3節1を直井雅尚、4を神沢昌二郎が担当し、その他の項目を関沢聰が行った。
4. 本書作成に関する作業分担は次のとおりである。

遺物整理	五十嵐周子（土器）・赤羽包子（石器）
遺物実測	岩野公子（土器・鉄器）・新谷和孝（土器）・赤羽包子（石器）
遺物トレス	岩野公子（土器）・赤羽包子（石器）・三村竜一（鉄器）
遺構図整理	町田庄司・関沢聰
遺構図トレス	町田庄司・永沢周子・関沢聰
写真撮影	宮崎洋一（遺物）・関沢聰（遺構）

5. 本書の作成に当たっては（財）長野県埋蔵文化財センター調査研究員の望月映氏からご援助を頂いている。記して感謝申し上げる。
6. 本書の編集は事務局と松本市立考古博物館で行った。
7. 出土遺物及び図類は松本市立考古博物館が保管している。

目 次

第1章 調査の経過

第1節 事業の経緯と文書記録 3

第2節 調査体制 3

第3節 作業日誌 4

第2章 遺跡の環境

第1節 調査地の位置 9

第2節 周辺遺跡

1 旧石器時代 10

2 繩文時代 11

3 弥生時代 11

4 古墳時代 12

5 奈良・平安時代 17

第3章 調査結果

第1節 調査の概要 23

第2節 遺構

1 A地点

1) 住居址 28 4) 土壙・ピット 49

2) 建物址・柱列 37 5) 溝・自然流路 51

3) 竪穴状造構 46

2 B地点

1) 住居址 53 3) 暗渠 57

2) 土壙・ピット 54

3 C地点

1) 住居址 58 3) 暗渠 73

2) 土壙・ピット 73 4) 第2検出面 76

第3節 遺物

1 土器 77 3 土製品・石製品 93

2 石器 91 4 鉄器 93

第4章 調査のまとめ 95

挿図目次

第1図 調査地の位置	6	第27図 暗渠	57
第2図 調査の範囲	7	第28図 第1号住居址	58
第3図 周辺遺跡	19	第29図 第2号住居址	60
第4図 B・C地点全体図	21	第30図 第2号住居址カマド	61
第5図 土層図(1)	26	第31図 第3号住居址(1)・同カマド	63
第6図 土層図(2)	27	第32図 第3号住居址(2)	64
第7図 第1号住居址	29	第33図 第4号住居址	66
第8図 第2号住居址(1)	30	第34図 第5号住居址	68
第9図 第2号住居址カマド	31	第35図 第5号住居址ピット	69
第10図 第2号住居址(2)	32	第36図 第5号住居址カマド	70
第11図 第3号住居址(1)	34	第37図 第6号住居址	71
第12図 第3号住居址(2)・同カマド(1)	35	第38図 第6号住居址カマド	72
第13図 第3号住居址カマド(2)	36	第39図 土壌・ピット	74
第14図 建物址1	38	第40図 暗渠	75
第15図 建物址2	39	第41図 第2検出面	76
第16図 建物址4	40	第42図 出土土器(1)A地点	83
第17図 建物址3	42	第43図 出土土器(2)A地点	84
第18図 建物址5	43	第44図 出土土器(3)A・B地点	85
第19図 柱列	45	第45図 出土土器(4)C地点	86
第20図 竪穴状遺構(1)	47	第46図 出土土器(5)C地点	87
第21図 竪穴状遺構(2)	48	第47図 出土土器(6)C地点	88
第22図 土壌・ピット	50	第48図 出土土器(7)C地点	89
第23図 溝・自然流路	52	第49図 出土土器(8)C地点	90
第24図 B地点遺構配置図	54	第50図 出土石器	92
第25図 住居址・土壌	55	第51図 土製品・鉄器	94
第26図 ピット	56		
付図 A地点全体図			

第1章 調査経過

第1節 事業の経緯と文書記録

- 昭和62年9月7日 埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本市耕地課、松本市教育委員会。
- 12月21日 昭和63年度補助事業計画書提出。
- 昭和63年4月7日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。
- 4月27日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 5月31日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 6月14日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 7月31日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 8月25日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 11月10日 昭和63年度団体営利場整備事業神田地区神田遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 11月19日 神田遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 平成元年2月23日 神田遺跡埋蔵文化財取得届及び同保管証提出。

第2節 調査体制

- 調査団長 中島俊彦（松本市教育委員会教育長）
- 調査担当者 神沢昌二郎（松本市立考古博物館長）
- 現場担当者 関沢恵（松本市立考古博物館）
- 調査員 太田守夫（地形・地質）
- 協力者 青柳洋子 赤羽包子 石川末四郎 大出六郎 太田千尋 大谷成嘉 大塚袈裟六
開鳴八重子 金子富人 北沢達二 小池直人 小松正子 澤川長広 裕山勝美
高山柳子 鶴川登 中島新嗣 中村嵩 中村安雄 長谷川作吉 林昭雄 藤本嘉平
三沢元太郎
- 事務局 浅輪幸市（社会教育課長） 田口 勝（文化係長） 熊谷康治（主査） 直井雅尚
(主事) 降旗英明（主事） 山岸清治（事務員） 三沢利子 佐々木仁美

第3節 作業日誌

1988(昭和63)年

- 11月2日(水) 晴れ 現地で発掘区の選定を行う。
- 11月22日(火) 晴れ 発掘資材の運搬。重機によりB・C地点の水田耕作土を除去する。
- 11月23日(水) 晴れ 重機によりA地点の水田耕作土を除去し、検出面直上まで掘り下げる。
- 11月24日(木) 雨後曇り 同上。
- 11月25日(金) 雪 同上。
- 11月26日(土) 曇り 同上。ブレハブを設置する。
- 11月27日(日) 晴れ 時々曇り 重機によるA地点の掘り下げを継続する。
- 11月28日(月) 晴れ 時々曇り 重機によるA地点の掘り下げを終了する。C地点の南壁の土層観察で造構が確認されたため、重機によって発掘区を拡張する。トイレを設置する。
- 11月29日(火) 晴れ A地点の発掘を開始する。作業員による検出を開始する。
- 11月30日(水) 晴れ 検出を継続する(2日目)。
- 12月1日(木) 晴れ 検出を継続する(3日目)。
- 12月2日(金) 晴れ 検出を継続する(4日目)。
- 12月3日(土) 晴れ 検出を終了する(5日目)。全体写真の撮影。
- 12月5日(月) 晴れ 2・3住、堅1・2、ピットを掘る。トランシットを使って発掘区内を3m毎に釘打ちを行い、測量用の方眼設定を行う。
- 12月6日(火) 晴れ 1・2・3住、堅1・2、ピットを掘る。堅1の土層図作成、写真撮影を行う。全体図を作成する。
- 12月7日(水) 晴れ 1・2・3住、建3、ピットを掘る。全体図が完成する。
- 12月8日(木) 晴れ 1・2・3住、ピットを掘る。3住、建3、ピットの土層図を作成、写真撮影を行う。1住の遺物出土状況の写真撮影を行う。
- 12月9日(金) 晴れ 2住、ピットを掘る。3住ベルトはずしを行う。1住、建3、土4、ピットの土層図を作成する。1住、ピット71の遺物出土状況図を作成する。
- 12月10日(土) 晴れ 2住、建5、柱列、ピットを掘る。2住、建5、土1・2、ピットの土層図を作成する。3住の遺物出土状況図を作成する。
- 12月12日(月) 晴れ 1住、建1・3・5、柱列、ピットを掘る。2住のベルトはずしを行う。3住のカマドを精査する。建2、ピットの土層図を作成する。1住の遺物出土状況図を作成、写真撮影を行う。
- 12月13日(火) 曇り後曇り 建2、柱列、ピットを掘る。1住の床面、2住のカマドを精査する。1住内のピット、3住のカマド、建1、柱列、ピットの土層図・平面図を作成する。
- 12月14日(水) 曇り 建1・2を掘り終える。建4、溝を掘る。1住の平面図を作成、掘りあげ写真の撮影を行う。2・3住のカマドを精査し、土層図を作成する。2住内のピットの土層図を作成し、掘り終える。建4、ピットの土層図を作成する。建3の掘りあげ写真を撮影する。
- 12月15日(木) 曇り時々晴れ 湿1~4、ピットを掘る。3住のカマドを精査する。2住の遺物出土状況図を作成、堅2、柱列、溝3・4の土層図を作成する。2住の遺物出土状況、建1・2・4の掘りあげ写真の撮影を行う。
- 12月16日(金) 曇り 湿1~6を掘る。3住の床面を精査し、ピットを掘る。2住のカマド平面図、廻群出土状況図を作成する。3住内のピット、溝1・2・6、土5、ピットの土層図を作成する。
- 12月17日(土) 曇り 2住を掘り終える。溝4・5・7を掘る。溝7、ピットの土層図及び平面図を作成する。発掘区南壁の土層図を作成する。溝4・6の写真撮影を行う。
- 12月19日(月) 晴れ 3住のカマドを精査する。造構平面図を作成する。A地点の全体写真の撮影を行う。B・C地点の検出を開始する。
- 12月20日(火) 晴れ A地点: 3住のカマド内遺物を取り上げる。造構平面図の作成を継続する。B地点: 検出を終了する(2日目)。ピットを掘りはじめる。C地点: 検出を継続する(2日目)。
- 12月21日(水) 晴れ A地点: 造構平面図の作成を継続する。B地点: ピット、土壤を掘る。C地点: 検出を終了する(3日目)。ピット、土壤を掘る。トランシットを使ってB・C地点の発掘区を3m毎に釘打ちを行い、測量用の方眼設定を行う。
- 12月22日(木) 晴れ A地点: 3住を掘り終え、写真撮影を行う。造構平面図の作成を継続する。B地点: 1住、土壤、ピットを掘る。1住、土壤1、ピットの土層図を作成する。C地点: 2~5住を掘り始める。
- 12月23日(金) 晴れ A地点: 平面図の作成を継続する。B地点: 土壤、ピットを掘る。土壤、ピットの土層図・平面図を作成する。

平面図を作成する。発掘区南壁の土層図を作成する。C地点：2～6住を掘る。2～4住の土層図を作成し、ベルトははずしを行う。

12月24日（土）　晴れ　A地点：平面図の作成を終了する。B地点：土壤、ピットの掘り下げる。平面図の作成を行う。C地点：2～6住、ピットを掘る。5住の土層図を作成する。
12月26日（月）　晴れ　B地点：遺構を掘り終える。平面図の作成を終了する。全体写真の撮影を行う。C地点：3～5住、土壤、ピットを掘る。3～5住に伴うピットの土層図、暗渠の平面図を作成する。暗渠の写真撮影を行う。

12月27日（火）　晴れ　C地点：2・3住内のピット、5・6住を掘る。5住の遺物出土状況図を作成後、遺物を取り上げる。1～3住内のピット、5・6住の土層図を作成する。
12月28日（水）　雪後晴れ　降雪のため、発掘作業を中止する。

1989（平成1）年

1月9日（月）　雨時々曇り　前夜未の雨で遺構を養生するためのシートに水が溜ったため排水作業を行う。

1月10日（火）　曇り後晴れ　土層観察が困難だった発掘区南半部の凍結がとけたため、検出面・床面を精査する。その結果、4～5、5～6住の境界線に間違いがあり、一部掘り直しを行う。3・4住のカマド、5・6住内のピット、暗渠の土層図の作成を行う。

1月11日（水）　晴れ　4～6住を掘る。5住内のピットの土層図を作成する。2・3住の遺物・arkan出土状況の写真撮影を行う。

1月12日（木）　雨後曇り　降雨のため、発掘作業を中止する。

1月13日（金）　曇り　1住、土2を掘り、土層図を作成、写真的撮影を行う。2～4住、土3の掘りあげ写真を撮影する。

1月14日（土）　曇り　5・6住を掘る。2・6住のカマドの土層図を作成し、写真撮影を行う。5住のカマドを精査し、出土状況図の作成、写真撮影を行う。

1月17日（火）　晴れ　5住のカマドの精査を継続し、土層図の作成、写真的撮影を行う。2～6住の写真、全体写真的撮影を行う。

1月18日（水）　晴れ　発掘現場の整理、資材の撤収準備を行う。

1月19日（木）　晴れ　資材の運搬を行い、発掘を終了する。

1月20日（金）　以降、報告書作成のため出土遺物・遺構図の整理、トレース、写真撮影、原稿執筆等を行っている。

調査スナップ



A地点

調査風景（検出）



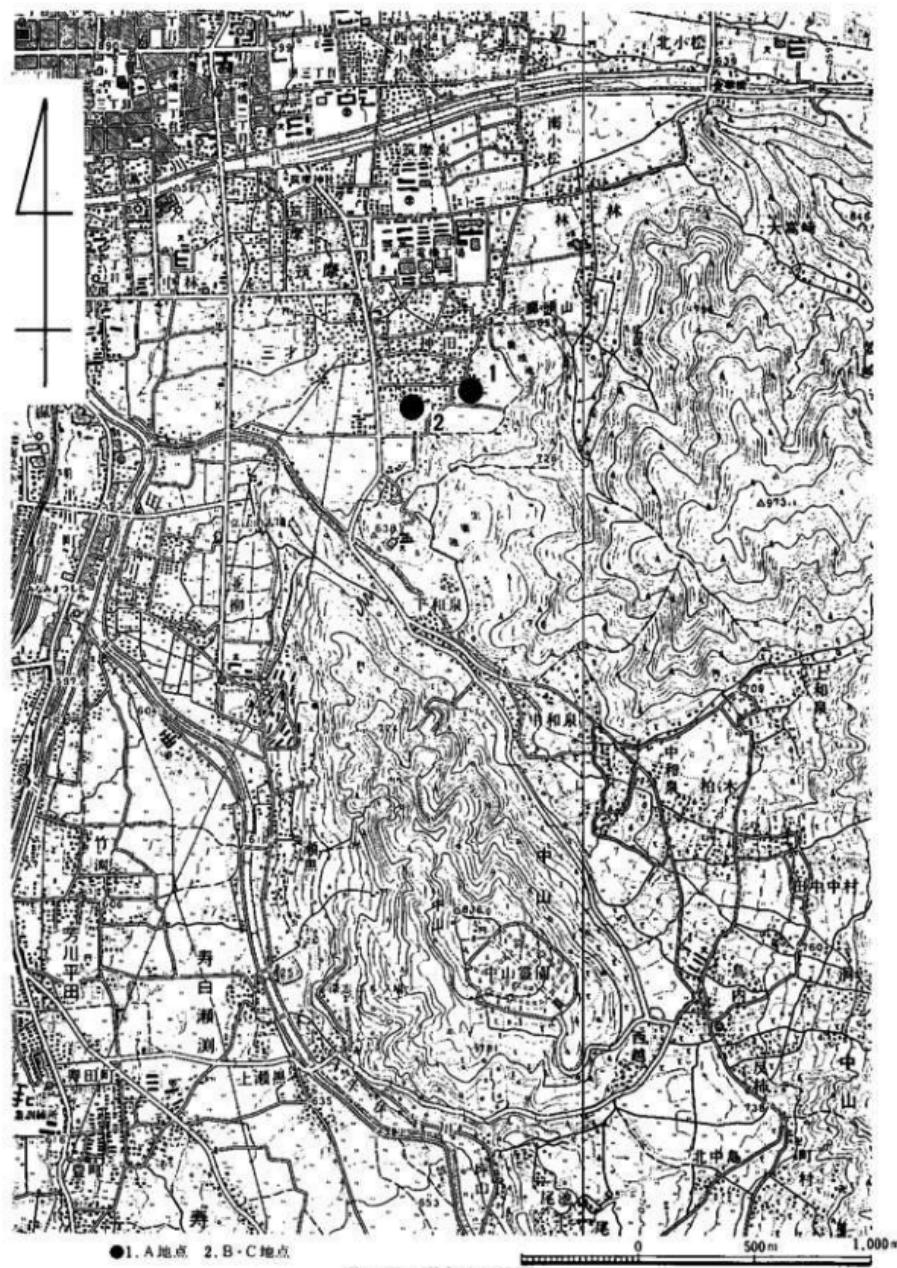
A地点

調査風景（第3号住居址）

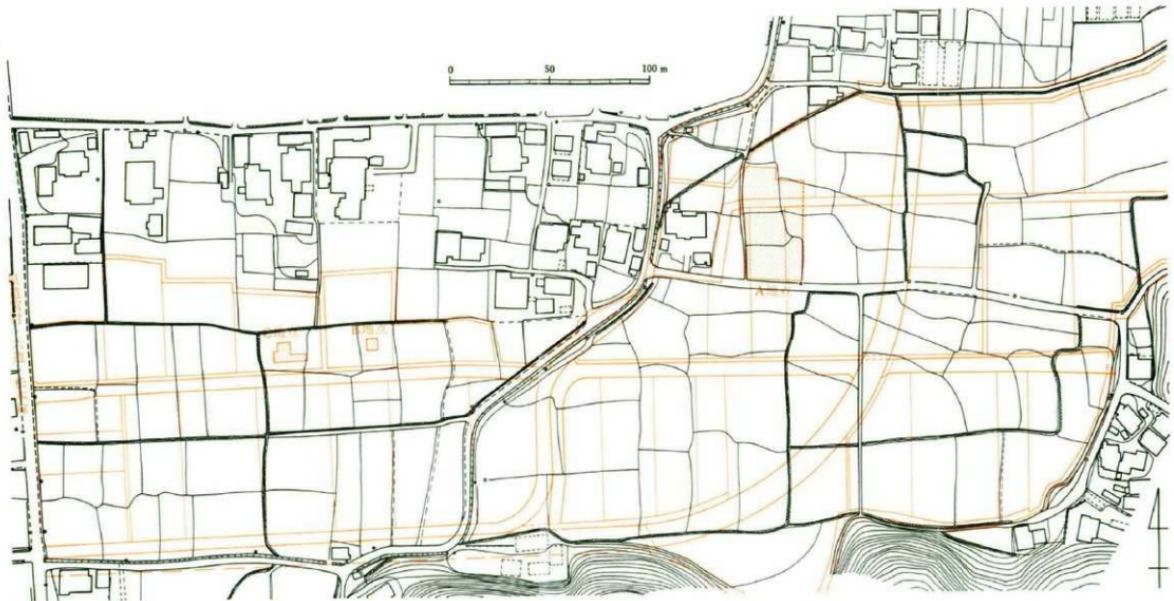


C地点

調査風景（暗渠）



第1図 調査地の位置



調査範囲

第2図 調査の範囲

第2章 遺跡の環境

第1節 調査地の位置

神田遺跡が所在する松本市神田は、市街地の南西部に位置している。周辺一帯は北を薄川、東から東南部を林城山一千鹿頭一中山（開成中学校のある仁能田山^{二千九百五}）の山麓、南を和泉川と中山丘陵の北麓、西を田川によって地理的に区画されている。そのため、この地域は河川の氾濫の影響が強くみられ、神田地区では北側が薄川の氾濫原、南西部が和泉川の氾濫原である。しかし、調査地周辺は南側の仁能田山と東側の千鹿頭山によって氾濫から守られた格好で比較的安定していると思われる土地である。このことは、調査地区内の堆積土層に礫がほとんど見られない観察所見からもうかがえることである。ただし、遺構検出面で自然流路が確認されていることからある時期には小河川の影響は受けていると考えられる。これらのことから神田地区周辺は複雑な地理的環境にあると思われる。しかし、現在では宅地化が進み、耕作地域以外の古環境の復原は難しい状況にある。

今回の発掘調査は、神田地区の集落の南側である。具体的には、筑摩神社から中山へ向かう県道（県道宮村・六道・松本線）沿いの集落が途切れたところ（松本電鉄バス中山線の「神田南」停留所のある地点）から東へ130mの水田にC地点、同じく170mの水田にB地点を設定した。さらに、C地点から東北東200mの地点にA地点を設定している。各地点の海拔高はA地点が600.34m～600.86m、B地点が599.01m、C地点が598.57mで、調査地周辺は北から南へ低く、東から西へ低い地形を呈している。

なお、今回の調査地の行政上の地番はA地点：（松本市）大字神田字浅間40-1・41・50-1～3・51-1、B・C地点：大字神田字南田82である。

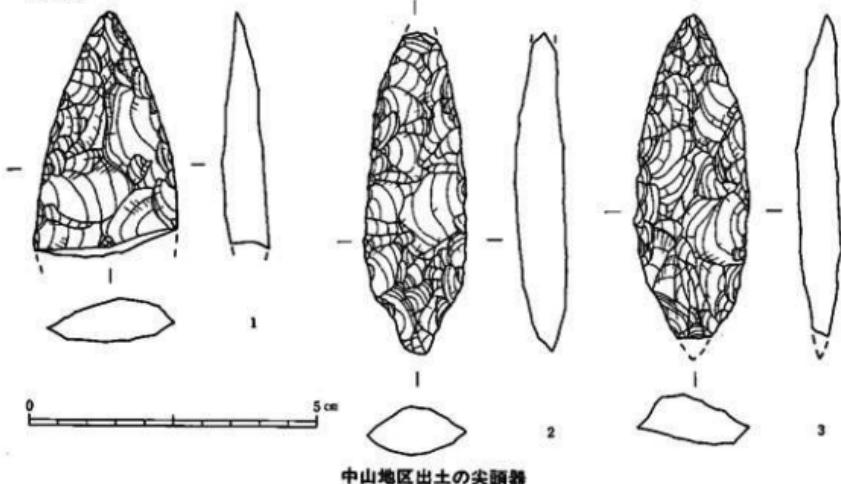
第2節 周辺遺跡

神田遺跡の周辺には旧石器時代から中世にかけての多くの遺跡が分布している。しかし、いくつかの地点・遺跡で資料紹介や発掘調査が行われているものの、多くは表面採集などによって遺物散布地として遺跡が把握されている程度である。そこで、今までの資料と新資料をあわせて神田地区周辺の遺跡について概観する。

なお、神田地区の背後（南側）の山麓上には、弘法山古墳や中山36号古墳で知られる中山古墳群が分布している。そして、神田遺跡はこれらの古墳から見おろせる位置にあり、発掘にあたっては古墳時代の集落が検出される可能性も考えられた。また、神田地区に該当する山麓部分については古墳の分布調査が行われていないことから、発掘期間内に南側の丘陵部のフィールド調査を行った。そのため、この節では古墳時代の記述に比重が置かれている。

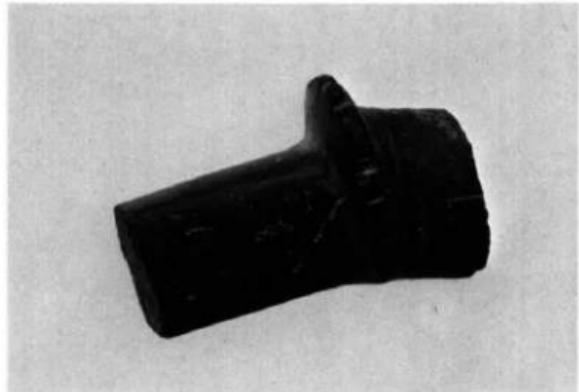
結果としては、発掘では古墳時代に該当する遺構・遺物の発見はなく、奈良・平安時代の竪穴式住居址・建物址等が見つかっている。一方、フィールド調査では新たにいくつかの古墳を発見することができた。以下では、時代をおって周辺遺跡を概観していくことにする。

1. 旧石器時代 旧・中山考古館の収蔵資料に「松本市中山西仁能田」のラベルがある黒曜石製の槍先形尖頭器（下図1）がある。木葉形を呈する両面加工の尖頭器で、下半部は折れて失われている。なお、「西仁能田」は弘法山古墳がある丘陵のことである。なお、中山地区では有舌尖頭器を含む尖頭器がいくつか採集されているので、併せてその一部を掲載した。2・3ともに黒曜石製である。 |



2. 繩文時代 神田地区内では耕作や建築の際に縄文土器・石器が出土し、採集されている。しかし、その詳細はよくわかっていない。なお、和泉川の北側の神田地籍内からは後・晩期と思われる独鉛石が採集されている。今回の発掘調査においても縄文土器・打製石斧が検出により採集されている。薄川の南側では、里山辺の林山腰・大嵩崎・橋倉、中山の弥生、宮平八幡宮裏山・和泉等があり、いずれも山裾の緩斜面に立地している。特に、林山腰では1987（昭和62）年に発掘調査され、中期の竪穴式住居址3、後期の柄鏡形敷石住居が検出されている。

薄川の北側では埋橋で凹石・石棒が、針塚で早期～後期の遺物が見つかっている。なお、薄川流域については、氾濫により当時の生活面はかなり下にあると思われるので、実際の遺跡数はさらに多くなると思われる。



独鉛石

両頭の石斧の片側で刀部は失われている。
現在長8.35cm、幅5.49cm、重172.5g珪
質岩製。和泉櫻西北の神田地区内で耕作
中に出土したもの。
(竹田千歳氏蔵)

3. 弥生時代 神田地区内では神田保育園およびその周辺で、土器・太形蛤刃石斧が出土しているが、遺跡の実態はよくわかっていない。

薄川の南側では、筑摩神社付近・松本工業高校敷地・富士電気工業敷地から中・後期の土器が出土している。薄川と田川の合流する三角地帯（筑摩・神田・三才・中林）には、当時は低湿地などの水田経営に適したところもあったと考えられる。しかし、この地域は薄川の氾濫をしばしば受けた地域であるため包含地の所在がはっきりしていない。

薄川の北側では県町がある。ここは、あがたの森公園・松本県ヶ丘高校敷地等の6次にわたる調査で40軒以上の竪穴式住居址が見つかっており、中・後期の集落が存在したことがわかっている。

また、これより上流の針塚では前期末から中期初頭の再葬墓5基が発掘されている。さらに、土壙（墓壙）に接して、遠賀川系の壺形土器が出土しており、中信地方の弥生文化の流入を考える上で貴重な資料となっている。

4. 古墳時代 集落址では、薄川の南側には富士電気工業敷地・御神符・千鹿頭北などが知られている。特に、千鹿頭北では1987（昭和62）年の発掘調査で竪穴式住居址47（前期7・後期40）、掘立柱建物址6（後期）が見つかっている。薄川の北側では県町で後期の住居址が見つかっている。いずれの地域もその背後に古墳群を控えていることから、かなりの集落の存在が考えられるので、今後の調査が期待される。

古墳については、薄川の北側の扇状地上に数基の積石塚が分布している。現在では荒町（里山辺1号）・大塚（里山辺2号）・里山辺3号・針塚（里山辺4号）・古宮（里山辺16号）・猫塚（里山辺17号）などが知られている。これらは、古墳群の周辺に薄町（すすきまち）・薄川の地名があること、古墳群の近くの薄宮神社が須々岐水神（『日本三代実録』貞觀9年3月11日条に從五位下に昇叙の記載がある。）を祭っていることから、『日本後紀』延暦18年12月5日条に卦妻真老が「須々岐（すすき）」姓を朝廷から賜った記載があることに関連させて、朝鮮からきた帰化人の墓ではないかと考えられている。このうち、古宮については1928（昭和3）年に直刀3・管3が出土している。直刀の1本については羅元孔があり、6世紀後半から7世紀前半の築造の可能性を考えられる。（ii）大塚ではかつて直刀が出土したと伝えられており、1988（昭和63）年に発掘調査が行われている。調査の結果、土師器・須恵器のほか勾玉・金環・ガラス小玉などの装身具が出土している。しかし、古墳の墳丘は崩壊・改変されていて古墳の構造・内部主体については明らかにすることはできなかった。また、古墳の基底部近くまで寛永通宝等の古銭・キセルなどが出土していることから、古墳が近世には信仰の対象として利用された可能性が考えられる。中・近世の塚信仰等の方面からの考察も必要だと思われる。なお、里山辺の積石塚は方形塚が多く三段の段築が多いとされ、同じ市内の水汲古墳群が円形の積石塚であることと比較されている。しかし、一般に積石塚は礫で構成されているため築造されてから千数百年の間、本来の形状を保っているとは考えがたい。地震・暴風雨などの天災、人為的な改変、信仰物への転用等で築造時の姿を現状から想像することは困難であると思われる。周溝の存在・形状、墳裾の根石等の確認調査による古墳の形態・平面規模の把握が必要である。北河原屋敷（里山辺11号）は正式な墳丘測量が行われていないが、積石塚ではない方墳で規模が長22m・高3mとされている。方墳であること、規模が付近の古墳に比べて大きいことから今後注目されるべき古墳である。

県町周辺では県塚第1号・県塚第2号がある。しかし、後者の付近から滑石製勾玉が採集されているほかは、これらの古墳の詳細についてはわかっていない。

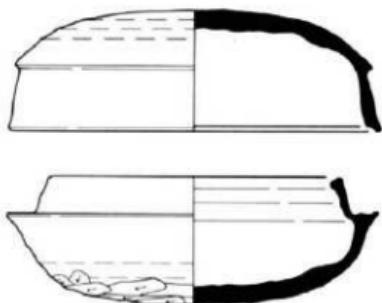
次に、薄川の南側では里山辺南小松の巾上（里山辺10号）がある。この古墳は以前に発掘されており横穴式石室内から直刀2・管1・管玉1・須恵器が出土している。現在の巾上古墳は水田中にあり墳丘が見られないが、これは薄川の氾濫原に立地しているためである。そのため周辺には本古墳以外に古墳が埋没されている可能性があると考えられる。御神符（里山辺9号）は林集落の南側山寄りの台地上に立地しており、直刀2・劍2が出土している。この古墳の西側には前述の千鹿頭

北遺跡が位置している。

神田地区の南側にはいわゆる「中山古墳群」が分布している。地形的には弘法山がある西仁能田山（中山丘陵の北端部）と中山36号がある仁能田山（棺護山）は、和泉川の流れる谷筋によって隔てられている。西仁能田山では県下最古の弘法山古墳がある。4世紀中頃に築造の前方後方墳と考えられているが、築造時期については諸説があり確定されていない。弘法山の南東側には中山北尾根古墳群がある。現在、中山丘陵の尾根上に継続して3基の古墳が確認されている。北から順に1～3号と仮称する。この内の1基については1937（昭和12）年に発掘調査が行われ、無石室の古墳であることと、刀子1点が確認されている。1・2号については未掘墳の可能性がある。また、2・3号については墳端部が比較的明瞭である。墳形については1号は円墳で、2・3号については方形墳の可能性がある。いずれにしても正式な墳丘測量が望まれる。3号については墳頂部の一部が掘り込まれているが、1937年の発掘時のものか盗掘されたものなのかは不明である。

仁能田山周辺では中山31～36号・棺護山1～3号が知られている。このうち、中山36号は発掘調査によって、半三角縁獸帶鏡1・壺形土器・鉄器片が出土し、4世紀後半の築造が考えられている。中山31～34号については内部主体は不明であるが墳丘規模が小さいことと、丘陵の南斜面（現在の生麦池に面している）に築造されている点で中山36号と立地的に異なり、後期古墳の可能性が強いと考えたい。

中山35号は世界数世教の建物の東側の尾根筋にあり、神田地区を見おろす眺望のよい立地である。しかも、墳丘は径30m・高3mと際だって大きく、墳頂部は広い平坦面をもっている。本墳は未掘ではあるが、立地・墳丘のあり方から前期～中期古墳の可能性をもつ古墳と考えたい。



棺護山3号墳出土須恵器 索元12



壺・底部の手持ちヘラケズリ

中山古墳群

中山地区に所在する古墳群を総称して「中山古墳群」と呼んでいる。これらの古墳は、立地・分布・時期的にみて、さらに小さな古墳群に区分されるべきものである。

また、神田地区は地形上、中山の山麓部に連続しているので、この地区では今後、新たに古墳が見つかる可能性が強い。今後の調査が期待される地域である。



神田遺跡から弘法山古墳⁵⁶を望む



中山北尾根古墳(1号)⁴⁰



中山北尾根古墳(3号)⁴⁰



中山35号古墳⁴⁰



中山35号古墳東に所在の古墳⁵⁶



弘法山古墳から仁能田山(棺護山)を望む

にのたやまかごやま
仁能田山(棺護山)の古墳

神田遺跡を見下す仁能田山には、多くの古墳が分布している。写真の左側、白い建物(世界教世教)の左(東)側には、中山35号古墳がある。右(西)側の開成中学校周辺には、中山36号古墳、棺護山1号~3号墳が分布していたが、校舎やグランドの建築の際に破壊されている。また、尾根の南側には、生春池に面して、中山32~34号墳が分布している。



中山32号古墳④



中山32号古墳西に所在の古墳跡



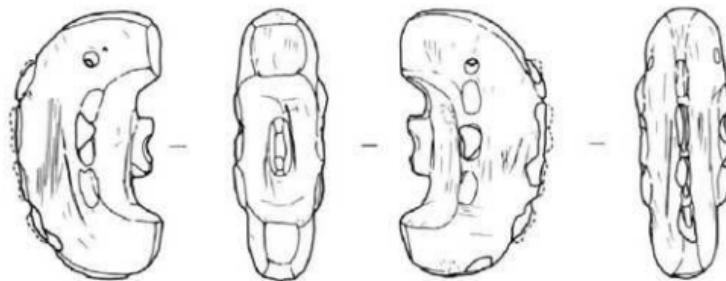
神田地区所在の古墳⑤



和泉八幡山古墳(中山27号古墳)⑥

棺護山1・2号は、1959（昭和34）年に開成中学校の敷地造成工事の際に発掘されている。1号からは遺物の出土はなかったが、2号からは鉄剣5・直刀1・鉄鎌6・有孔砥石1が出土している。3号は規模・出土状況等は不明であるが、鉄剣3・直刀1が出土している。なお、棺護山3号については、昨年（1988年）に開成中学校より市立考古博物館へ出土遺物が寄贈されている。それによると上記の武器のほかに土師器・須恵器がある。このうち須恵器の蓋・坏には表面に赤色顔料の付着が見られる。5世紀中頃から後半の須恵器と考えられ、坏の底部には手持ちのヘラケズリが行われている。この資料は弘法山・中山36号築造以降、中山古墳群の展開を考える上で重要な資料になると思われる（13ページ図・写真参照）。なお、棺護山1～3号については正式な報告がなされていないため、資料の追求調査が必要である。

また、古墳からの出土ではないが、仁能田山周辺では滑石製の手持ち勾玉1点が出土している（下図・写真参照）。



手持ち勾玉 縦尺1.2(所有者：三代沢一二氏、管理：日本民俗資料館)



手持ち勾玉

中山の仁能田山周辺で採集されたもので、出土状況はわかつていない。黒色の滑石製で、製作の精緻が明瞭に観察される。

背部に4、腹部に1、左右の側面に各3の小形勾玉が付っている。三代沢一二氏所蔵で、(財)日本民俗資料館で展示されている。

仁能田山以南では中山の平坦部を取り囲むように、山地の尾根上に点々と古墳が築造されている。しかし、これらのほとんどは内部主体・副葬品等がわかっていない。弥生山1号（中山28号）では鉄鎌・釘が出土している。なお、和泉八幡山は江戸時代の寛政年間に発掘されている横穴式石室をもつ円墳であるが、立地が眺望の良い高所にあることと、墳丘規模が径23m・高5mと際だって大きいことから中山古墳群の中でも今後着目していかなければいけない古墳である。

最後に、発掘期間中に仁能田山周辺のフィールド調査を行い新たに数基の古墳を確認したので報告しておきたい。56は今回発掘調査を行ったA地点の南東、仁能田山から千鹿頭神社へ向かう山道沿いの最高所に位置している。直径5~6m・高0.8~1mくらいの円墳である。57は中山35号墳の東に位置し、真北に神田地区を見下ろす眺望の良い尾根上に位置している。径約20mの円墳であると思われる。58・59は開成中学校の北東に位置し、いずれも低い墳丘をもつ円墳である。58には墳頂部に盗掘痕が見られる。この地域の古墳分布については詳細な調査を行えばさらに古墳が発見されることと思われる。特に、中山36号以降の古墳の築造時期、神田地区における分布調査は今後の課題として考えて行かなければいけないと思われる。

註1) 白井 雄「鎧本孔を持つ鉄刀について」『考古学研究』122 1984

5. 奈良・平安時代 薄川の北側では県町・埋橋・松商学園がある。特に県町では1977（昭和52）年以降6次にわたって発掘調査が行われ、集落址が発見されている。また、土師器・須恵器・灰釉陶器のほか、緑釉陶器・布目瓦が出土している。松商学園では緑釉陶器・八稜鏡が出土している。

薄川の南では、筑摩・三才・神田地区の各所で土師器・須恵器・灰釉陶器が出土している。具体的には、松本工業高校敷地・富士電気工業敷地・神田北・神田保育園敷地などがある。なお、松本工業高校敷地は2回の調査が行われているが、この時期の遺構は見つかっていない。最近の発掘調査では、里山辺の林山腰で平安時代の竪穴式住居址1軒が、千鹿頭北遺跡で奈良時代10、平安時代7の竪穴式住居址が発見されている。今回の発掘調査においても該期の遺構が見つかっていることから、今後この時期の遺跡はもっと増えると考えられる。

以上、神田地区の周辺遺跡について概観してきたが、本地域は薄川の氾濫を受けていたり、宅地化が押し寄せていて遺跡の様相がわからないところも多い。しかし、地下にはさらに多くの遺跡が眠っていると思われる所以、今後も調査を継続していかなければならない地域である。

周辺遺跡

遺跡

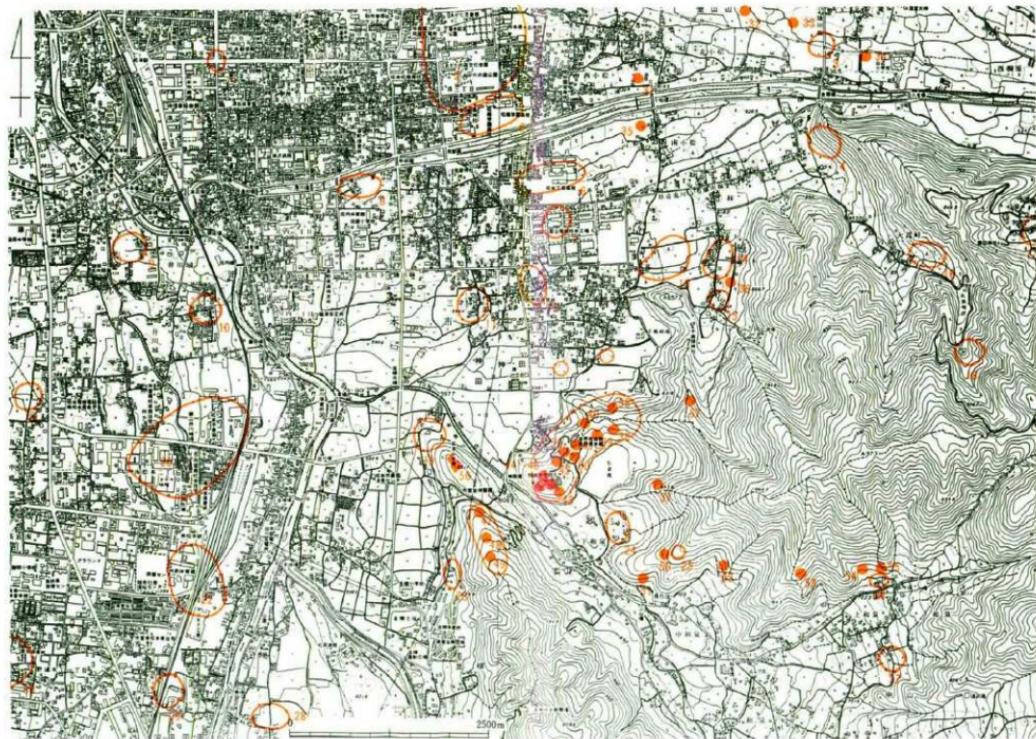
- | | | |
|----------------|------------|---------------|
| 1. 本町5丁目遺跡 | 11. 三才遺跡 | 21. 高山遺跡 |
| 2. 県町遺跡 | 12. 神田遺跡 | 22. 出川南遺跡 |
| 3. 針塚遺跡 | 13. 千鹿頭北遺跡 | 23. 山行法師遺跡 |
| 4. 林山腰遺跡 | 14. 御神符遺跡 | 24. 生妻遺跡 |
| 5. 埋機・松商学園敷地遺跡 | 15. 林遺跡 | 25. 弥生遺跡 |
| 6. 松本工業高校敷地遺跡 | 16. 大嵩崎遺跡 | 26. 宮平八幡宮裏山遺跡 |
| 7. 富士電気工業敷地遺跡 | 17. 橋倉遺跡 | 27. 和泉遺跡 |
| 8. 研摩遺跡 | 18. わび沢遺跡 | 28. 南原遺跡 |
| 9. 井川城址 | 19. 平畠遺跡 | 29. 平田北遺跡 |
| 10. 小島遺跡 | 20. 出川遺跡 | 30. 五輪遺跡 |

古墳

- | | | |
|--------------------|--------------------|--------------------|
| 31. 北河里敷古墳（里山辺11号） | 41. 中山32号古墳 | 51. 弥生山2号古墳（中山29号） |
| 32. 大塚第1号古墳 | 42. 中山36号古墳 | 52. 弥生山3号古墳 |
| 33. 針塚古墳（里山辺4号） | 43. 中山31号古墳 | 53. 和泉八幡山古墳（中山27号） |
| 34. 猫塚古墳（里山辺17号） | 44. 椿瀬山1号古墳 | 54. 中山26号古墳 |
| 35. 巾上古墳（里山辺10号） | 45. 椿瀬山2号古墳 | 55. 中山25号古墳 |
| 36. 御神符古墳（里山辺9号） | 46. 椿瀬山3号古墳 | 56. 弘法山古墳 |
| 37. 生妻1号古墳 | 47. 中山北尾根古墳（1号） | 57. — |
| 38. 中山34号古墳 | 48. 中山北尾根古墳（2号） | 58. — |
| 39. 中山33号古墳 | 49. 中山北尾根古墳（3号） | 59. — |
| 40. 中山35号古墳 | 50. 弥生山1号古墳（中山28号） | 60. — |

主要参考文献

- 桐原 健「信濃における古墳出土の鉄剣—松本市椿瀬山古墳出土の鉄剣を通じて—」『信濃』22-4 1970
原 嘉藤・小松 康「長野県松本市中山第36号古墳（仁能田山古墳）調査報告」『信濃』24-4 1972
「東筑摩郡・松本市・塩尻市誌（二）歴史（上）」 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 1973
『弘法山古墳』 松本市教育委員会 1978
桐原 健「松本市中山の古墳・古墳群-既掘古墳記録と中山考古館収蔵資料の提示』『長野県考古学会誌』 36 1980
『長野県史 考古資料編 全1巻（1） 遺跡地名表』 長野県史刊行会 1981
『松本市林山腰遺跡』 松本市教育委員会 1988



第3図 周辺遺跡



第3章 調査結果

第1節 調査の概要

1 調査の概要

神田遺跡は周知の遺跡であるが、は場整備事業の予定区が東西630m、南北210mと広範囲にわたるため、遺跡確認の試掘調査を行った（1987年12月25日実施）。調査は予定区内に8ヶ所のグリッドを設定して行った。その結果、中央北側の集落寄りに設定した5つのグリッドから奈良・平安時代の土器を採集した。いずれも地表下45~70cmの黒灰~黒褐色土層からの出土で、本層が遺物包含層であると判断した。なお、東側に設定したグリッドは千鹿頭池に近く、試掘途中で湧水してくること、遺物が出土しなかったことから発掘の対象外とした。

実際の調査は、試掘調査の成果に基づきは場予定区の中央北側にA地点を発掘区として設定した。さらに、神田遺跡の範囲を確認するため西側にB・C地点を設定した。

発掘にあたっては、最初に重機を使用して耕作土以下を除去し検出面直上まで振り下げた。その後、人力による検出以下の作業を行った。また、検出後は調査区内に任意の基準点を設け、トランシットで発掘区を1辺3mの方眼で覆って遺構測量を行った。なお、遺構全体図のN（北）・S（南）・E（東）・W（西）は方位を表し、数字は基準点からの距離（m）である。

各地点の発掘結果の概要は以下のとおりである。

A地点：調査面積 1777m²

遺構：竪穴式住居址3（奈良時代1・平安時代2）・振立柱建物址5・竪穴状遺構2
・柱列1・土壙4・ピット147・溝7

遺物：縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・打製石斧・磨石・凹石・黒曜石剥片・
ヒスイ原石・砥石・鉄器（刀子・鎌）

時期：遺物は縄文～平安時代にわたっている。しかし、遺構に伴う遺物は少なく、住居址と一部のピットで時期が推定できただにすぎない。竪穴式住居址は第1号・第2号が平安時代中期、第3号が奈良時代前半である。また、ピット71の覆土からは弥生時代中期初頭の条痕文系の土器（甕）が出土している。縄文時代の遺物は一部の土壙・ピットから破片が出土しているのみで、遺構に伴うものとは断定できない。なお、検出面からは晩期中葉（佐野II式）の土器片が出土している。

成 果：縄文・弥生時代の遺物の確認→周辺に該期の遺構が存在することが考えられる。
奈良・平安時代の集落の確認。

備 考：建物址については時期を特定できなかったが、住居址と同じ奈良～平安時代と
考えたい。溝については自然流路とは方向が異なること、建物址と同じ主軸を
とることから、集落に関係する遺構と考えている。

B地点：調査面積：34m²

遺 構：竪穴式住居址 1・土壙 6・ピット 27・暗渠 1

遺 物：土師器・須恵器

時 期：遺物は少量出土しているのみで、遺構の時期を特定できるものはほとんどない。
伴出土器からは土壙 2 が平安時代初頭、ピット 12 が奈良時代前半かや遡る時
期と考えられる。その他の遺構の時期については不明である。暗渠については
検出面が他の遺構よりも高いこと、地元に暗渠を築いた経験をもつ人がいるた
め、近世～近・現代の比較的新しい時期の遺構であると考える。

備 考：B 地点については土壙が集中しており A・C 地点とは様相を異にしている。

C地点：調査面積：114m²

遺 構：竪穴式住居址 6（奈良時代 3・平安時代 2・不明 1）・土壙 4・ピット 30・暗
渠 1

遺 物：土師器・須恵器・鉄器（紡錘車）・凹石・土製紡錘車

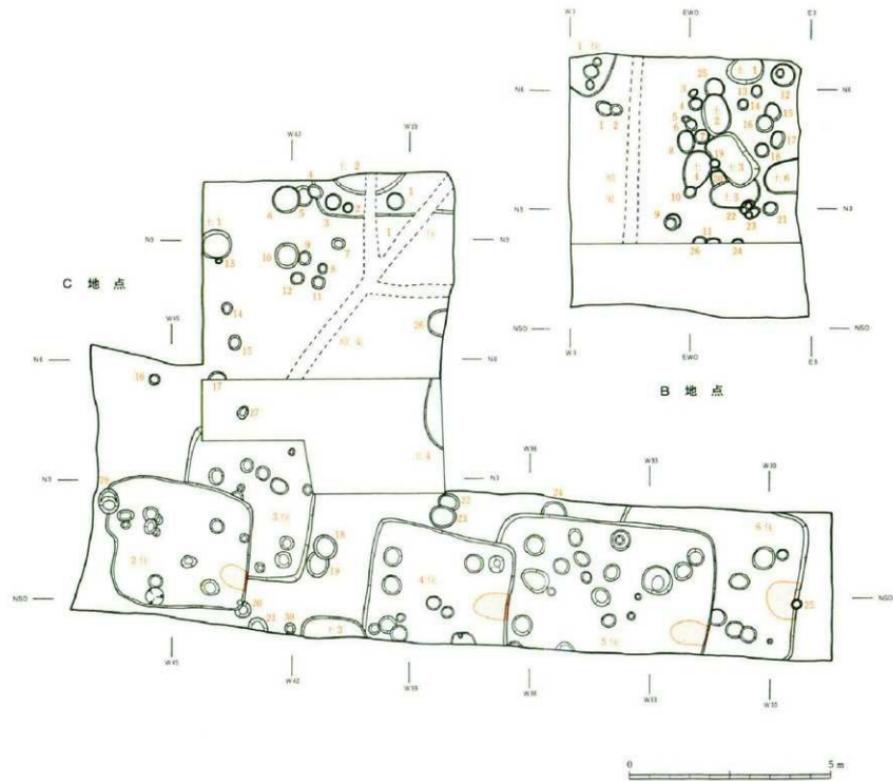
時 期：第 2 号～第 6 号住居址については伴出土器から時期を推定できた。これらは奈
良時代前半から平安時代初頭の短期間に位置づけられる。第 1 号は遺物の出土
がなく時期不明である。このほかに土壙・ピットの一部からも土器が出土して
いるが、いずれも前述の期間内である。

成 果：奈良時代前半～平安時代前半の集落の確認。

C 地点では住居址等を検出できる面よりも下で、さらに遺構検出面（第 2 検出
面）を確認することができた。

備 考：第 2 検出面では、土壙 1・ピット 1 が検出されているが、遺物がなく時期は特
定できなかった。

以上のことから、今回の発掘調査の成果は、1. 神田遺跡は縄文時代から平安時代にわたる複合遺
跡であること、2. 奈良・平安時代の集落址の一部分が確認されたことと捉えることができる。特
に C 地点の発掘で 6 軒の住居址を確認できたことは、この周辺が A 地点よりも集落の中心に近いこ
とを想像させる。なお、今回の調査では古墳時代の遺構・遺物の検出が期待されたが、発見するこ
とはできなかった。今後の調査の積み重ねが期待される。



第4図 B・C地点全体図

2 土層

今回の調査では遺跡周辺の堆積状況を確認するためA地点とB地点で土層観察を行った。なお、C地点はB地点と30m程離れているだけで、基本的に土層は同じである。

A地点（発掘区南壁・北東端グリッドの土層断面）

I層：灰色土（耕作土）

I'層：赤褐色土粒混入灰色土（I層から溶脱してきた鉄分が集積している層）

II層：赤黄褐色土

III層：赤黄褐色土混入暗褐色土

IV層：黒褐色土（遺物包含層である。おそらく、本層は植物の腐植が主原因で形成されたものと考えられる。発掘区西壁にかかる第1号住居址の土層観察では本層から遺構が掘り込まれている。A地点のほとんどの遺構も本層が検出面になるかと考えられる。しかし、遺構の覆土と包含層の区別がつきにくいため、明らかに遺構であると認識できた第2号住居址を除いて、本層は重機で除去している。）

IV'層：黒色土（発掘区南壁の西側で観察される土層。本来はIV層と同じ層であると考えられるが、黒色の度合が強い。）

V層：黄灰色土～暗黄灰色土（遺構の検出面である。IV層・V層はともに、北から南・東から西へ低く傾斜している。これらは、当時の地形を反映しているものと考えている。なお、現在の道路・水田の傾斜も同様である。）

VI層：暗灰色土（やや紫がかった灰色を呈す。A地点の堆積状況を把握するため発掘区の北東端と南西端に設けたグリッドで確認した層である。本層からも土器が出土していることから、遺物包含層と考えられる。）

VII層：砂礫層（北東端のグリッドで確認されている。なお、この疊層は発掘区の西側中央で確認された自然流路につながる可能性もあり、A地点全体に広がる土層かどうか特定できなかった。）

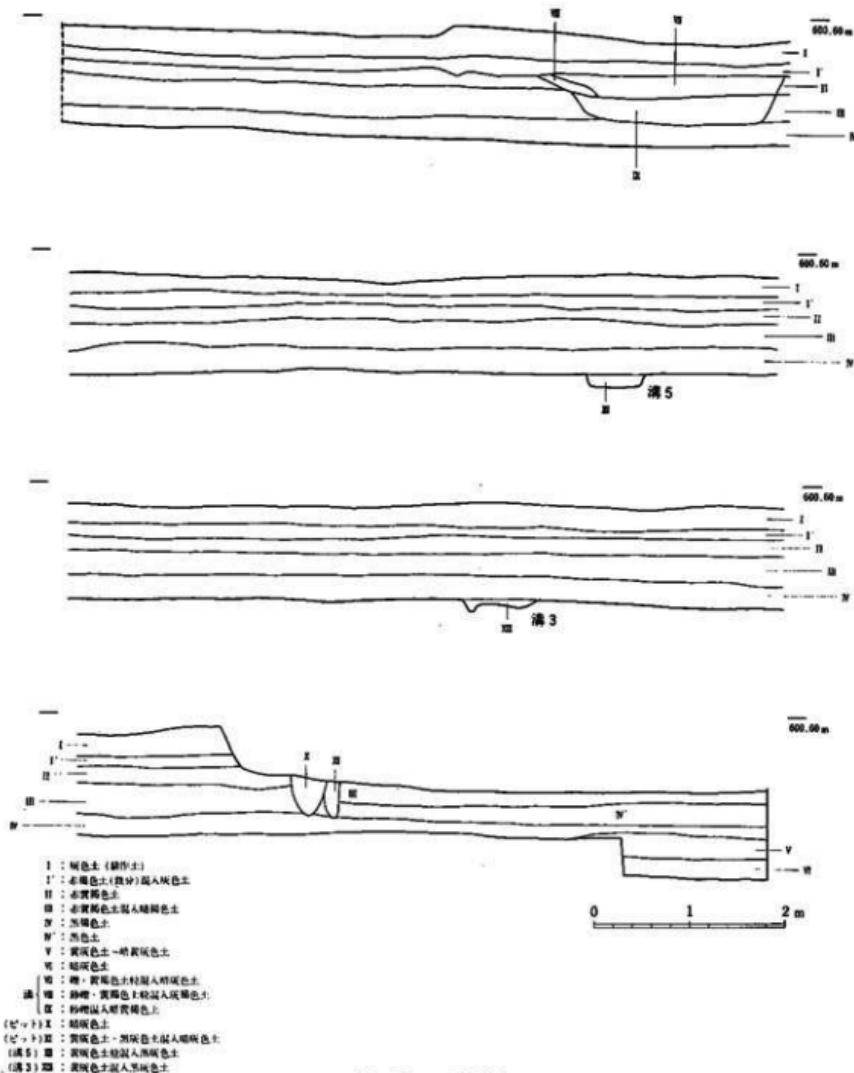
B地点（発掘区南壁の土層断面）・C地点

I層：灰色土（耕作土）

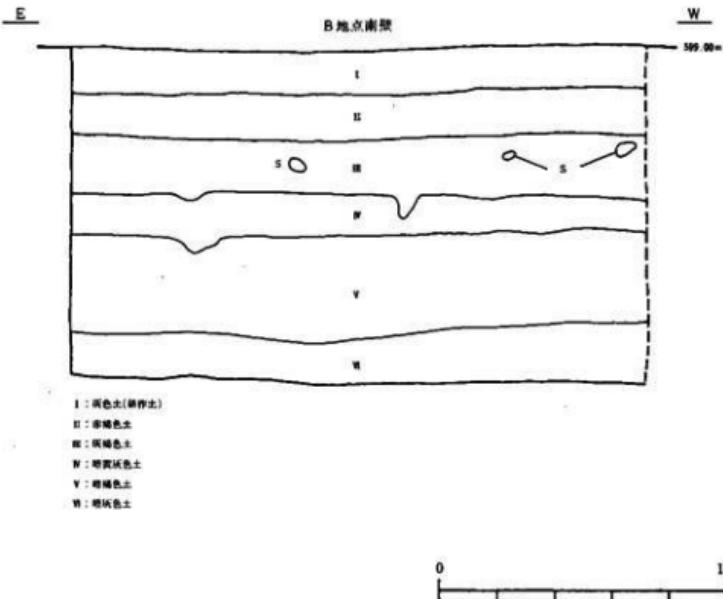
II層：赤褐色土（I層から溶脱してきた鉄分が集積している層。土師器・須恵器が出土している。排水用の石組み暗渠は本層中に作られている。）

III層：灰褐色土（炭化物・礫を微量に混入する。土師器・須恵器が出土する包含層である。発掘区域外にかかる第1号住居址の土層観察では本層から遺構が掘り込まれている。）

IV層：暗黄灰色土（遺構の検出面である。暗灰色土と黄灰色土がモザイク状に混じる。）



第5図 土層図(1)



第6図 土層図(2)

V層：暗褐色土（最大厚は39cmある。上部5cmは上層の黄灰褐色土が少量混じっている。本層中からも土師質の土器が出土しているので包含層と考えられる。）

VI層：暗褐色土（褐色土粒を混入し、I～V層に比べて砂質である。C地点では本層中から土壙1・ピット1が検出されている。B・C地点周辺には遺構検出面が2枚あると考えられる。）

以上のことから、A地点とB・C地点間は約200mしか離れていないが、土層の堆積状況はかなり異なっていると思われる。しかし、いずれも（暗）黄灰褐色土層（A地点のV層、B・C地点のIV層）が奈良・平安時代の遺構が掘り込まれている土層である。この2つの土層は、今後この地域を調査する際の目安になる層として捉えることができる。

なお、A地点では検出面（V層）でかなりの縄文土器が採集されていることから、付近に該期の遺構の存在が考えられた。しかし、今回の調査では弥生時代中期初頭のピット71が遺構としては最古のものであった。縄文時代の遺構についてはVI層以下に検出面があるのかもしれない。

第2節 遺構

本報告では、報告書の作成期間がほとんどなかったため、遺構の記述は次の方針で行った。

1. 遺構はA～C地点の各地点毎について記述を行う。
2. 遺構は竪穴式住居址・建物址・溝・土壤についてはすべて記述するが、ピットについては特徴的なものについてのみ記述する。
3. 個々の遺構の記述は、数量等で表記できるデータについては項目別に羅列し、出土状況や備考等については文章で表現する。

なお、出土状況の文章中、土器の器種名に続く（数）は、土器の図Noに対応している。

1. A地点

1) 住居址

第1号住居址

位置：北西部（西側は区域外） 新旧関係：ピット9より古い

規模：南北3.42×東西1.42m 面積：4.27m² 平面形：不整形

主軸方向：不明

壁の状況：区域外にかかる部分での土層観察によると、IV層（黒褐色土）から掘り込まれている。

最大壁高は38cmで、傾斜は急角度で立ち上がる。

床の状況：礫を含む黄灰色土。覆土とは色調で明瞭に区別されるが、堅くしまってはいない。

ピット：P₁-20×17×14cm、P₂-38×30×10cm

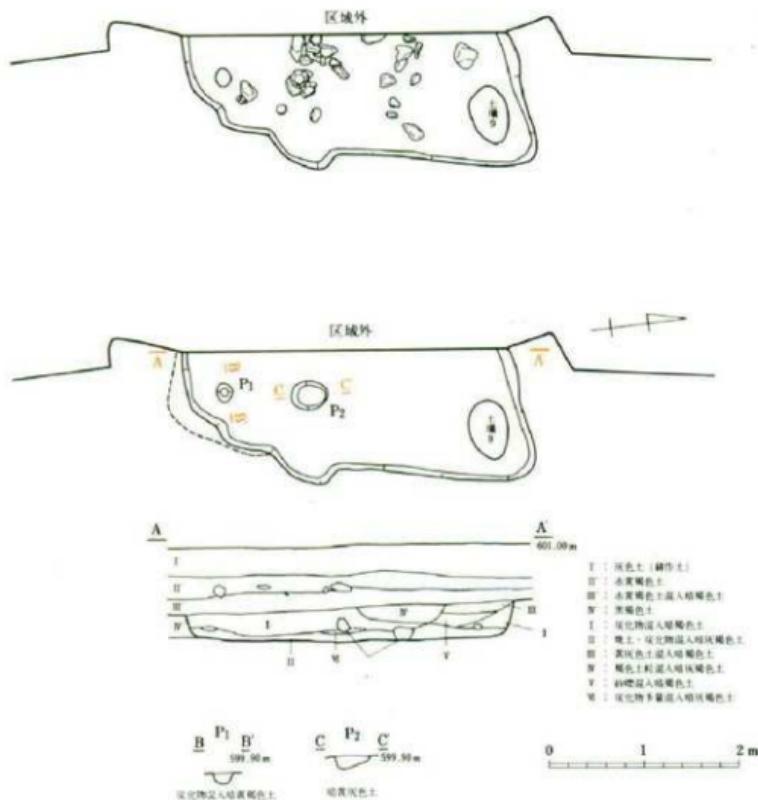
カマド：検出されなかった。ただし、床面直上から被熱した礫を含む大礫が出土していること、

覆土に焼土・炭化物が多量に見られる層があることから、本址のカマドはすでに破壊されていると思われる。住居内の礫の出土量から推定すると石組カマドの可能性がある。

遺物：土師器一壙・塊・甕

出土状況：遺物は住居址の南半に集中している。特に、土師器一壙（1）・塊（3）は床面直上の礫の上から出土している。さらに、その付近からは完形の土師器一壙（2）が床面上10～15cmで出土している。

時期：平安時代中頃（11世紀中頃～後半）



第7図 第1号住居址

第2号住居址

位置：中央北端

新旧関係：なし

規模：南北4.16×東西4.58m 面積：18.14m² 平面形：方形

主軸方向：N-0°

壁の状況：IV層（黒褐色土）から掘り込まれている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

床の状況：炭化物・暗褐色土の混じる黄灰色土で、堅くしまってはいない。

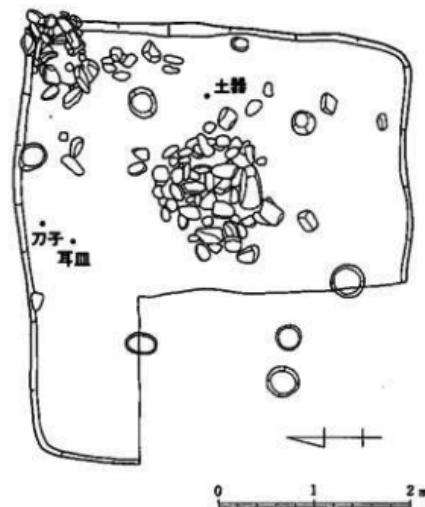
ピット：P₁-33×22×22cm（柱痕あり）、P₂-26×25×25cm（柱痕あり）、P₃-33×29×23cm、P₄-26×25×22cm、P₅-35×34×20cm、P₆-31×27×30cm（柱痕あり）、P₇-34×32×21cm、P₈-31×27×7cm、P₉-58×47×2cm

ピットの配置からP₁～P₈は主柱穴と考えられる。P₉は補助柱穴か。

カマド：位置一住居址北東隅 構造一石組カマド

人頭大から30cm大の河原石（安山岩・チャート・石英閃緑岩）を使用してカマドを構築している。カマドの手前側は石組みが崩れしており、南側に構築石材が散乱している。カマド内には少量の土師器一箇が出土したのみである。

遺物：土師器一箇・耳皿、鐵器一刀子・鎌



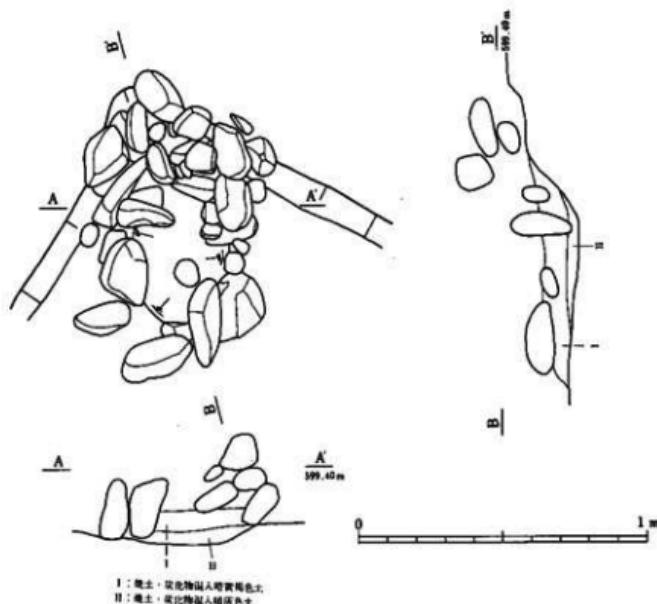
第8図 第2号住居址(1)

出土状況：遺物は住居址の北側から多く出土している。そのほとんどは覆土中からの出土である。

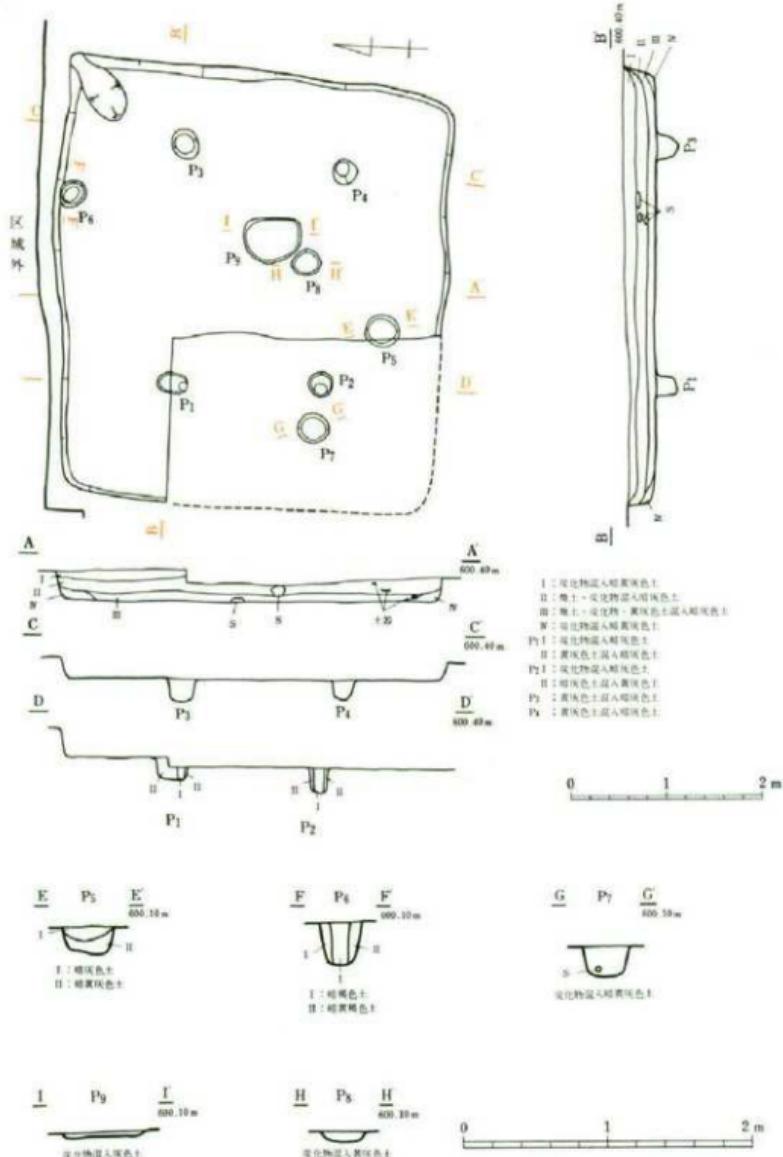
刀子はほぼ完形で出土しているが、床面上6cmから出土している。耳皿（4）も床面上19cmからの出土である。また、住居中央の床面直上には60余個の河原石が集積されていた。これらは、すでに遺構検出の際に確認されていたので、実際にはさらに多くの礫があったと考えられる。このうち、5個の礫については被熱痕が見られることからカマドの構築材（だった）の可能性がある。なお、礫群内西側の床面では炭化物の広がりが確認されている。

備考：住居中央の礫群については、床面直上から出土していることと、主柱穴を結ぶ空間内に集中して分布していることから、礫が住居内に運び込まれた時点では上屋は存在していたことが考えられる。しかし、大量の礫の存在は、住居内の生活に支障をきたすと思われる。そうであるならば、本址は、住居として利用された後、別の目的一例えば、石材置き場などで再利用された可能性も考えられる。

時期：平安時代中頃（11世紀中頃～後半）



第9図 第2号住居址カマド



第10図 第2号住居址(2)

第3号住居址

位置：南東隅

新旧関係：なし

規模：南北5.10×東西6.08m 面積：28.12m² 平面形：方形

主軸方向：W—3°N

壁の状況：検出面からの壁高は18~22cmで、斜めに立ち上がっている。

床の状況：鉄分による赤褐色の斑点が混じる黄灰色土。住居の西側に自然流路があるため、床面には中・小の礫がかんでいる。

ピット： P_1 —41×32×21cm、 P_2 —55×46×15cm、 P_3 —44×40×25cm（柱痕あり）、 P_4 —45×44×38cm、 P_5 —45×45×19cm、 P_6 —37×30×7cm、 P_7 —35×28×4cm、 P_8 —38×32×7cm、 P_9 —30×22×7cm、 P_{10} —42×10×11cm、 P_{11} —40×39×4cm、 P_{12} —45×37×30cm

ピットの配置から、 P_1 ~ P_5 は主柱穴と考えられる。ただし、 P_1 （新）・ P_4 （古）は新旧関係になるので、建て替えが行われた可能性もある。 P_6 ~ P_9 の底面には赤褐色の鉄分の集積が見られた。

カマド：位置一東壁中央 構造一地山整形後に粘土で構築している。

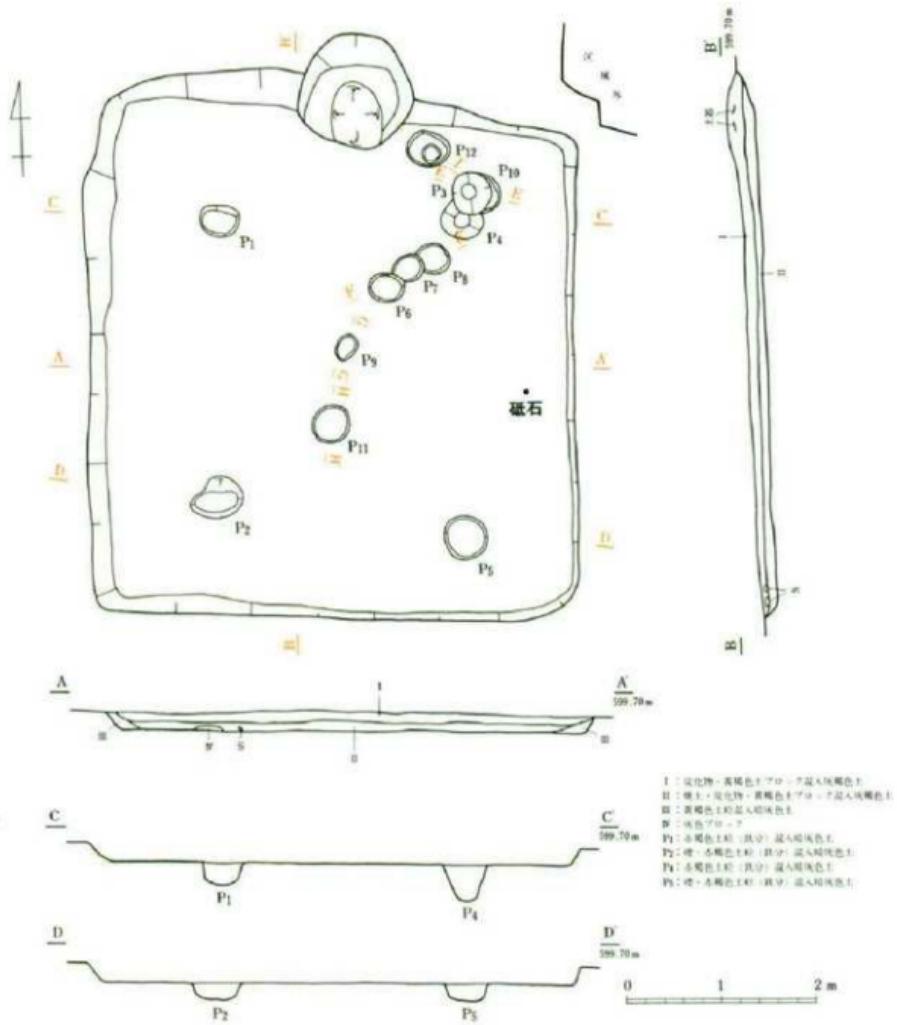
カマドは上部で土師器一甕（14）が横につぶれた状態で出土しているので、カマドにかけられた状態で放棄されたものと考えている。さらにそこから20cm下で須恵器一坏4点（5・9・11・13）・甕（16）が出土している。

遺物：土師器一甕、須恵器一坏・蓋・甕・広口甕、砥石、磨石、鉄器

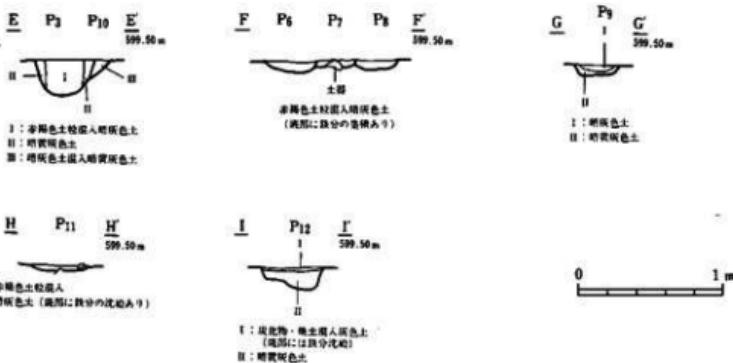
出土状況：カマド付近に遺物が集中している。また、カマドの北西に接して炭化物の広がりが見られた。また、 P_7 からは須恵器の坏（10）破片が伏せた状態で出土している。このほかには住居の南側で砥石1点・須恵器坏1点（7）が出土している。なお、床面から覆土中にかけて拳大~20cm大の礫が出土している。これらは、住居西側の自然流路に関連するものと考える。

備考：カマドの下部から出土した須恵器の坏4点には焼成後の2次的な被熱痕は見られない。しかし、カマドの袖部の範囲・上部から出土した甕（14）の位置関係からみて、これらの坏の出土地点は明らかにカマド内部にある。本カマドは甕の出土状態・袖部の被熱状況から、長期にわたって使用されたカマドが甕をかけた状態で廃絶されたものと考えられる。そうであるならば、これらの坏はカマドとして機能しなくなつた後一おそらくは住居の廃絶時にカマド内に置かれたものと考えられる。住居の廃絶に伴う祭祀等に関するものかも知れない。

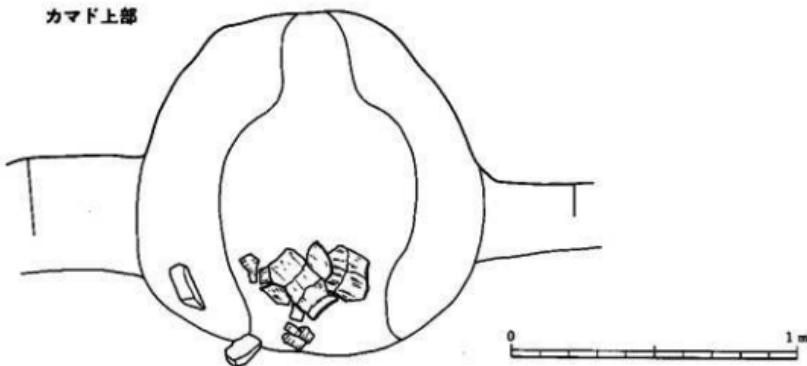
時期：奈良時代前半（8世紀前半~中頃）



第11図 第3号住居址(1)

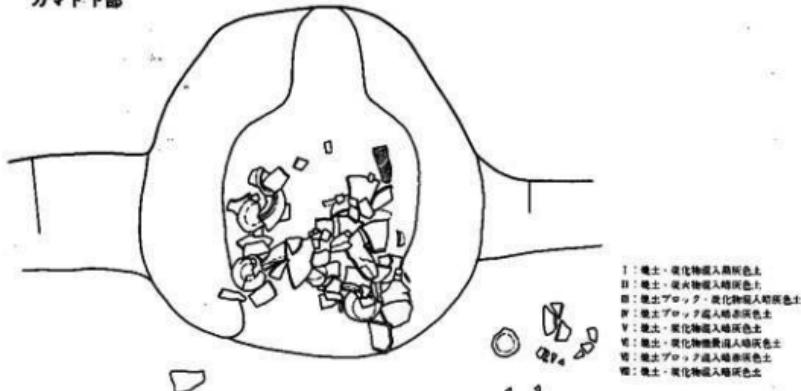


カマド上部

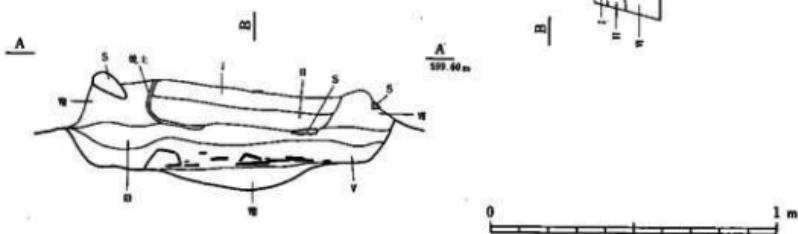
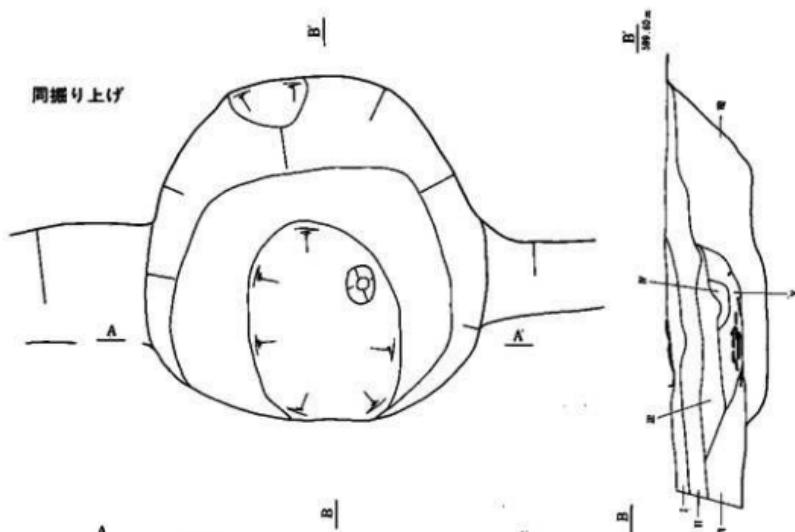


第12図 第3号住居址(2)・同カマド(1)

カマド下部



同掘り上げ



第13図 第3号住居址カマド(2)

2) 建物址・柱列

A地点では建物址5棟、柱列1が検出されている。しかし、伴出遺物がほとんどないため時期の推定できるものはない。ただし、建物址1・2・5と柱列はほぼ同じ主軸方向をとることから、同時期または比較的近接した時期に存在していた可能性がある。おそらくは竪穴式住居址の時期幅のなかで捉えられるものと考えている。

建物址1

位置：中央北側

新旧関係：溝1より新しい

規模：南北4.88×東西2.87m

面積：13.73m² 平面形：長方形

主軸方向：N-8°-E

構造：南北3間×東西2間・総柱式

柱間寸法：南北1.55m・東西1.55m

ピット：P₁-64×53×23cm、P₂-73×65×32cm、P₃-65×50×30cm、P₄-57×54×36cm、

P₅-58×55×23cm、P₆-50×50×27cm、P₇-69×49×30cm、P₈-45×45×25cm、

P₉-62×60×30cm、P₁₀-73×72×44cm、P₁₁-41×47×28cm、P₁₂-52×48×31cm、

P₁₃-56×55×28cm

P₉の底面には柱が接していた部分が1cm程くぼんでいて、鉄分による赤褐色の集積がみられた。

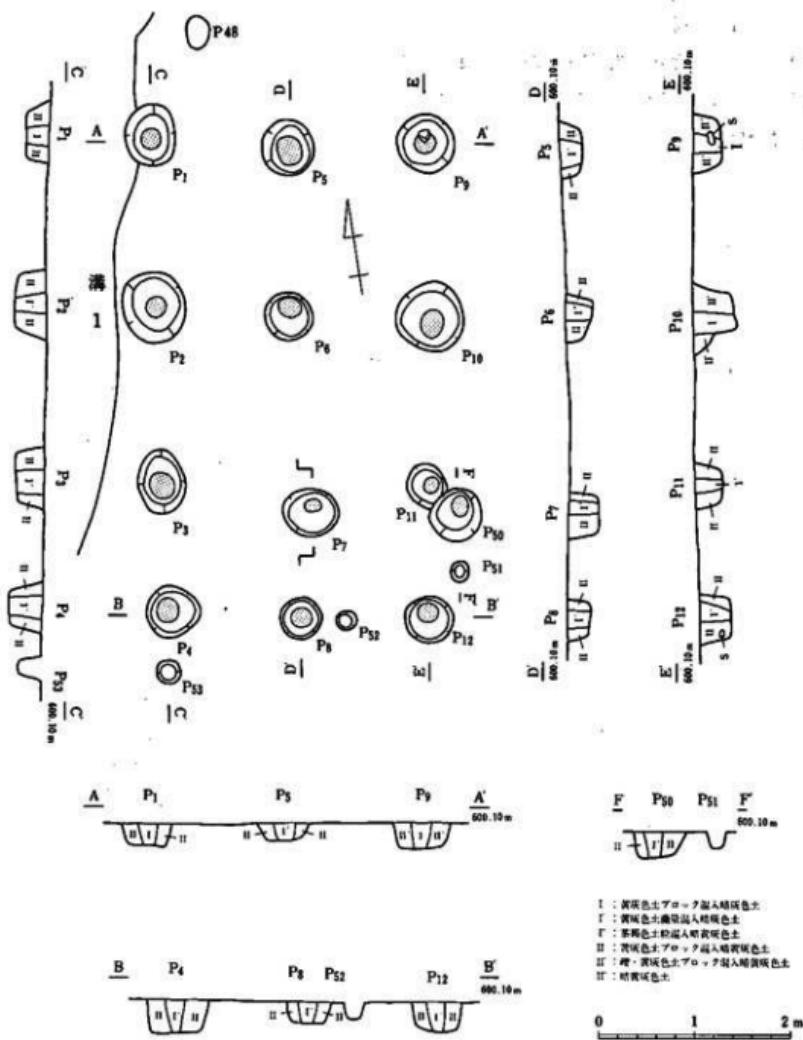
遺物：P₆から須恵器一甕、土師器の破片が、P₁₃からも土師器の破片が出土している。

備考：P₁₁（古）・P₁₃（新）はともに柱痕をもつことから、本建物址に関わるピットである。

柱痕の位置関係からみるとP₁₁は南北（P₉-P₁₀-P₁₁-P₁₂）でまっすぐにつながり、

P₁₃は東西（P₃-P₇-P₁₃）でまっすぐにつながっている。この2つのピットが建て替えた新旧関係になるのか、補助柱穴的な関係になるのかは判断できなかった。また、建物址に近接してP₃₁・P₃₂があるが、これらのピットと建物址との関係はわからない。

時期：不明（伴出土器が小片で時期の特定ができない。）



第14図 建物址 1

建物址 2

位置：中央北寄り（建物址 1 の南側）

新旧関係：建物址 4 より新しい

規模：南北2.80×東西2.80m

面積：7.59m² 平面形：方形

主軸方向：N—0°

構造：南北2間×東西2間・側柱式

柱間寸法：南北1.30m・東西1.35m

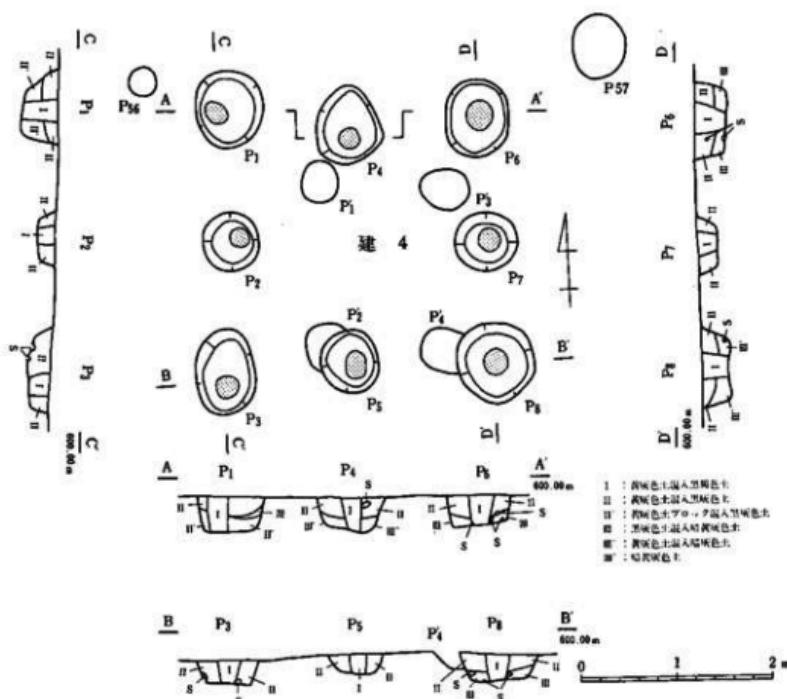
ピット：P₁-80×72×33cm、P₂-60×58×13cm、P₃-88×63×26cm、P₄-82×71×37cm、

P₅-67×62×22cm、P₆-80×66×34cm、P₇-67×61×15cm、P₈-83×82×25cm

遺物：P₇で須恵器、P₈で土師器の破片が出土している。

備考：本址は建物址 1 の南に位置している。主軸方向をわずかに異にしているが、東西2間の幅はほぼ同じである。のことから建物址 1・2 は同時期に並列していたか、もしくは近接した時期に建てられていた可能性が考えられる。

時期：不明（伴出土器が小片で時期の特定ができない。）



第15図 建物址 2

建物址 4

位置：中央北寄り（建物址 2 と同じ）

新旧関係：建物址 2 より古い

規模：南北1.70×東西1.25m

面積：2.28m² 平面形：方形

主軸方向：N-3°-E

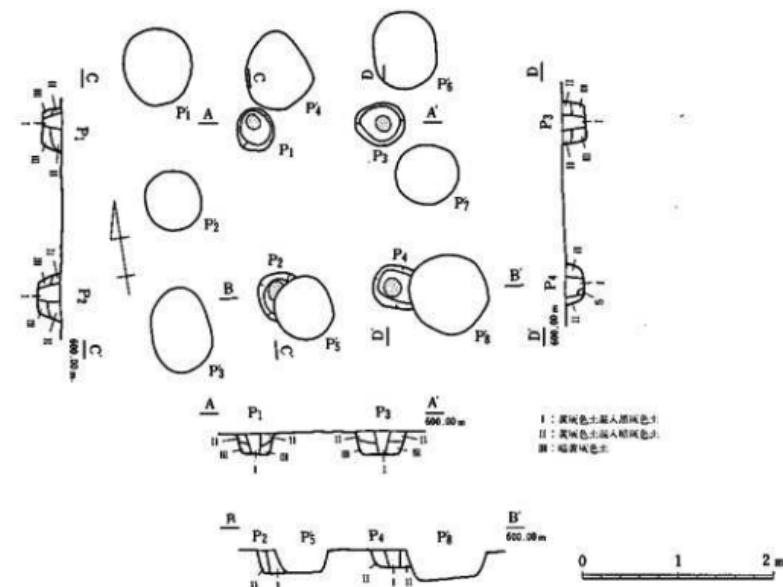
構造：南北1間×東西1間

柱間寸法：南北1.70m・東西1.15m

ピット：P₁-45×39×20cm、P₂-51×21×21cm、P₃-53×40×24cm、P₄-37×38×20cm

遺物：なし

時期：不明



第16図 建物址 4

建物址 3

位置：中央南寄り 新旧関係：なし
規模：南北3.90×東西5.45m 面積：21.89m² 平面形：長方形
主軸方向：E-4°-S 構造：南北2間×東西3間・側柱式
柱間寸法：南北2.00m・東西1.78m
ピット：P₁-76×65×34cm、P₂-77×48×30cm、P₃-52×45×18cm、P₄-77×48×15cm、
P₅-65×65×23cm、P₆-65×50×12cm、P₇-80×70×36cm、P₈-72×59×23cm、
P₉-56×52×26cm、P₁₀-63×58×35cm、P₁₁-31×30×30cm、P₁₂-58×45×10cm、
P₁₃-43×43×26cm

遺物：P₁・P₈から土師器の破片が出土している。

備考：建物西辺は柱列が2列あり新旧関係にある。外側列（P₁-P₅-P₇）は内側列（P₁₁-P₁₂-P₁₃）よりも古い。この2列については建て替えに伴うものか（この場合、新しい柱列は内側に寄っているので拡張ではなく、ほぼ同じ場所への建て直しが考えられる）、主柱穴一補助柱穴等の関係にあるものと考えられる。なお、建物址周辺のピット（P79・P80・P81）が本址に伴うものかは不明である。

時期：不明（伴出土器が小片で時期の特定ができない。）

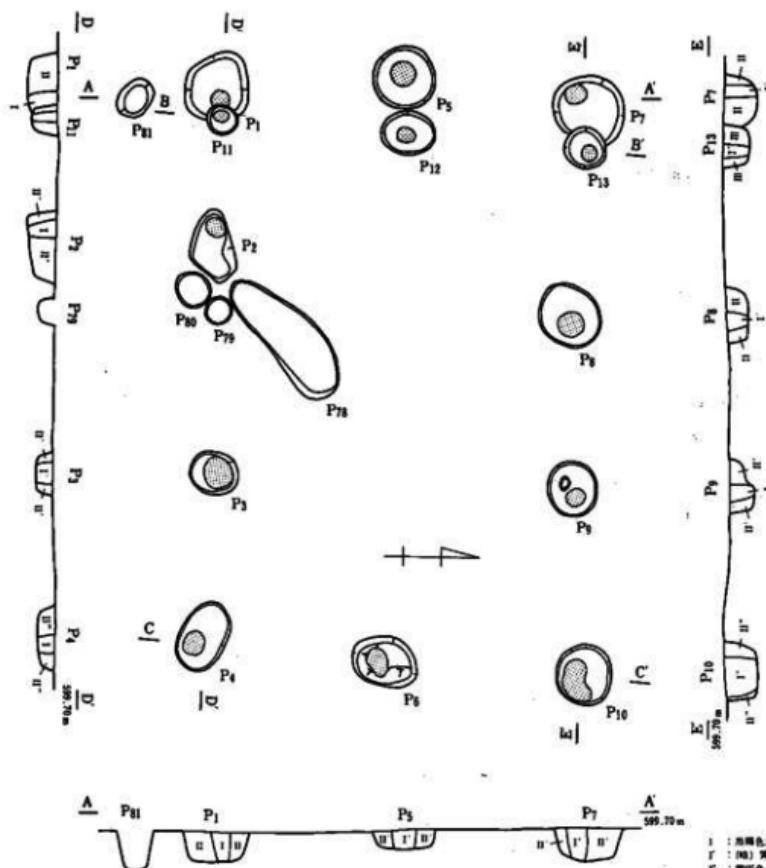
建物址 5

位置：中央東側 新旧関係：ピット108・109よりも古い
規模：南北2.60×東西2.50m 面積：6.51m² 平面形：方形
主軸方向：N-8°-E 構造：南北2間×東西1間
柱間寸法：南北1.31m・東西2.52m
ピット：P₁-52×45×30cm、P₂-61×55×35cm、P₃-57×55×38cm、P₄-66×55×31cm、
P₅-58×55×24cm、P₆-75×48×25cm、P₇-34×34×21cm、P₈-33×24×20cm

遺物：P₁から高台のついた須恵器の壊が破片で出土している。

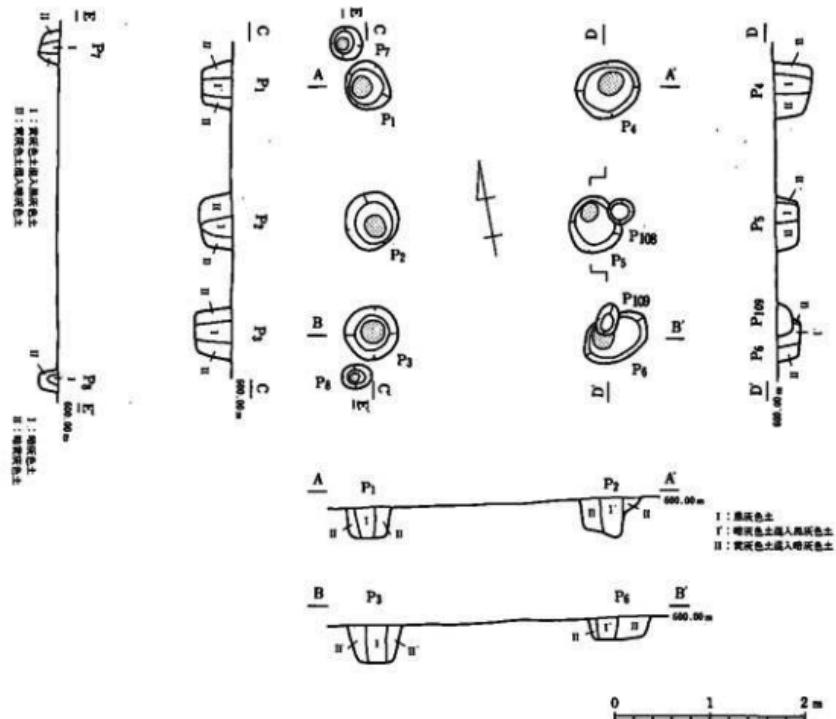
備考：建物西側列の両端に位置するP₇・P₈は他のピットに比べて直径・深さ・柱痕の規模が小さい。これらは本址の補助柱穴もしくは庇などの構造物に伴うピットと考えている。

時期：不明（伴出土器が小片で時期の特定ができない。）



图例：
 I : 黄褐色土
 II : (红) 宽灰土层入黄褐色土
 III : 黄褐色土层入暗灰色土
 IV : 黑(褐) 土层入黄褐色土
 V : 黄褐色土层入黑土
 VI : 暗黄褐色土
 VII : 暗灰褐色土
 VIII : 黄褐色土层入暗灰色土

第17図 建物址 3



第18図 建物址 5

柱列

位置：北西部一中央やや北西寄り 新旧関係：溝2よりも新しい。

主軸方向：N-4°-E

柱間寸法：P₁-P₇間は平均約265cm、P₇-P₈間205cm、P₈-P₉間55cm

ピット：P₁-32×32×23cm、P₂-36×31×14cm、P₃-31×31×14cm、P₄-32×28×28cm、

P₅-36×36×11cm、P₆-33×33×21cm、P₇-35×31×25cm、P₈-32×25×24cm、

P₉-31×25×34cm

遺物：なし

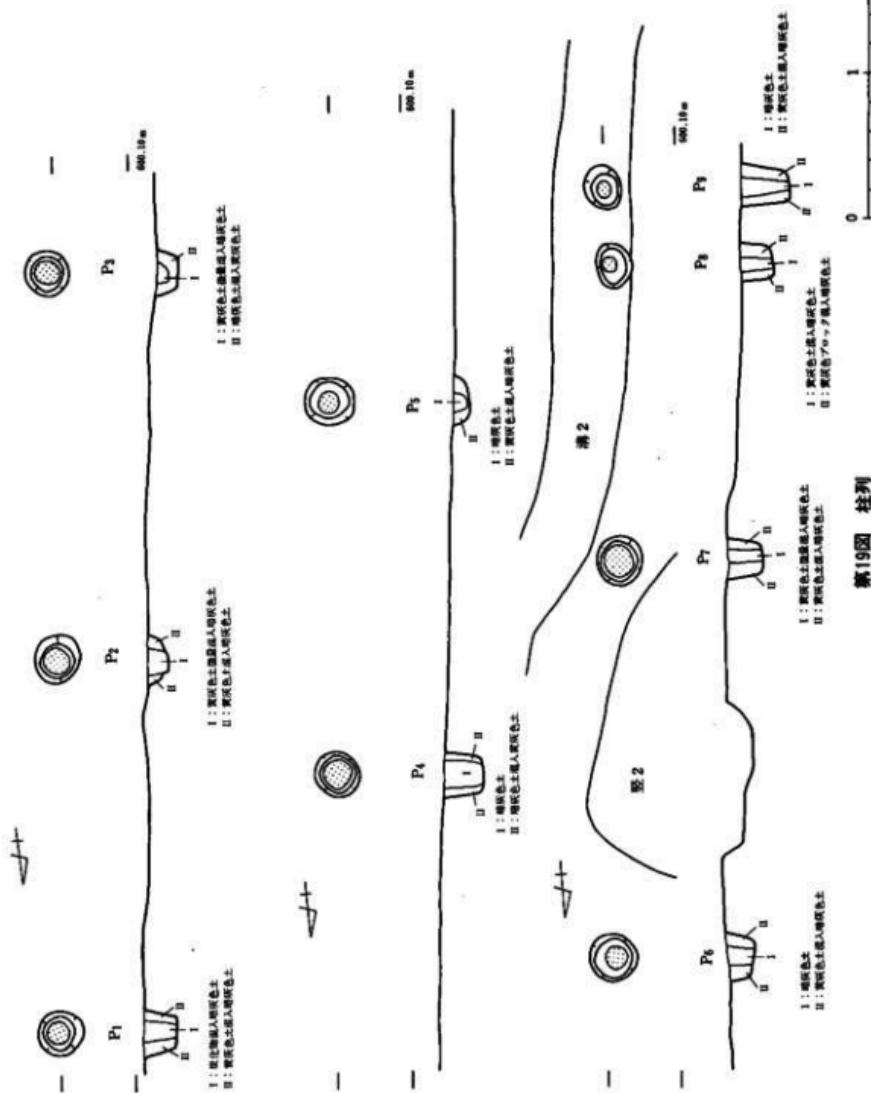
備考：柱列の主軸方向は建物址1・2の主軸方向とはば同じで、2棟の建物址とは平行した位置関係にある。また、建物址1・柱列は溝1よりも新しい点では共通している。このことから本址は建物址を区画する役割を果たしていた遺構の可能性が考えられる。なお、P₉より南側では柱底をもつピットは確認されていない。P₁-P₈間に比べてP₉-P₉間の柱間寸法が極端に短いことは、柱列の南端であるためかも知れない。P₁の北側については調査区域外に続いている可能性がある。

時期：不明



柱列 掘出状況 (右側に建物址1・2・4)

第19圖 柱列



3) 穫穴状造構

平面形が方形または長方形を呈している大形の土壙を竪穴状造構として扱った。2基が見つかっているが時期・性格等は不明である。

竪穴状造構 1

位置：北東部（第1号住居址の東側） 新旧関係：なし

規模：2.60×1.43m 面積：3.49m² 平面形：不整長方形

壁の状況：検出面からの壁高は10~12cmで、斜めに立ち上がる。

床の状況：地山に礫を含むため凹凸がある。一部に鉄分の集積がみられる。

遺物：須恵器の甕、土師器の破片が出土している。

備考：本址は遺構検出の際には後世の擾乱と判断して基本土層のV層（造構検出面）まで下げてしまつたが、本来の遺構の掘り込みはIII層からであった。A地点ではIII層で確認できた遺構はほかにないことから、本址は比較的新しい時期の遺構と考えている。

時期：不明（伴出土器が小片で時期の特定が出来ない。）

竪穴状造構 2

位置：中央北西寄り 新旧関係：土壙3より古い

規模：2.36×2.15m 面積：4.50m² 平面形：方形

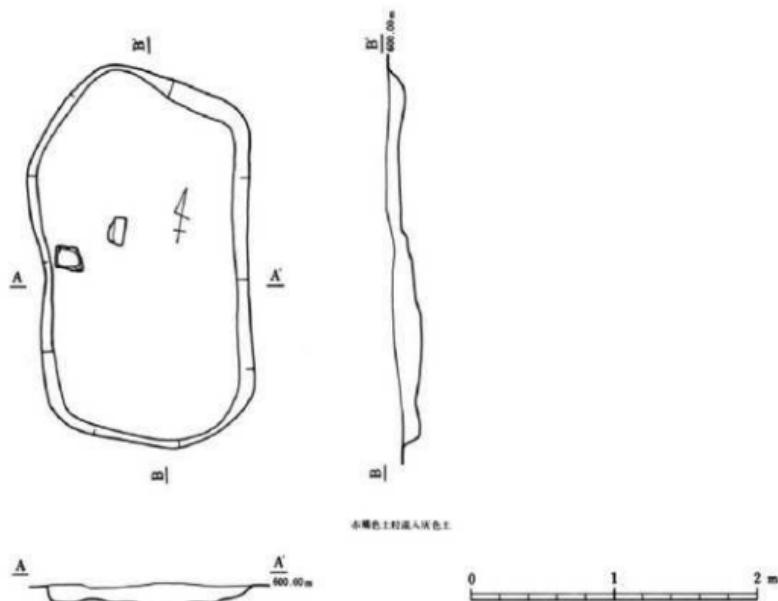
壁の状況：検出面からの壁高は18~22cmで、斜めに立ち上がる。

床の状況：覆土と区別しにくい黄灰色土であるが、砂質ではなくやや堅い。

遺物：なし

備考：北東隅と南東隅では床面から覆土中にかけて拳大~18cm大の礫が見られる。礫の分布の偏りは人為的な投棄の可能性を考えさせる。なお、土壙3の覆土中にも同様な礫が混在している。これらについては、本来は本址に伴っていた礫と考えられる。

時期：不明



第20図 壇穴状遺構(1)



壇穴状遺構 2 墓出土状況

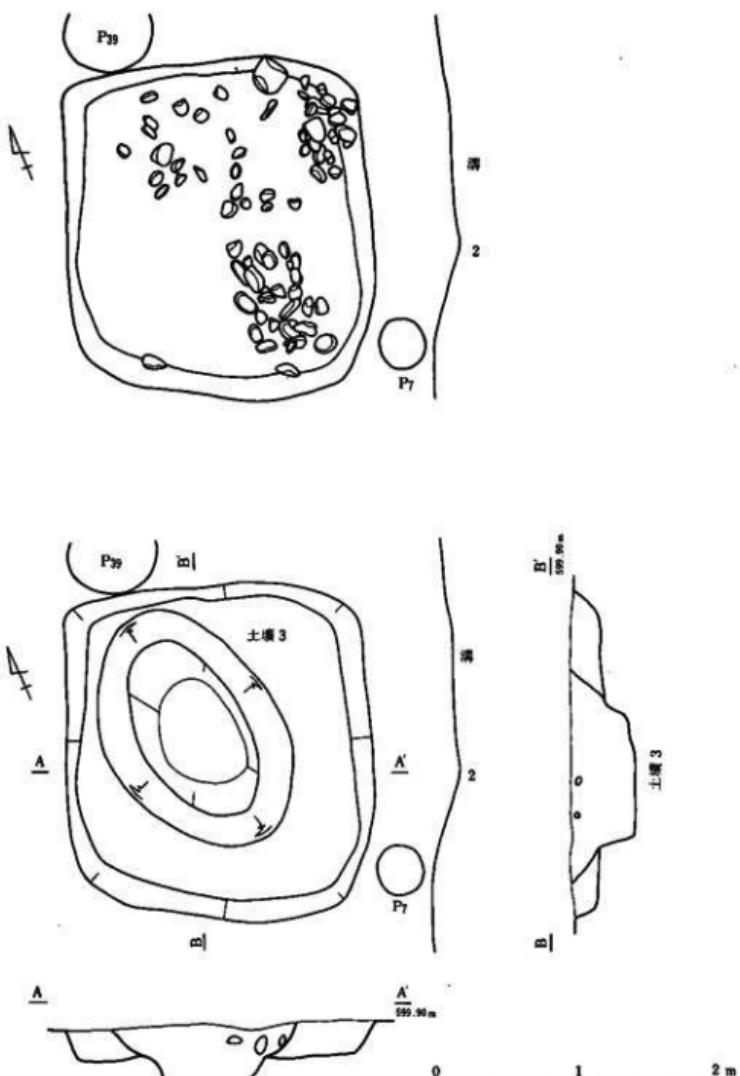


图 2 : 墓穴灰白色土 (多个砂粒)
土壤 3 : 砂砾混入暗黄灰色土

第21図 墓穴状造構(2)

4) 土壙・ピット

竪穴式住居址に伴うピット、建物址を構成するピット以外の穴を土壙・ピットとして扱った。発掘現場では直径か長軸が1mを越えるような比較的大形の穴を土壙、それよりも小さいものをピットとした。土壙4、ピット147を検出している。これらは若干の粗密はあるが調査地全体に分布している。以下、土壙と特徴的なピットについて記述する。

土壙1

位置：中央西寄り 新旧関係：なし 規模：156×95×12cm 平面形：不整橢円形
遺物：なし 備考：底面に10~15cm大の砾あり 時期：不明

土壙2

位置：中央やや東寄り 新旧関係：なし 規模：160×108×29cm 平面形：橢円形
遺物：縄文土器、須恵器の壊の破片が出土している 時期：不明

土壙3

位置：中央北西寄り 新旧関係：竪穴状遺構2より新しい
規模：175×120×43cm 平面形：橢円形 遺物：なし
備考：覆土上部には中~小礫が多く混じっている。これらの砾は、竪穴状遺構2を壊して本址が
掘り込まれた際に混入したものと考えている。

時期：不明

土壙4

位置：南西隅 新旧関係：なし 規模：160×88×11cm 平面形：橢円形
遺物：なし 時期：不明

ピット71

位置：中央 新旧関係：なし 規模：81×65×22cm 平面形：橢円形
遺物：弥生土器一甕

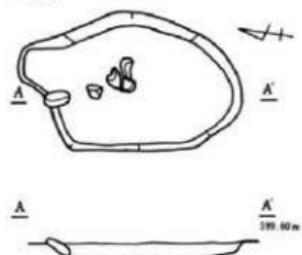
備考：土器は底面から18cm上で出土している。重機による削平の際に土器の一部が持ち去られて
しまったが本来は1個体分があったと思われる。条痕文系の變形土器の底部(21)~胴部
(67・68)を採集している。

時期：弥生時代中期初頭

その他のピット

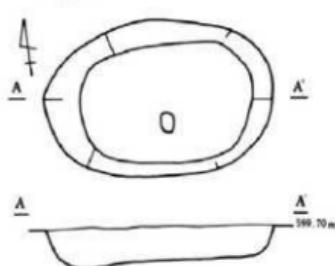
A地点ではピット71のほかに13基のピットから遺物(土器の小破片)が出土している。内訳はピット1~3・64・69・72・125から縄文土器が、ピット1・29・119から須恵器または土師器が出土している。また、種類は不明だがピット35・60・97・141からも土器が出土している。しかし、これらのピットについては出土土器から時期を推定することはできないと考えている。

土壤 1



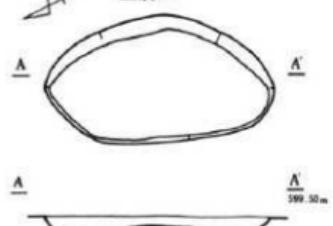
黄褐色土混入黑褐色土

土壤 2



暗黃褐色土(含砂質)

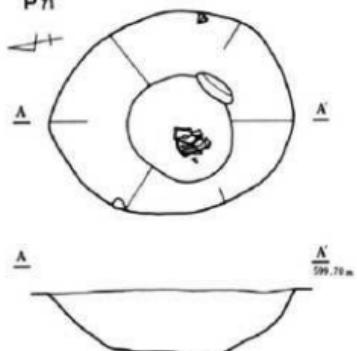
土壤 4



黃褐色土混入黑褐色土



P 71



暗黃褐色土



ピット71 遺物出土状況



第22図 土壌・ピット

5) 溝・自然流路

A 地点では溝 7 本と自然流路 1 本を検出している。実測図については、平面図は付図（A 地点全體図）を参照されたい。断面図は溝 1～5・7 と自然流路で、トレンチを設定して観察した土層図を次頁に掲載している。

溝 1

位置：北西部 新旧関係：P46より新、建物址 1・溝 2 より古 規模：長 15.8m・幅 0.8～1.4m
長軸方向：S-13°-W 遺物：縄文土器 時期：不明

溝 2

位置：北西部 新旧関係：溝 1 より新、柱列より古 規模：長 16.1m・幅 0.4～0.6m
長軸方向：S-15°-W 遺物：縄文土器 時期：不明

溝 3

位置：南西部 新旧関係：溝 4・7、P62・142・146 より古 規模：長 28.4m・幅 0.4～3.2m
長軸方向：S-13°-W 遺物：土師器 時期：不明

溝 4

位置：南西部 新旧関係：溝 3 より新 規模：長 13.0m・幅 0.2～1.8m
長軸方向：S-11°-W 遺物：弥生土器・須恵器（壺）・土師器
備考：弥生土器は中期初頭頃の壺の胴部破片と条痕文土器の破片 時期：不明

溝 5

位置：中央南 新旧関係：なし 規模：長 7.9m・幅 0.3～0.8m
長軸方向：S-5°-E 遺物：縄文土器・土師器・須恵器 時期：不明

溝 6

位置：中央東 新旧関係：なし 規模：長 3.4m・幅 0.2～0.4m
長軸方向：W-29°-S 遺物：なし 時期：不明

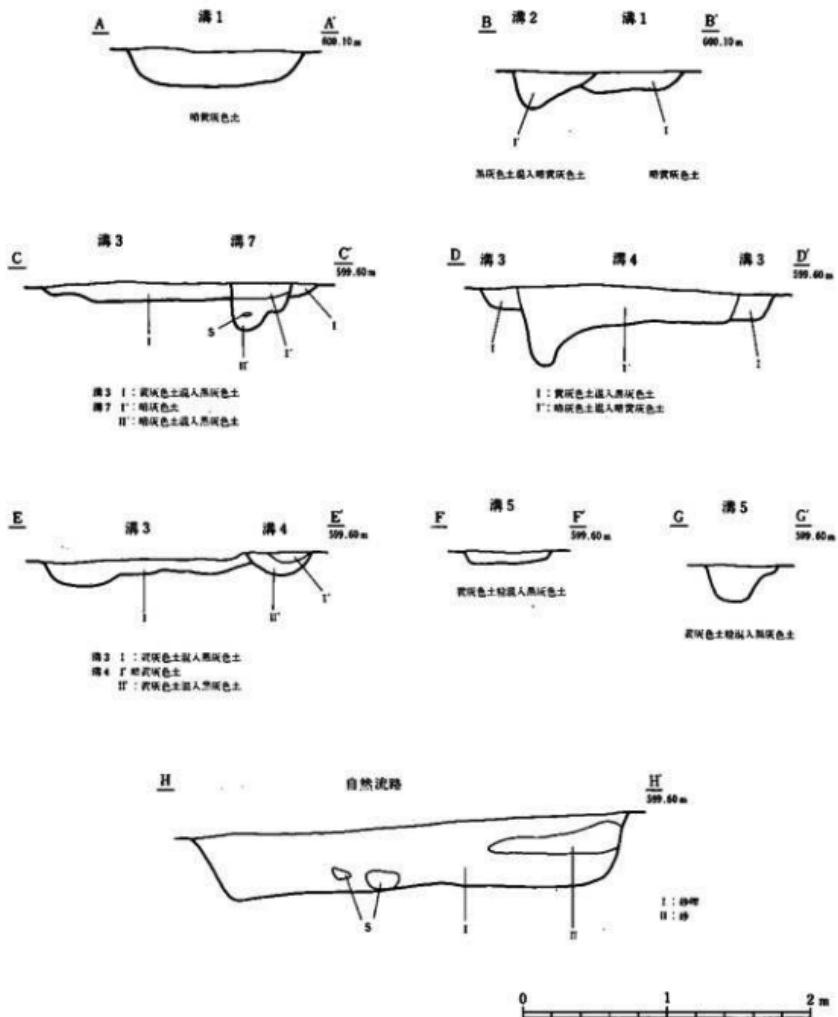
溝 7

位置：中央西 新旧関係：溝 3 より新 規模：長 7.6m・幅 0.2～0.5m
長軸方向：S-13°-W 遺物：なし 時期：不明

自然流路

位置：南東部 新旧関係：なし 規模：長 34.4m・幅 1.0～5.7m
長軸方向：S-30°-W 遺物：なし 時期：不明

以上の遺構は底面のレベル差、検出面の傾斜から北東から南西へ低く流れていたと考えられる。溝 1～4・7 は、ほぼ同じ長軸方向をとりつつも新旧関係にあることから、長期にわたって連続しながら存在した溝の可能性がある。溝からは縄文～平安時代の土器が出土している。しかし、検出面下の遺物包含層から遺物が混入した可能性もあり、時期を特定することはできなかった。



第23図 溝・自然流路

2. B地点

B地点は調査面積が小さく、遺構群の性格がよくわからなかつたので、出土したすべての遺構について実測図等のデータを掲載している。

1) 住居址

第1号住居址

位置：北西隅 新田関係：ピット27より古い 規模：南北1.06×東西1.26m

平面形：不明 主軸方向：不明

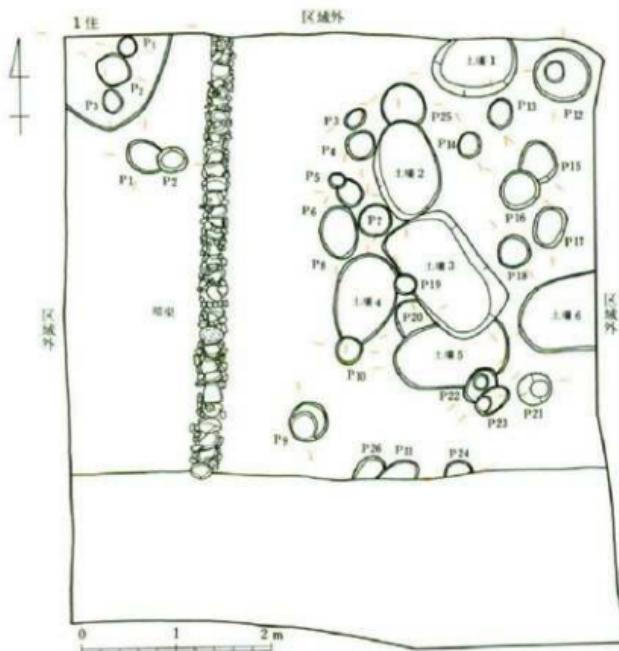
壁の状況：検出面からの最大壁高23cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

床の状況：暗灰色土で、堅くしまっている。

ピット：P₁-22×20×22cm、P₂-40×35×25cm、P₃-25×21×25cm

カマド：不明である。調査区域外にあると思われる。 遺物：土師器一甕、須恵器一小破片

出土状況：覆土中から少量出土している。 時期：不明



第24図 B地点遺構配置図

2) 土壙・ピット

土壙・ピットは調査区の東半分に集中している。これは、土壙・ピット群の西側に新しい時期の暗渠があることから擾乱を受けているためと思われる。B地点ではA・C地点に比べて土壙が集中していることに特徴がある。特に、近接するC地点で重複する住居址群が6軒も検出されているとの対象的である。しかし、遺構・遺物から性格を追求することはできなかった。

以下では、土壙のすべてと遺物を出土したピットについて記述する。

土壙 1

新旧関係：なし 規模：81×60×32cm 平面形：楕円形 遺物：須恵器一壺 時期：不明
土壙 2

新旧関係：P₂₅よりも新しい 規模：103×68×14cm 平面形：楕円形 遺物：須恵器一壺
時期：平安時代前期

土壙 3

新旧関係：土壙 5・ピット20よりも新しい、ピット19よりも古い 規模：140×78×14cm
平面形：長方形 遺物：なし 時期：不明

土壙 4

新旧関係：ピット10・19よりも古い 規模：90×65×15cm 平面形：楕円形 遺物：なし
時期：不明

土壙 5

新旧関係：ピット20よりも新しい、土壙 3・ピット22よりも古い 規模：124×66×11cm
平面形：楕円形 遺物：土師器一壺 時期：不明

土壙 6

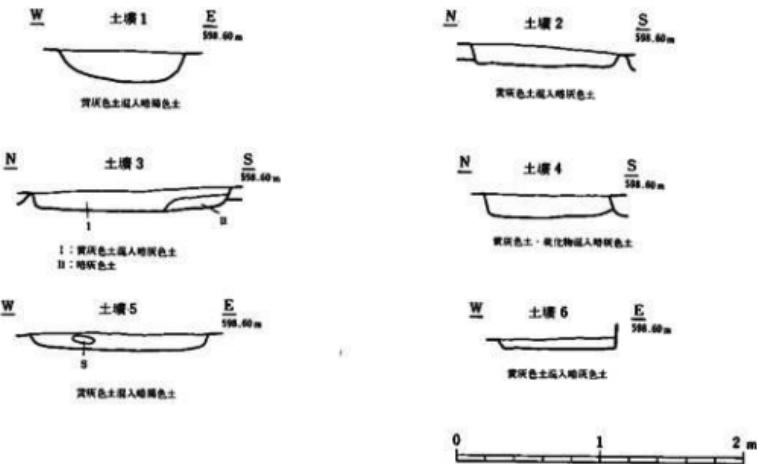
新旧関係：なし 規模：83×83×7cm 平面形：楕円形？ 遺物：なし 時期：不明

ピット12

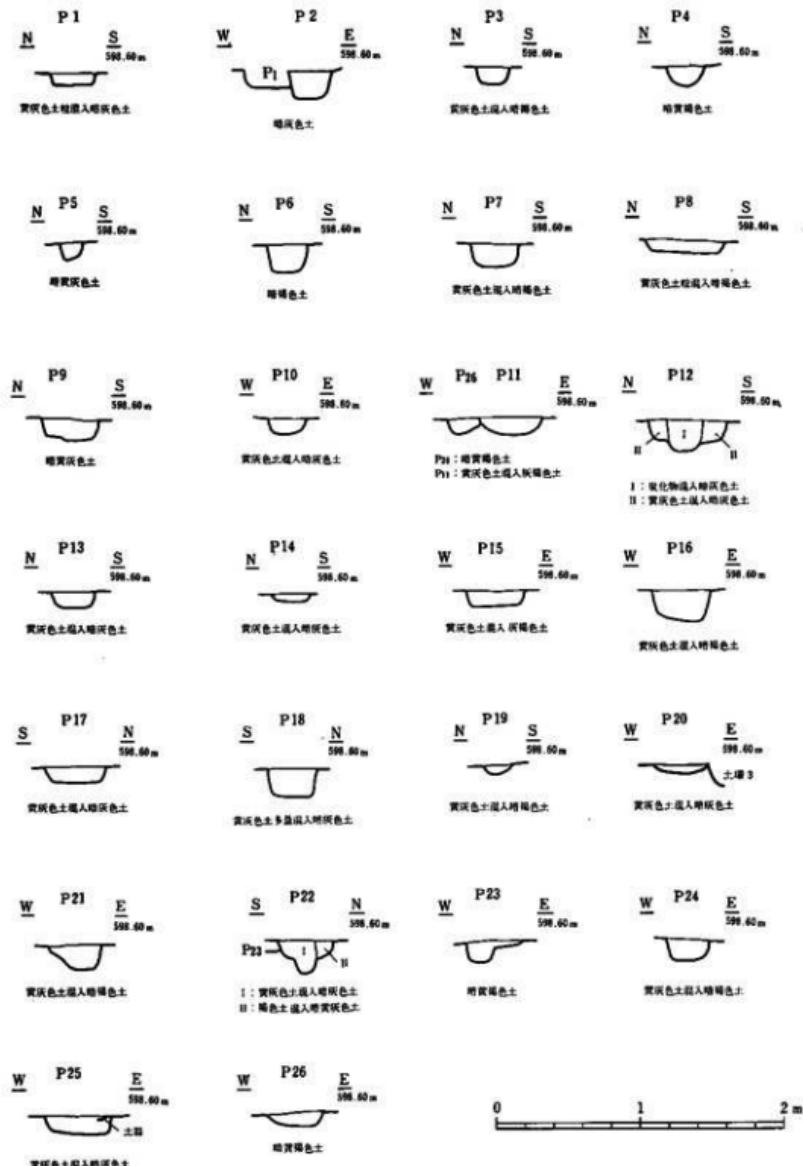
新旧関係：なし 規模：60×55×22cm 平面形：円形
遺物：土師器一壺(23)、須恵器一壺 備考：柱痕があり、柱部分が一段低くなる2段底のピットである。 時期：奈良時代前半（8世紀前半）

ピット25

新旧関係：土壙 2 より古い 規模：47×47×13cm 平面形：円形 遺物：土師器一壺
時期：不明



第25図 住居址・土壤

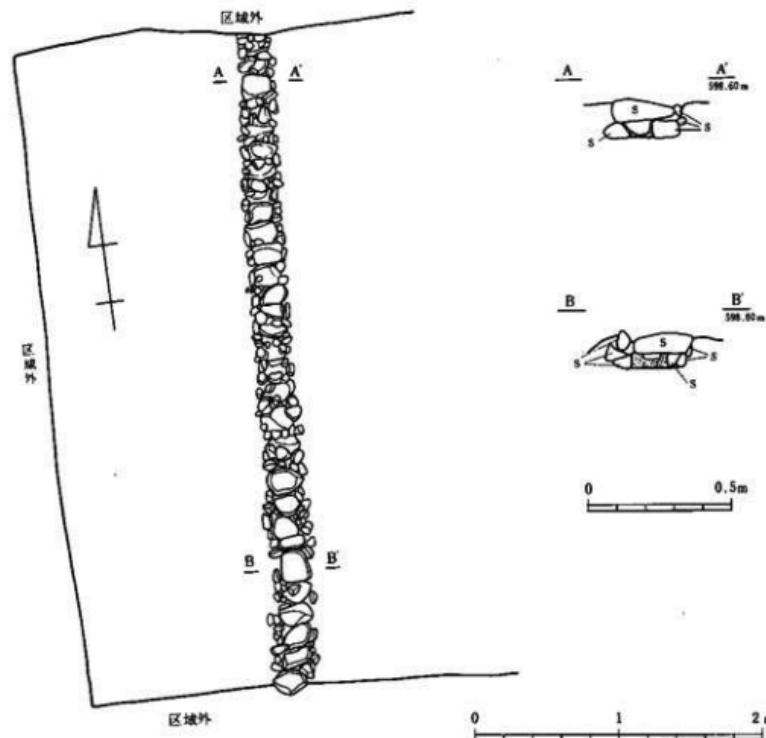


第26図 ピット

3) 暗渠

調査区内の西寄りで石組の暗渠が検出されている。長軸方向S—2°—Wで、ほぼ南北に伸びており、長4.58mを検出している。検出面は基本土層のII層中である。暗渠の構造は、5~10cm大の小形礫を約25cm間隔で両側に並べ、その上に偏平な大形礫を乗せている。2ヶ所で暗渠の断面観察を行ったところ、両側の小形礫から底部にかけて灰色粘土の堆積が見られた。なお、暗渠底面のレベル差はほとんどなかった。ただし、調査地点の地形の傾斜から本遺構は北から南へ低く傾斜していると考えている。暗渠付近からは近・現代と思われる瓦の破片が出土している。

こうした石組暗渠はC地点でも確認されている。又、A地点の南側でも、ほ場整備の工事の際に同様な暗渠が見られた。おそらくは神田地区内の水田下にはこうした暗渠が多く存在していると思われる。地元の高齢者の中には、排水のため石組暗渠を埋設した記憶のある方がいることから、本遺構は近世~近代にかけて比較的新しい時期に作られたものと考える。



第27図 暗渠

3. C地点

1) 住居址

第1号住居址

位置：北端（北側は区域外） 新旧関係：暗渠・土壌2・ピット1～4よりも古い

規模：南北1.06×東西3.45m 面積：3.36m² 平面形：不明 主軸方向：不明

壁の状況：区域外にかかる部分での土層観察によると、III層（灰褐色土）から掘り込まれている。

最大壁高は42cmで、壁は斜めに立ち上がる。

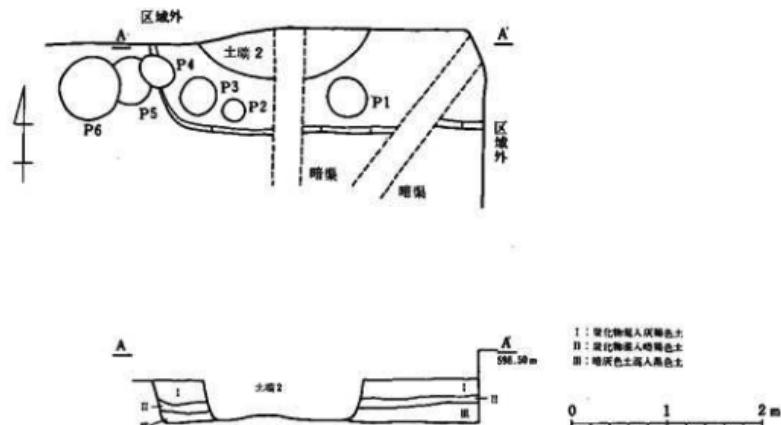
床の状況：南から北へ低く傾斜している。黒色土がまだらに混じる暗灰色土。

ピット：なし カマド：検出されなかった。

遺物：なし

備考：本址は調査面積が小さいうえに、多くの遺構に切られていることから、十分な調査を行えなかった。覆土の色調がC地点の他の住居址のそれとは異なる点、床面に傾斜がみられる点から本遺構を住居址とするには問題があるかもしれない。

時期：不明



第28図 第1号住居址

第2号住居址

位置：西端 新旧関係：3住・ピット20よりも新しい、ピット29よりも古い

規模：南北3.10×東西3.48m 面積：9.98m² 平面形：不整方形

主軸方向：E—3°—S

壁の状況：検出面からの最大壁高は19cmである。壁は急角度で立ち上がる。

床の状況：暗褐色土でやや砂質ではあるが、堅くしまってはいない。

ピット：P₁-39×26×20cm、P₂-20×20×8cm、P₃-38×30×12cm、P₄-40×27×9cm、

P₅-28×14×6cm、P₆-19×15×7cm、P₇-35×34×8cm、P₈-43×43×5cm、

P₉-48×32×14cm、P₁₀-38×30×12cm、P₁₁-35×32×11cm、P₁₂-22×21×14cm

ピットの配置からP₃・P₇・P₈・P₁₁は主柱穴と考えられる。ただし、いずれも床面から底までが浅い点に疑問が残る。なお、P₄・P₅は主柱穴に關係する可能性がある。

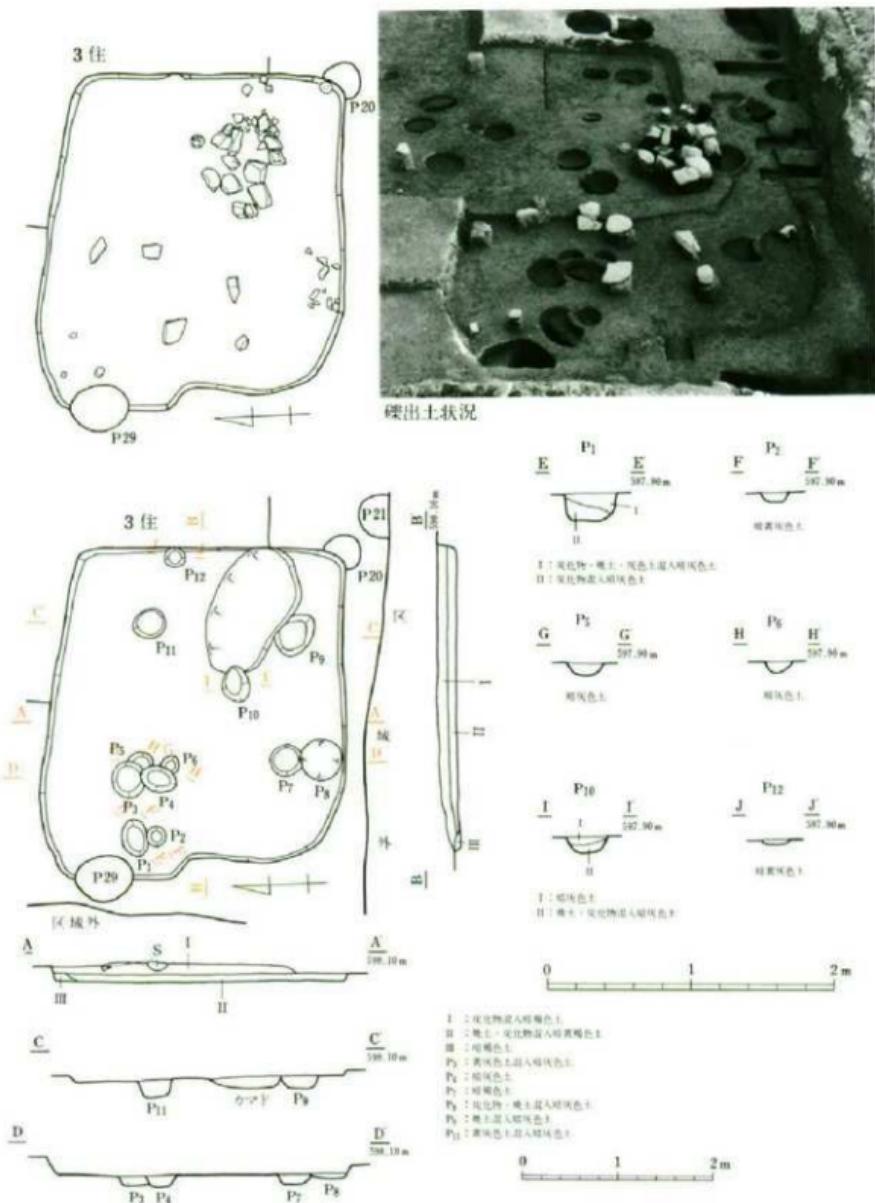
カマド：位置一住居址東壁南寄り 構造一石組カマド

住居址内には、床面直上から15cm上の範囲で人頭大から30cm大の河原石が散乱していた。これらの中には被熱礫があることから、カマドを構築していた石材の可能性が強い。また、カマド本体は構築材の石が崩れているうえに、カマドの掘りかたが主柱穴と考えているP₉を破壊している。このことから、本址のカマドは廃絶後に人為的に壊されてしまったものと思われる。なお、カマド内からは、焼骨が若干出土している。

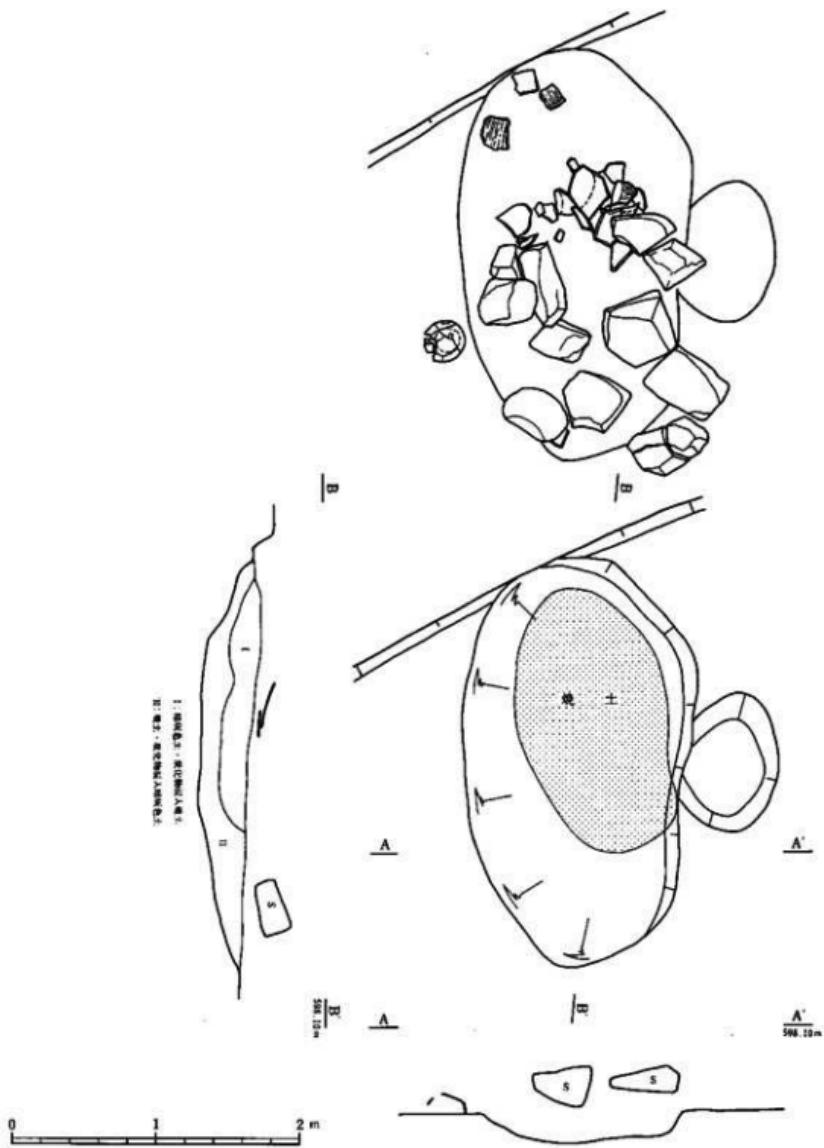
遺物：土師器一窯・小形甕、須恵器一坏

出土状況：遺物の出土は少ない。カマドの北側の床面上からは須恵器の坏（25）が伏せた状態で出土している。また、住居址の南東隅からは墨書のある須恵器一坏（27）がほぼ完形で出土している。

時期：平安時代前半（9世紀前半）



第29図 第2号住居址



第30図 第2号住居址カマド

第3号住居址

位置：西側（2住の東側） 新旧関係：2住よりも古い

規模：南北3.35×東西3.20m 面積：10.36m² 平面形：方形

主軸方向：W-4°-N

壁の状況：検出面からの最大壁高は26cmで、壁は急角度で立ち上がる。

床の状況：暗黄褐色土で非常に堅く、しまっている。

ピット：P₁-44×35×11cm、P₂-37×34×17cm、P₃-45×37×15cm、P₄-35×30×9cm、

P₅-17×17×3cm、P₆-35×32×6cm、P₇-27×23×12cm、P₈-35×34×12cm、

P₉-34×33×4cm、P₁₀-40×37×18cm、P₁₁-25×24×11cm、P₁₂-17×15×8cm

ピットの配置からP₁・P₂・P₃・P₄は主柱穴と考えられる。

カマド：位置一住居址西壁中央 構造一不明（第2号住居址によって破壊されている。）

遺物：土師器一甕・小形甕・坏、須恵器一甕・広口甕・高坏・鉢

出土状況：遺物の量としては多くはないが相対的に床面上からの出土が多い。住居址北半の床面

直上からは、須恵器一甕（38）の大破片が散乱した状況で出土している。また、P₉

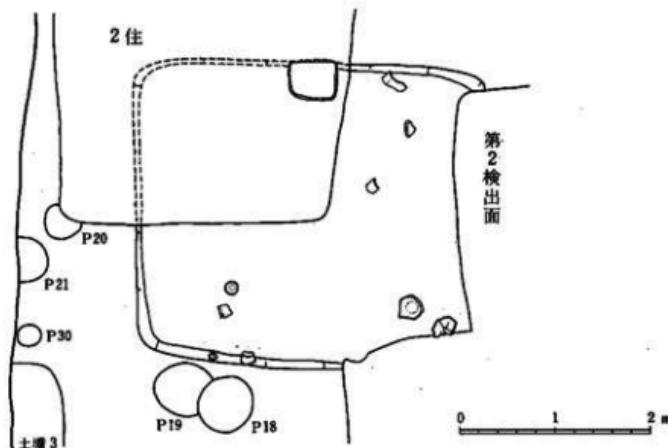
の西側に接して佐波理鉢を模倣したと考えられる須恵器の鉢（33）が出土している。

高坏は覆土からの出土である。

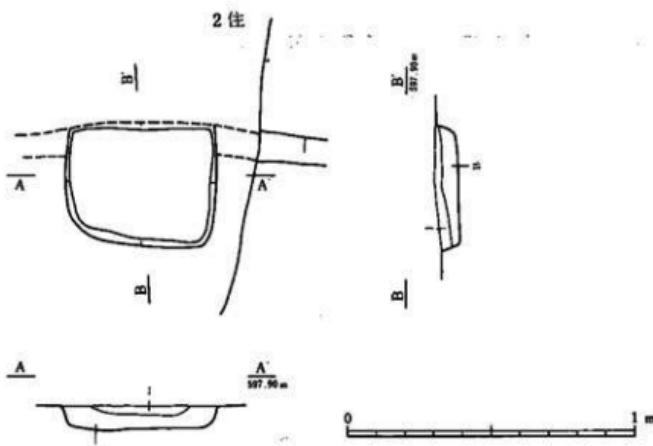
備考：今回のA～C地点の中で、本址のカマドのみ西壁に設けられていた。なお、本址の床面は

第2号住居址よりも低いため、2住の床面で本址のカマドを検出することができた。しかし、カマドの上部は破壊されているので、構造は把握することができなかった。

時期：奈良時代後半（8世紀中頃～後半）

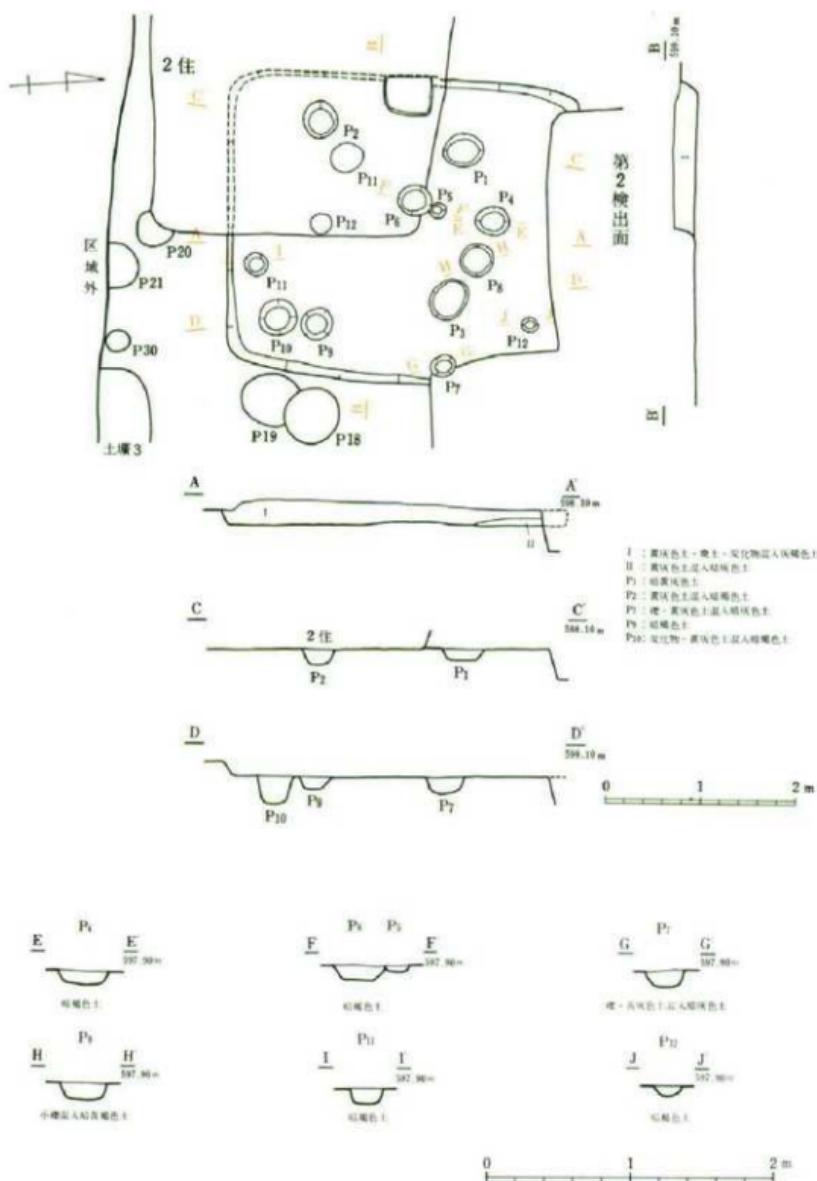


カマド



I: 地下
II: 地上・炭化物少量混入褐色土

第31図 第3号住居址(1)・同カマド



第4号住居址

位置：中央南端（南側は区域外） 新旧関係：5住よりも新しい、土壌3よりも古い

規模：南北3.00×東西3.50m 面積：9.66m² 平面形：方形

主軸方向：E-7°-S

壁の状況：検出面からの最大壁高は19cmで、壁は斜めに立ち上がる。

床の状況：焼土・炭化物を含む暗黄褐色土で、堅くしまっている。

ピット：P₁-60×29×13cm、P₂-47×47×10cm、P₃-45×42×10cm、P₄-46×43×15cm、

P₅-30×25×8cm、P₆-36×33×5cm、P₇-43×40×6cm、P₈-23×20×11cm、

P₉-26×23×11cm、P₁₀-48×46×14cm、P₁₁-41×36×17cm

ピットの配置からP₁・P₂・P₃・P₄は主柱穴と考えられる。これらのピットの覆土はいずれも焼土・炭化物を含む暗灰色土である。しかも、焼土・炭化物はピットの上面から底部にかけて見られるので、これらは主柱穴を埋めたときからのものと考えている。

なお、P₁₀も同じ覆土であること、P₄-P₇のライン上にあることから、住居の柱構造に關係するピットの可能性がある。

カマド：位置一住居址東壁中央 構造一粘土カマドか？

遺物：土師器一甕、須恵器一壺・蓋・壺

出土状況：遺物の量は少ない。主に住居址の東半部からの出土であるが、特にカマド周辺に土師器の甕が多くみられる。また、P₁付近から須恵器の壺（39）が出土している。なお、この壺の底部には判読不明（「邪？」）の墨書きがみられる。そのほかの遺物は床面上4~15cmから須恵器の蓋・壺をはじめ少量の土器が出土している。

時期：平安時代初頭（8世紀末~9世紀前半）

第5号住居址

位置：中央東寄り（4住の東側） 新旧関係：6住・ピット24よりも新しい、4住よりも古い

規模：南北3.25×東西5.57m 面積：17.18m² 平面形：方形

主軸方向：E-6°-S

壁の状況：検出面からの最大壁高は28cmで、壁は急角度に立ち上がる。

床の状況：焼土・灰・炭化物を含む黄灰~黄褐色土で、堅くしまっている。

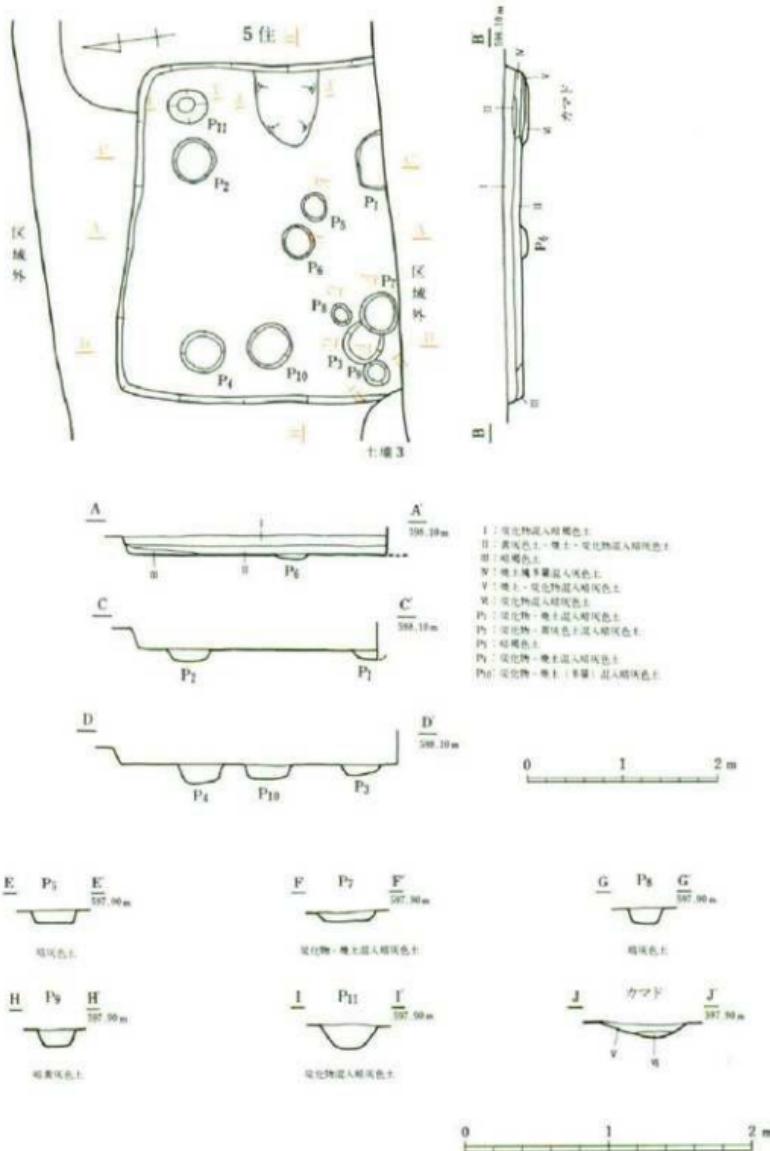
ピット：P₁-42×42×23cm、P₂-30×30×23cm、P₃-51×50×10cm、P₄-44×35×17cm、

P₅-52×50×22cm、P₆-42×33×13cm、P₇-41×38×13cm、P₈-43×38×23cm、

P₉-30×25×14cm、P₁₀-45×43×18cm、P₁₁-48×42×14cm、P₁₂-70×50×12cm、

P₁₃-20×20×14cm、P₁₄-35×32×13cm、P₁₅-50×50×21cm、P₁₆-32×12×10cm、

P₁₇-50×23×7cm、P₁₈-75×70×43cm、P₁₉-15×15×11cm、P₂₀-20×19×15cm



第33図 第4号住居址

ピットの配置から P_1 ・ P_3 は主柱穴と考えられる。4住と同様に覆土は焼土・炭化物の混入が認められる。なお、 P_2 には柱底があり、 P_5 は2段底のピットになるので、これらは補助柱穴の可能性がある。

本址では 20 のピットが検出されている。他の奈良・平安時代の竪穴式住居址に比べて異常に多い数である。本址よりも古い時期のピットが床面で検出されている可能性も一部にはあるかもしれないが、多くは住居に伴うピットと考えている。住居の構造を中心とした考察の必要性を感じている。

カマド：位置—東壁中央 構造—石芯粘土カマド

カマドは南側に花崗岩 1 個が構築材として使用され、北側の石材は抜き取られていた（VI層）。カマド上面では土師器：甕（55）がつぶれた状態で出土している。カマド中央では安山岩の支柱石が確認できた。なお、この支柱石には甕（53）の底部をさかさまにしてかぶせてあった。上面の土師器を取り上げた段階で、カマドを精査したところ、平面・断面で I～VI 層の土層が確認できた。これらから本址のカマドの構築方法を次のように考えた。第 1 はカマドを構築する場所に大きめの穴を掘り、かまと石を据えた後、北側を埋める（V 層）。これはカマド石を固定するため、または穴を大きく掘りすぎたための措置と考えている。その後、II・III 層を埋めてカマド石の内側を固定する。その後、支柱石を据えている。なお、この際にIV 層で支柱石を固定している可能性がある。

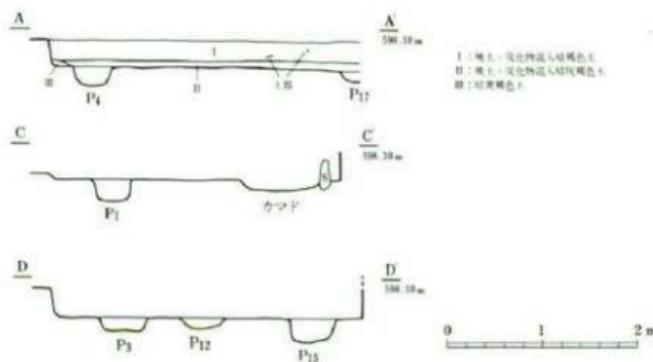
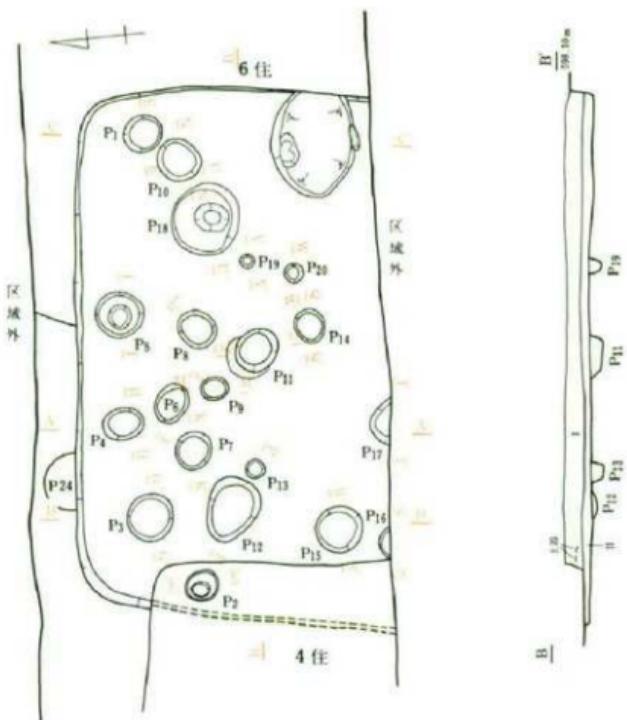
I 層については、焼土・炭化物を含まないことから、カマドを構築していた粘土と考えている。ただし、支柱石が据えられている II・III 層は焼土・炭化物を含むことから、本址のカマドは 2 度以上にわたって作り替えられていた可能性がある。

遺物：土師器一甕、須恵器一坏、蓋・広口甕・瓶

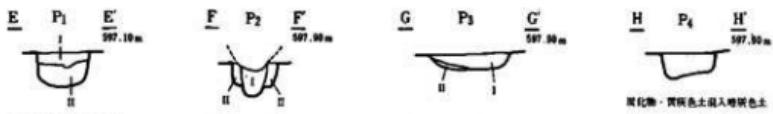
出土状況：カマド以外の遺物、礫は、床面直上～7 cm 上にかけて住居内に散在しているが、特に住居の西半部に多い。須恵器の広口甕 3 点（49～51）が区域外にかかる南西部に集中している。また、 P_{12} の覆土から底面にかけて土師器一甕の破片 6 点が出土している。

備考：本址のカマドは北側の石を抜き取られてはいたが、カマドの構築法を伝える良好な資料と考えられる。また、カマド内出土の甕は確実に本址に伴う土器として捉えることができる。

時期：奈良時代（8世紀前半頃）



第34図 第5号住居址

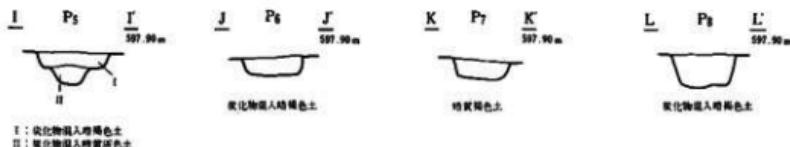


I: 硫化物混入暗灰色土
II: 硫化物混入暗黄褐色土

I: 铁土混入暗黄褐色土
II: 铁土混入暗褐色土

I: 铁土、硫化物、黄灰色土混入灰色土
II: 硫化物混入暗褐色土

硫化物·黄灰色土混入暗褐色土

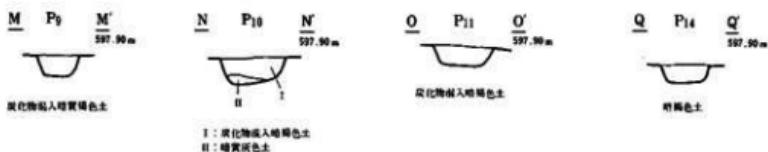


I: 硫化物混入暗褐色土
II: 硫化物混入暗黄褐色土

硫化物混入暗褐色土

暗褐色土

硫化物混入暗褐色土

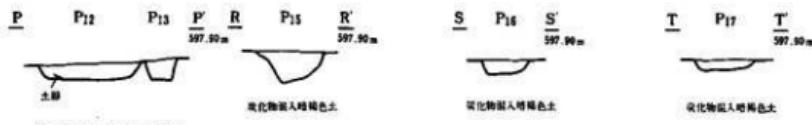


硫化物混入暗黄褐色土

I: 硫化物混入暗褐色土
II: 暗黄褐色土

硫化物混入暗褐色土

暗褐色土



土壤

P₁₂: 铁土、硫化物混入暗褐色土
P₁₃: 硫化物混入暗黄褐色土

硫化物混入暗褐色土

硫化物混入暗褐色土

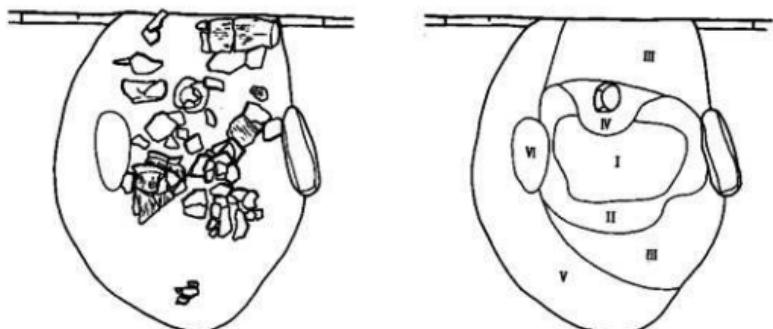


硫化物·黄灰色粘土混入暗褐色土

黄灰色粘土混入暗褐色土

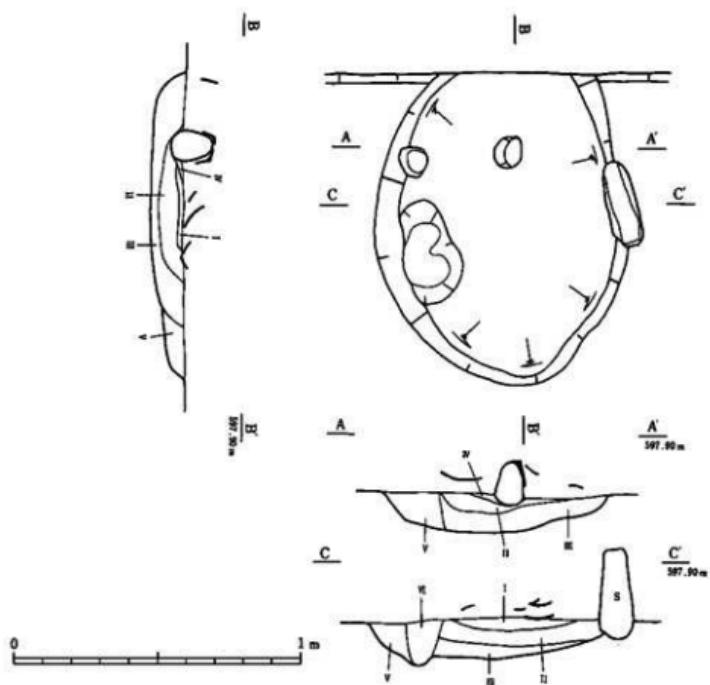
0 1 2 m

第35図 第5号住居址ピット

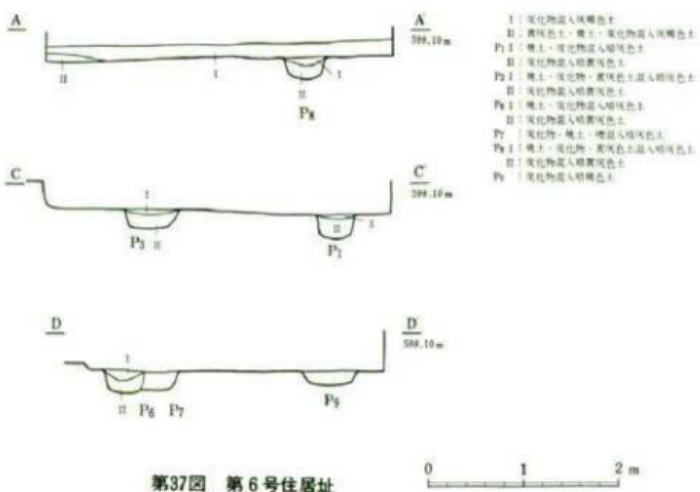
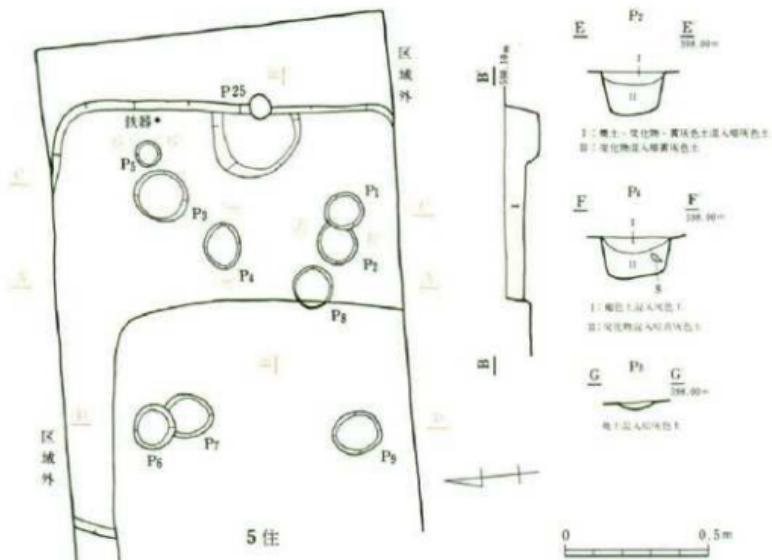


遺物出土状況

I : 黄色埴土
II : 線土
III : 塗土・炭化物混入灰土
IV : 線土・鐵器混入褐灰色土
V : 線土・灰化物混入褐灰色土
VI : 塗土・炭化物混入褐灰色土



第36図 第5号住居址 カマド



第37図 第6号住居址

第6号住居址

位置：東端（5住の東側、南側は区域外） 新旧関係：5住、ピット25・28より古い

規模：南北3.65×東西4.57m 面積：8.68m² 平面形：方形

主軸方向：E-7°-S

壁の状況：検出面からの最大壁高は19cmで、壁は斜めに立ち上がる。

床の状況：焼土・炭化物を含む黄灰色土まじりの暗褐色土。

ピット：P₁-42×39×29cm、P₂-45×42×29cm、P₃-58×53×20cm、P₄-50×38×28cm、

P₅-28×27×5cm、P₆-47×43×24cm、P₇-47×41×21cm、P₈-46×41×21cm、

P₉-57×47×16cm

ピットの配置からP₁・P₃・P₆・P₉は主柱穴と考えられる。なお、柱痕は検出されなかった。

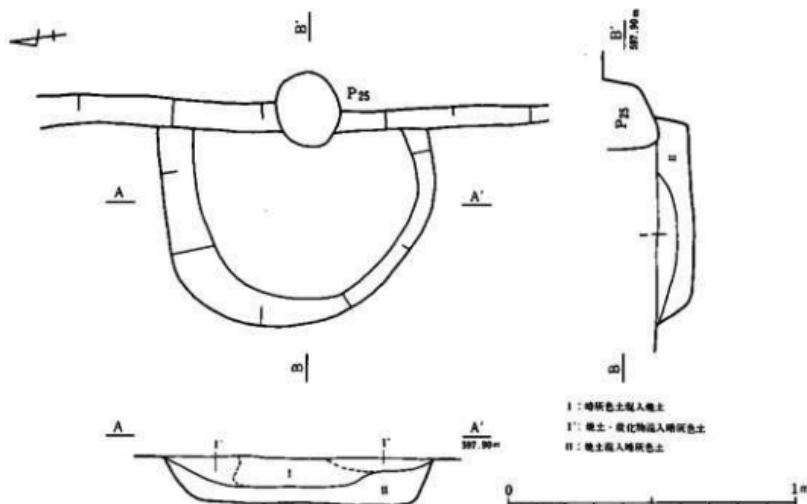
カマド：位置—東壁中央 構造—粘土カマド

遺物：土師器一甕・小形甕、須恵器一壺・甕、鉄器（紡錘車の軸）

出土状況：カマド周辺の床面～床上15cmに遺物が集中している。鉄器はカマド北側の壁際、床面上から出土している。

時期：奈良時代～平安時代初頭

本址は発掘時の所見から第5号住居址よりも古いと考えている。しかし、出土土器から推定される年代は8世紀末～9世紀前半で先の所見とは異なっていることを付記しておく。



第38図 第6号住居址カマド

2) 土壙・ピット

土壙 4 基、ピット 30 基が検出されている。このうち、土壙 4 とピット 27 は他遺構の検出面よりも 1 段低いところで検出されているので別項で扱うこととした。伴出遺物がほとんどないことから、遺構の時期を推定できるものは少ない。ただし、土器から推定される数少ない土壙・ピットの時期は 8 世紀後半～9 世紀前半のものが多く、住居址群の時期と隔たりはない。

以下、土壙 1～3 と遺物を出土したピットについて記述する。

土壙 1

新旧関係：なし 規模：70×67×8cm 平面形：橢円形 遺物：なし 時期：不明

土壙 2

新旧関係：第 1 号住居址より新しい、暗渠より古い 規模：180×52×32cm

平面形：橢円形？ 遺物：なし 時期：不明

土壙 3

新旧関係：第 4 号住居址より新しい 規模：163×52×31cm 平面形：方形？

遺物：土師器の小破片、須恵器一坏（62） 備考：覆土中に被熱している花崗岩の礫がある。

時期：平安時代初頭（8 世紀末～9 世紀前半）

ピット 24

新旧関係：5 住より古い 規模：59×56×34cm 平面形：円形 遺物：須恵器一蓋（63）

時期：平安時代初頭（8 世紀末～9 世紀初頭）

ピット 29

新旧関係：第 2 号住居址より新しい 規模：60×48×55cm 平面形：橢円形

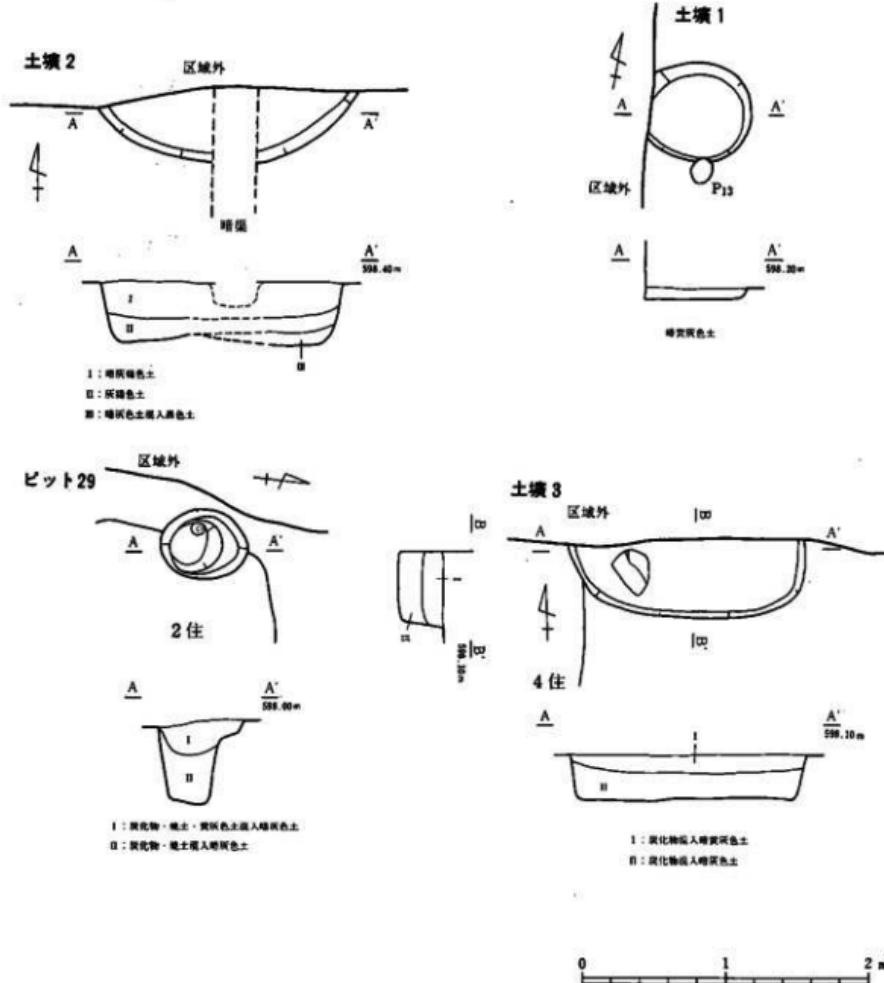
遺物：須恵器一坏（64） 備考：須恵器の坏はピットの底面に伏せた状態で出土している。

時期：平安時代初頭（8 世紀末～9 世紀初頭）

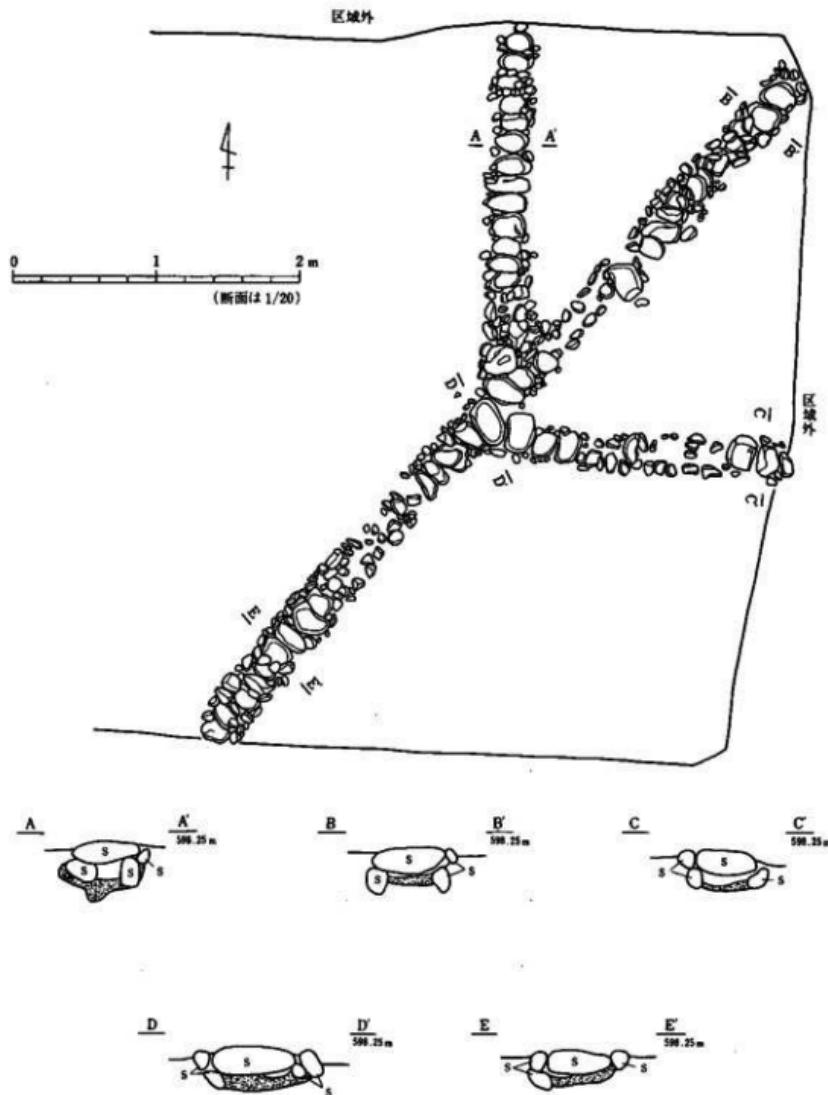
3) 暗渠

調査区の北側で石組暗渠が検出されている。検出面は基本土層の II 層中である。暗渠は 3 方向から伸びてきたものが途中で合流して南西へ伸びている。調査区南壁では石組の断面が確認されているので南北の区域外へ続いていると考えられる。個々の暗渠の方向・規模は北側暗渠が長軸方向：S-1°-W で規模：長 2.70m・幅 0.3m、中側暗渠が長軸方向：S-39°-W で規模：長 6.22m・幅 0.25-0.38m、南側暗渠が長軸方向：W-2°-N で規模：長 2.26m・幅 0.28m である。なお、3 つの暗渠が合流しているところより南は暗渠の幅が若干広くなっている。

暗渠の構造は C 地点の暗渠と同じで、おそらくは排水用の暗渠であると考える。なお、5ヶ所で断面観察を行ったが暗渠底面のレベル差はほとんどなかった。出土遺物がなく築造時期は不明であるが、C 地点の暗渠と同じ比較的新しい時期のものでないかと思われる。



第39図 土壌・ピット



第40図 増築

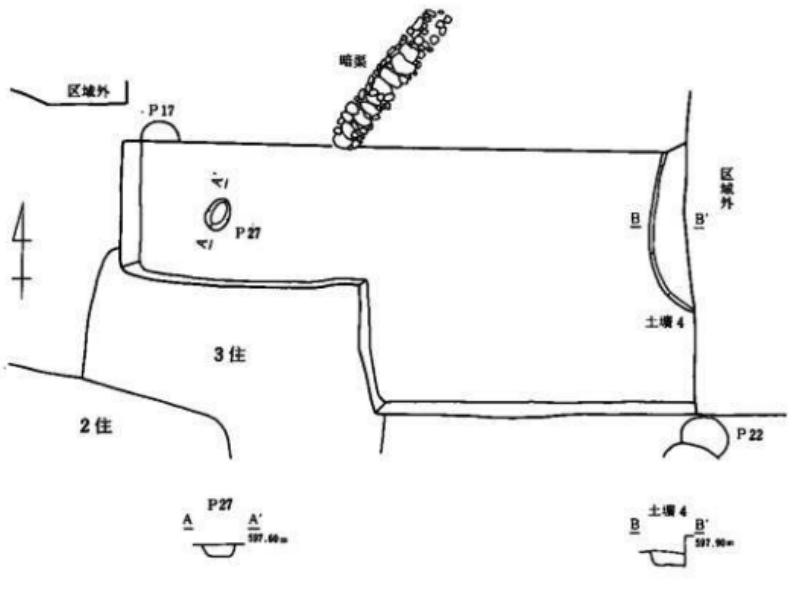
4) 第2検出面

B・C地点の竪穴式住居をはじめとする遺構群は、基本土層（P. 21～23参照）のIV層が遺構検出面となっている。C地点ではこの遺構検出面より下の、基本土層のVI層中で別の遺構検出面を確認することができたので、第2検出面と呼ぶことにした。これは、C地点の土層堆積状況を確認するため重機で深掘りした際に判明したものである。検出面間の比高差は約25～40cmである。

第2検出面では土壙・ピットがそれぞれ1基（土壙4・ピット27）検出されている。また、基本土層V層から検出面にかけて土師質の土器・黒曜石の剥片が採集されている。おそらくは遺構の掘り込みはV層中からと思われるが、暗褐色土のため遺構覆土との区別が難しいと考える。

土壙4は検出面の東端に位置する大形の土壙であるが、大部分が区域外にあるため一部を調査したにとどまった。規模は(167)×(37)×15cmで、平面形は不明である。

ピット27は検出面の西寄りに位置し、規模が35×24×14cmの精円形のピットである。出土遺物がないので時期は不明である。



第41図 第2検出面

第3節 遺物

1. 土器

8棟の竪穴住居址・土壙・ピットおよび検出面から縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器が出土した。このうち図化・提示できたもの65点、拓影2点である。図化・提示できたものについて造構ごとに概観したい。尚、分類が必要なものについては参考文献1の土器分類に従い、縦年観・年代観には同文献および参考文献2を用いた。

(1) A地点第1号住居址出土土器 (第42図1~3)

土師器のみ3点、器種は壺(1)と塹(2・3)。調整はいずれもロクロナデで、2・3の高台は底面回転糸切りの後に貼り付けた付け高台である。3の内面には放射状のヘラミガキと黒色処理が施されている。

口径の小さい壺や内面をヘラミガキしない壺の存在から、平安時代中期11世紀中頃~後半の土器と考える。

(2) A地点第2号住居址出土土器 (第42図4)

内外を黒色処理した土師器(黒色土器)の耳皿1点のみ。付け高台と耳部の湾曲を成形した後、体部内面と耳部外面にヘラミガキを施す。平安時代中期11世紀中頃~後半の土器であろう。

(3) A地点第3号住居址出土土器 (第42~44図5~20)

土師器は壺のみ5点(14~18)、須恵器は壺8点(5~7・9~13)・蓋1点(8)・甕2点(19・20)、計16点を図示・提示した。全形を知ることのできる個体が多く秀逸な資料である。

須恵器の壺には、底面に手持ちヘラケズリの加えられる壺B(5~7・9・10)と、高台を持つ壺C(11~13)の2器種が存在する。壺Bは口径・器高ともほぼ同一の寸法に収まる規格製の強いものであるが、壺Cには11・12に対して口径・器高とも一回り大きく深い13が存在する。製作手法の上では、壺Bは共通してヘラケズリによってロクロからの切り離し痕が消されるが、6の底面中央にわずかに回転糸切り痕が観察できる。壺Cも同様に切り離し痕が回転ヘラケズリで削り取られているが、11の中央にやはりわずかに回転糸切り痕が窺える。

須恵器蓋はつまみを欠いているが、天井部外面の2/3以上に回転ヘラケズリが施され、凹凸が少なく低いドーム状の天井部から続く端部の屈曲は外面にまだしっかり残が残る外形がよくわかる。口径15.2cmは壺Cの11・12と組み合わさる蓋であることを示す。

土師器の甕は全形のわかるもの3点、口縁部形態のわかるもの1点あり、そのいずれもが異なる様相を呈している。14は胴部最大径が上半のかなり高い位置にあり、口縁部は強く外反する外形を呈す。器面調整は胴部外面が縦のハケメ、内面が縦のナデ後横の工具ナデで行われるが、外面のハケメは非常に細かく、かつ丁寧である。17も口縁部が強く外反し、胴部最大径が上半にある点は同

様だが、下半の底部より 5 cmばかり上にも稜がある。器面調整は胴部上半にカキメあるいは板状工具をカキメと同じに用いたもの、下半に同工具による縦のナデが行われている。18は胴部の張りが強く最大径は中位のやや上くらいにある。器面調整は外面が斜めから縦のハケメ、内面が縦のナデで、器厚が薄く仕上げられている。胴部上半以上が残存する15は、まったく頭部のくびれがなく、強いヨコナデによって外反する口縁部が形成されている。器壁は厚手で器面調整はナデによる。

須恵器の甕は小形の広口甕（19）と中形の短頸甕（20）で、19は胴部下端にタタキメとケズリ、それ以上はロクロナデされ、20は胴部全面にタタキメが及ぶが焼成軟質で橙色系統を呈し摩滅が進んでいる。

以上の土器のはほとんど（7・8・12を除く）はカマド内・カマド上面とその周辺から出土したので、きわめて一括性の高い土器群といえる。時期は、須恵器の坏がすべて坏Bであること、土師器の甕に多様性があることなどから考えて奈良時代8世紀の前半から中頃としたい。

（4）C地点第2号住居址出土土器（第45図24～31）

土師器坏1点、須恵器坏3点、土師器小形甕1点、同甕3点を図化・提示。

土師器坏（24）は内黒土師器で、ロクロナデ・内面は横位のヘラミガキで調整される。25・27の須恵器坏は台のないもの。27は底面に回転糸切り痕を有する（坏D）のに対し、25の底部はやや丸底気味に突出し、底面に回転ヘラケズリ痕がのこる（坏B）。26の須恵器の有台坏（坏C）は、高台の内側に稜をもち、底面は回転ヘラケズリ。

土師器小形甕（28）は胴部球形を呈し、口縁部内面と胴部外面にカキメが施される典型的なもの。甕（29～31）は長胴形を呈すもので、胴部上半に最大径をもつ。器面調整は胴部外面が縦のハケメ、内面が縦のナデ、口縁部は内面カキメ、外面がそれに伴うロクロナデ・ヨコナデで、とにかく全体的に薄く仕上げられている。

須恵器坏25・26は本址の他の土器よりも古い要素をもち、同時に使用・廃棄されたものとは、考えられない。本址に切られる第3号住居址に伴う遺物であったと推定する。本址本来の土器は土師器のロクロナデの坏があること、同甕・小形甕の様相から平安時代前期9世紀前半のものと考える。

（5）C地点第3号住居址出土土器（第46図32～38）

土師器坏1点、須恵器鉢1点、同高坏1点、土師器小形甕1点、同甕1点、須恵器甕2点、計7点を図化・提示。

土師器坏（32）は内黒土師器で体部内面に細かいヘラミガキがある。外面は摩滅が激しく観察不能。須恵器鉢（33）は内外面をロクロナデで丁寧に仕上げ、底面には手持ちヘラケズリが行われている。金属器の鉢を模した外形と推定する。同高坏（34）は脚端部一帯の破片だが、おそらく2個一組で4単位になると見られる「透し」の下端が観察できる。

土師器小形甕（35）は基本的にロクロ調整で、外面にカキメがあるが、胴部下端には回転ヘラケズリが、また底面には手持ちヘラケズリが行われている手の込んだもの。土師器甕（36）はたぶん

長胴形を呈し、調整は胴部外面ハケメ、内面ナデ・指オサエ、口縁部ヨコナデ。かなり薄手に仕上げられている。須恵器壺には広口壺（37）と長頸壺（38）の2器種がある。38はほぼ全形がわかる優品で胴部をタタキ目が覆うが、内面の当て具痕は擦り消されておらず、一見ハケメのような細い平行線が走っている。胴部外面下端はケズリ状の強い工具ナデ、底面には木葉圧痕が残る。

これらの土器の年代は、須恵器に壺Bがあること、壺の口縁部内面にカキメが見られないことなどから、奈良時代8世紀の中頃から後半にかけてと推定する。

(6) C地点第4号住居址出土土器（第47図39～44）

須恵器壺3点、同蓋1点、同壺（短頸壺？）1点、土師器壺1点の計6点を図化・提示。

39の須恵器壺は底面回転糸切り（壺D）で、墨書きがある。40・41は須恵器の有台の壺Cで、41の底面は回転ヘラケズリ。42の同蓋は天井部の中心から2/5程を回転ヘラケズリ、端部はわずかに盛り上がって届曲部は嘴状を呈す。

須恵器の壺（43）は口縁部を欠き全形がつかめないが、もうわずか外反して端部に至る口縁の短頸壺と推定される。突出気味の底面はヘラ切り後ナデ。土師器壺（44）は口縁部一帯の破片だが他例からみて長胴形になる。器面調整は胴部外面ハケメ、内面ナデ、口縁部外面ロクロナデ・ヨコナデ、内面カキメが行われている。

本址の土器群は、須恵器壺が壺Dであること、土師器壺の口縁部内面にカキメが見られることから、平安時代の初期8世紀末から9世紀前半に位置付けられると考える。

(7) C地点第5号住居址出土土器（第47・48図45～55）

須恵器壺1点、同蓋1点、同長頸壺1点、同壺3点、土師器壺4点、須恵器不明品1点の計11点を図化・提示した。壺類には残りの良いものがある。

46の須恵器壺は摩滅が著しく明瞭に観察できないが、底面は上げ底にならずにやや厚みを持つので、ヘラ切りによるものと考える（壺B）。同蓋（45）はつまみを欠くが、中心から1/2くらいに回転ヘラケズリがあり、端部の下方への届曲との境界には稜が残る。48は須恵器の長頸壺の頭部下半と見られるもので、沈線と波状文による加飾がある。47の須恵器は器種不明。壺の胴部下端と見るがいかがであろうか。ロクロナデと回転ヘラケズリ痕が観察できる。

須恵器の壺（49～51）はいずれも広口壺で、49が小形品。胴部にタタキを行い、頭部付近から口縁までにロクロナデがなされているが、小形品は胴部もタタキメの上から上半にロクロナデ・下半に回転ヘラケズリを行っている。49の内面下半は工具による横の強いナデがある。

土師器の壺（52～55）のうち52・54・55は長胴形を呈す、外形・器面調整とともに非常によく似た個体である。胴部最大径は上半にあり、口縁部は強く「く」の字に外反、器厚は非常に薄手に仕上がる。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面縁のハケメ、内面横と斜めのハケメが明瞭に残る。53は摩滅の進んだ底部一帯で、下端に横の工具ナデがわずかに見えるのみ。

本址土器群の時期は須恵器壺Bが存在すること、土師器壺が薄手のハケメの壺のなかでは古い要

素をもつことから奈良時代8世紀前半くらいに位置すると考える。

(8) C地点第6号住居址出土土器 (第48・49図56~61)

須恵器壺3点、土師器甕1点、同小形甕1点、須恵器短頸壺1点、の計6点を図化・提示できた。56・57は底面回転糸切りの須恵器壺(壺D)。58は同有台壺(壺C)で底面には回転ヘラケズリが施されている。

60の土師器甕は外形が長胴形を呈すもので、器面調整は胴部外面が縦のハケメ、口縁部内面がカキメという典型的なものである。同小形甕(59)は丸味を帯びた胴部をもち、胴部外面と口縁部内面にカキメがかけられる。須恵器の短頸壺(61)は胴部の摩滅が進んでよくわからないが、口縁部一帯はクロナデが行われている。

これらの土器は、時期的には8世紀末から9世紀の前半くらいのものと考える。理由は須恵器壺Dと土師器カキメの小形甕・同口縁内面カキメの甕の存在による。

(9) A地点ピット・検出面出土土器 (第44図21・第49図66・67・68)

A地点のピット71から出土した弥生土器を示す。第44図21の実測図は底部周辺、第49図67・68の拓影は胴部破片で、同一個体の可能性がある。3条1単位くらいの粗い条痕により外面調整がなされ、底面には木葉圧痕が残る。拓影67・68の傾きと条痕の方向の変化から、器種は甕と推定される。弥生時代中期初頭にさかのばる資料であろう。

第49図66の拓影は検出面出土の縄文土器の口縁部破片である。胴部外面と口縁部内面に沈線で施文される。文様、器形からみて縄文晩期中葉佐野II式の變形土器に比定されると考える。

(10) B地点土壙・ピット出土土器 (第44図22・23)

22の須恵器壺はB地点の土壙2から出土した。直線的な体部から想定すると、底面回転糸切りの壺Dを見る。

23は土師器の甕でピット12出土。長胴形の甕で、胴部外面にわずかにハケメが見られる。

(11) C地点土壙・ピット・検出面出土土器 (第49図62~65)

62はC地点土壙3、63は同ピット24、64は同ピット29、65は同検出面出土。62は深形の須恵器壺Cで底面が高台より下に突出する。底面中央に糸切り痕を残し外周を回転ヘラケズリ。8世紀末~9世紀前半。63は須恵器の蓋。天井部端が盛り上がり、屈曲部は厚く、内側へ強く折れ曲がる。時期は62と同様。64の須恵器の壺は底面回転糸切り。底面と体部の間にわずかに2次底部があるため時期は62・63と同じか若干古い。65も同様の須恵器の糸切りの壺。体部の直線化が顕著なので9世紀前半のものと見る。

参考文献

- 1 直井雅尚 1988「第3章1 土器」『松本市立考古学的遺構』松本市教育委員会
- 2 岩沢 浩 1988「II-4 古代の土器」『長野県史 考古資料編』1-4 遺構・遺物

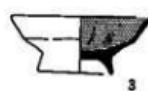
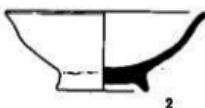
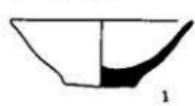
出土器一覽表

No.	出土場所	種別	器形	寸法(cm)	判別度 口縁 (底端)	外觀	内觀	色調	成形・調整・形態の特徴	備考、実測No.、注記	
1	A地51住	土師器	壺	13.0 (14.2)	5.2 5.5	4.6 3/4	米 黄褐色	青瓷褐色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ、底部内面無釉部-底1/4付 ロクロナデ、底部折合立ちちだ、底部内面無釉部-底1/4付	A1-1, A1-2, No1	
2	"	"	壺	(9.8)	6.5	5.5	1/2	青瓷褐色	青瓷褐色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ、底部内面無釉部-底1/4付 ロクロナデ、底部折合立ちちだ、底部内面無釉部-底1/4付	A1-3, 1住, No3
3	"	"	壺	(9.8)	5.3	3.9	3/4	青瓷褐色	青瓷褐色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ、底部内面無釉部-底1/4付 ロクロナデ、底部折合立ちちだ、底部内面無釉部-底1/4付	A1-3, 1住, No2
4	2住	土師器	壺	(9.8)	4.0	3.6	1/5	青瓷褐色	青瓷褐色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ、底部内面無釉部-底1/4付 ロクロナデ、底部折合立ちちだ、底部内面無釉部-底1/4付	A1-2, 2住, No3
5	3住	陶器器	壺	(12.6)	7.6	6.2	1/2	青瓷褐色	青瓷褐色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ、底部内面無釉部-底1/4付 ロクロナデ、底部折合立ちちだ、底部内面無釉部-底1/4付	A1-3, 1住, No68
6	"	"	壺	(12.6)	6.6	3.9	1/2	"	"	ロクロナデ、底部折合立ちちだ、底部内面無釉部-底1/4付 ロクロナデ、底部折合立ちちだ、底部内面無釉部-底1/4付	A1-3, 1住, No5
7	"	"	壺	12.3	7.7	4.2	一部欠損	青瓷褐色-青瓷褐色	青瓷褐色-青瓷褐色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	A3-4, A3-5住, No21
8	"	"	壺	(15.2)	"	1/4	青瓷褐色	青瓷褐色	ロクロナデ、外輪足無釉部-底1/4付 ロクロナデ、外輪足無釉部-底1/4付	A3-6, A3-7住, No21又	
9	"	"	壺	(14.4)	8.2	4.3	2/3	青瓷白色	青瓷白色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	A3-5, A3-6住, No52
10	"	"	壺	(12.6)	8.7	3.9	1/2	青瓷褐色-青瓷褐色	青瓷褐色-青瓷褐色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	A3-3, A3-4住, No24・25
11	"	"	壺	(10.0)	6.0	3.8	1/2	青瓷白色	青瓷白色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	A3-7, A3-8住, No65
12	"	"	壺	(14.5)	(9.6)	(3.5)	1/3	青瓷白色	青瓷白色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	A3-6, A3-7住, No27
13	"	"	壺	(17.0)	11.6	5.9	6/7	青瓷-青瓷色	青瓷-青瓷色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	A3-8, A3-9住, No66・47
14	"	土師器	壺	(24.6)	8.9	30.4	2/3	青瓷褐色-青瓷褐色	青瓷褐色-青瓷褐色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	A3-16, A3-17住, No11・ガマフ
15	"	"	壺	(26.2)	"	"	1/6	青瓷褐色-青瓷褐色	青瓷褐色-青瓷褐色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	A3-12, A3-13住
16	"	"	壺	"	"	(8.8)	(2/3)	青瓷-青瓷色	青瓷-青瓷色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	A3-11, A3-12住, No13・53
17	"	"	壺	(20.8)	(7.6)	(35.0)	2/3	青瓷褐色	青瓷褐色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	A3-13, A3-14住, No58・ガマフ
18	"	"	壺	(21.2)	8.2	37.0	1/2	青瓷褐色	青瓷褐色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	A3-14, A3-15住, No5・16
19	"	陶器器	壺	(16.2)	"	"	1/3	青瓷白色	青瓷白色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	A3-16, A3-17住, No35
20	"	"	壺	(17.0)	"	27.0	1/4	青瓷褐色-青瓷褐色	青瓷褐色-青瓷褐色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	A3-15, A3-16住, No53
21	ビト71	先史土器	壺	(8.4)	"	(12.6)	明灰白色-青瓷褐色	明灰白色-青瓷褐色	新規外輪足-新規下端ケリ状のナゲ 新規外輪足-新規下端ケリ状のナゲ	A3-1, A3-2住, No71	
22	B地52号2	陶器器	壺	(13.6)	"	1/4	明灰白色	明灰白色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	B3-1, B3-2住	
23	ビト12	土師器	壺	(19.2)	"	1/5	青瓷褐色	青瓷褐色	新規外輪足-新規下端ケリ状のナゲ	B3-1, B3-2住	
24	C地53号	"	壺	(17.4)	"	1/8	青瓷褐色-青瓷褐色	青瓷褐色-青瓷褐色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	C3-1, C3-2住, No16	
25	"	原志器	"	(11.8)	(8.0)	3.9	7/8	明灰白色	明灰白色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	C3-2, C3-3住, No16
26	"	"	"	"	(7.2)	1/4	青瓷褐色	青瓷褐色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	C3-4, C3-5住, No2	
27	"	"	"	12.4	7.6	4.0	一部欠損	明灰白色	明灰白色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	A3-1, A3-2住, No9
28	"	"	小鉢器	(18.0)	"	21.0	2/3	青瓷褐色	青瓷褐色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ-内面カキ目、断面外張りカキ目 ロクロナデ、底部折合立ちちだ-内面カキ目、断面外張りカキ目	C3-5, C3-6住, No12
29	"	"	鉢	(21.0)	"	1/4	青瓷褐色-青瓷褐色	青瓷褐色-青瓷褐色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	C3-6, C3-7住, No7・17	
30	"	"	鉢	(21.4)	"	1/6	青瓷褐色	青瓷褐色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ-内面カキ目、断面外張りカキ目 ロクロナデ、底部折合立ちちだ-内面カキ目、断面外張りカキ目	C3-6, C3-7住, No11	
31	"	"	鉢	(8.6)	"	1/3	青瓷褐色	青瓷褐色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	C3-7, C3-8住, No11	
32	3住	"	碗	(13.3)	(5.0)	1/6	青瓷褐色	青瓷褐色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	C3-6, C3-7住, No7	
33	"	碗	杯	(13.4)	7.8	5.3	1/2	青瓷褐色	青瓷褐色	ロクロナデ、底部折合立ちちだ ロクロナデ、底部折合立ちちだ	C3-4, C3-5住, No3

No.	出土地点	種別	形	寸法(cm)	高さ 口径	底径	壁高 底幅	底面 外側	内面	成形・調整・形容の特徴		備考、実測値、注記	
										横筋度 (底幅)	口横 (底幅)		
34	3位	銀鉢	高 扇	(11.9)	4.6	(定)	1/7	底白色	底白色	ロクロナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C3-5、 C3位7		
35	"	土鉢	小形扇	(11.8)	4.6	(定)	1/3	輪白色	輪白色~底白色	ロクロナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C3-2、 C3位 5		
36	"	銀鉢	扇	(14.0)	4.1	(定)	1/10	底白色	底白色	ロ輪筋ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C3-2、 C3位 5		
37	"	銀鉢	広口扇	(14.0)	4.0	(定)	1/10	底白色	底白色	ロ輪筋ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C3-1、 C3位		
38	"	"	扇	(13.2)	4.5	(定)	1/9	灰白色~灰白色	灰白色~灰白色	ロクロナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C3-7、 C3位5-6		
39	4位	"	扇	(12.6)	4.4	4.1	2/3	灰白色~灰白色	灰白色~灰白色	ロクロナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C4-4、 C4位6		
40	"	"	扇	(12.6)	4.0	(定)	1/6	明灰白色	灰白色	ロクロナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C4-1、 C4位5		
41	"	"	"	(13.2)	4.6	(定)	1/5	明灰白色	明灰白色	ロクロナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C4-2、 C4位5		
42	"	"	"	(14.6)	4.6	(定)	1/6	明灰白色	明灰白色	ロクロナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C4-3、 C4位7		
43	"	"	安	(5.4)	—	—	1/4	灰白色~灰白色	灰白色	ロクロナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C4-5、 C4位6		
44	"	土鉢	扇	(24.4)	—	—	1/8	底白色	底白色	ロ輪筋ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C4-6、 C4位7		
45	5位	銀鉢	扇	(15.6)	4.0	3.6	1/6	明灰白色	明灰白色	ロクロナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C5-3、 C5位		
46	"	"	扇	(13.8)	4.2	(定)	1/2	"	"	ロクロナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C5-4、 C5位12-21		
47	"	"	扇?	—	—	—	—	明灰白色	明灰白色	ロクロナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C5-2、 C5位4		
48	"	"	扇	—	—	—	—	明灰白色	明灰白色	ロクロナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C5-1、 C5位7		
49	"	"	広口扇	(19.8)	—	—	1/10	底白色	底白色	ロ輪筋ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C5-7、 C5位14-18		
50	"	"	"	(33.6)	—	—	3/5	明灰白色	明灰白色	ロクロナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C5-5、 C5位15-16		
51	"	"	"	(22.6)	(13.0)	(24.5)	1/3	明灰白色	明灰白色	ロクロナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C5-6、 C5位17-24		
52	"	上鉢	扇	(20.0)	—	—	1/4	底白色	底白色	ロ輪筋ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C5-8、 C5位7-8		
53	"	"	"	(7.4)	—	—	—	底白色	底白色	輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C5-8、 C5位9		
54	"	"	"	(10.0)	—	—	1/7	"	"	"	C5-10、 C5位10-11		
55	"	"	"	(20.4)	(10.6)	(37.8)	2/3	明灰白色	明灰白色	ロ輪筋ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C5-11、 C5位12-13		
56	"	6位	和合器	扇	(13.6)	6.4	3.6	2/3	淡灰白色	淡灰白色	ロクロナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C6-2、 C6位4	
57	"	"	"	(13.6)	(6.5)	(3.9)	1/4	底白色 (少少折) (少少)	底白色	ロクロナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C6-1、 C6位3		
58	"	"	"	(8.6)	—	—	1/3	灰白色~灰白色	灰白色~灰白色	ロクロナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C6-3、 C6位5		
59	"	J5位4	小形扇	(13.4)	—	—	1/6	明灰白色	明灰白色	ロ輪筋ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C6-4、 C5-6ケン		
60	"	"	"	(18.6)	—	—	1/8	明灰白色	明灰白色	ロ輪筋ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C6-5、 C6位7		
61	"	銀鉢	扇	(13.6)	6.4	3.6	2/3	淡灰白色	淡灰白色	ロクロナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C6-6、 C6位7		
62	土壤3	"	"	(11.0)	(11.3)	(6.5)	1/7	底白色	底白色	ロクロナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C2-3-1、 C2-3		
63	L-1'ト24	"	"	(16.4)	—	—	1/6	"	"	"	C P24-1、 C P24		
64	L-1'ト29	"	"	(13.6)	6.8	4.2	2/3	底白色	底白色	ロクロナダ。輪筋部ヨコナダ。輪筋部ヨコナダ。	C P29-1、 C P29		
65	検出器	"	"	(11.8)	(5.6)	(3.5)	1/4	"	"	"	C 8-1、 C 8ケン		

A地点

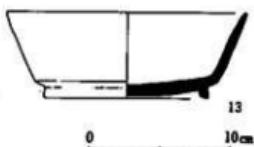
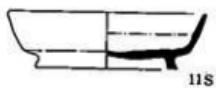
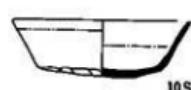
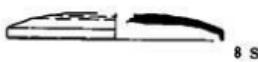
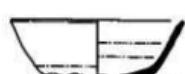
第1号住居址



第2号住居址

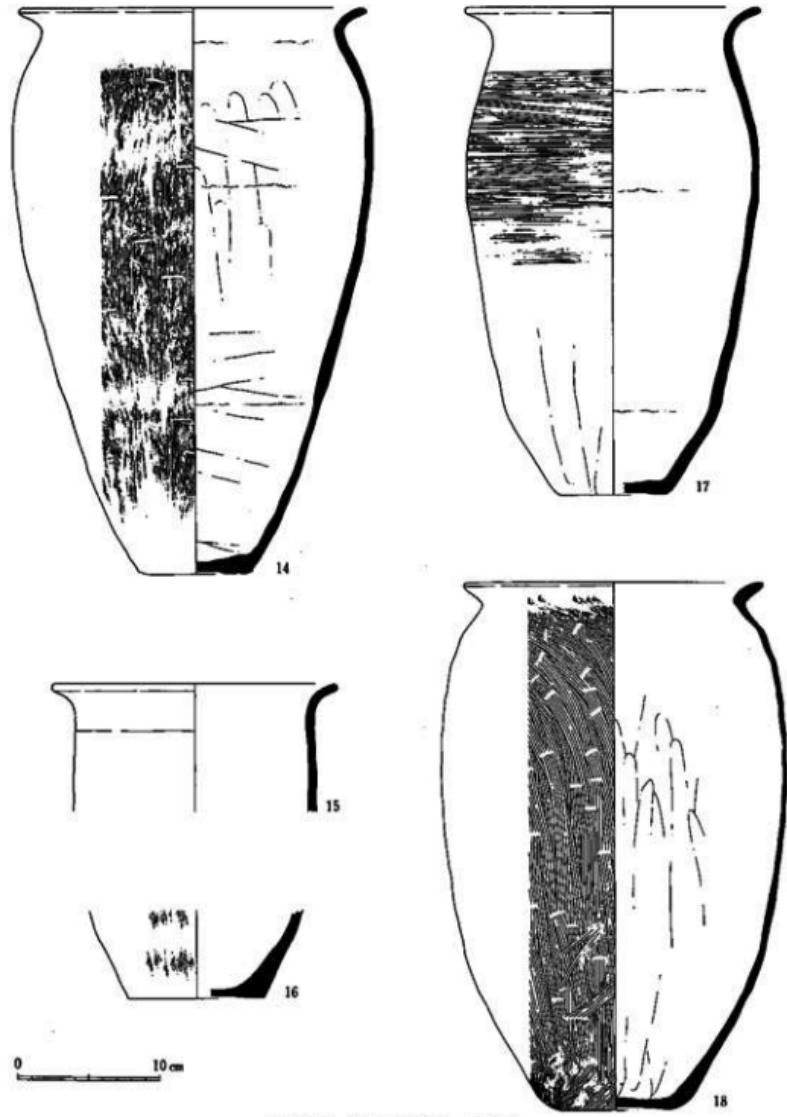


第3号住居址

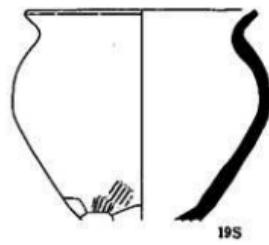


0 10cm

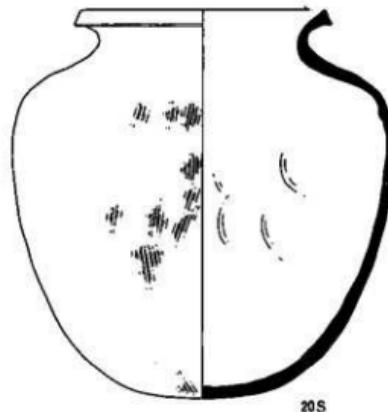
第42図 出土土器(1) A地点



第43図 出土土器(2) A地点



19S



20S

ピット



21

B地点

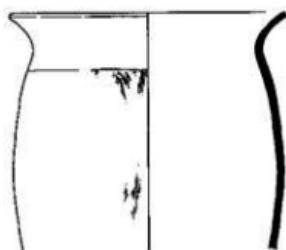
土壤



22S

0 10cm

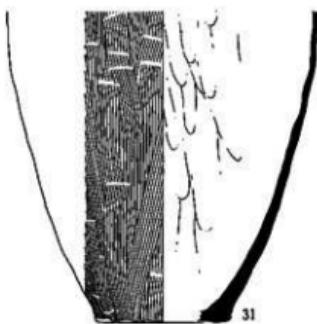
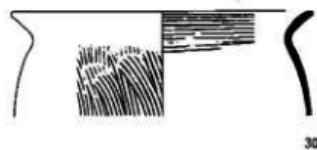
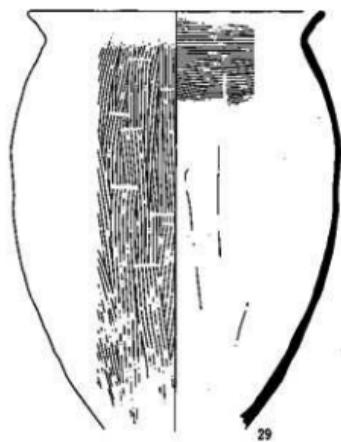
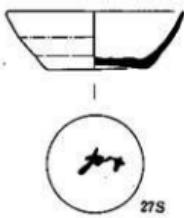
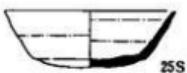
ピット



23

第44図 出土土器(3) A・B地点

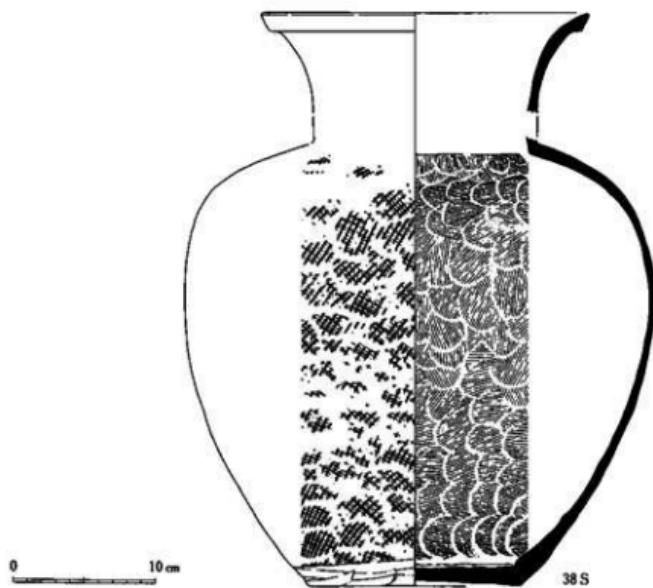
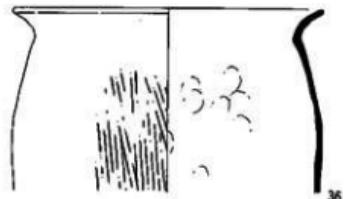
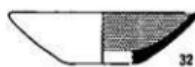
C地点
第2号住居址



0 10cm

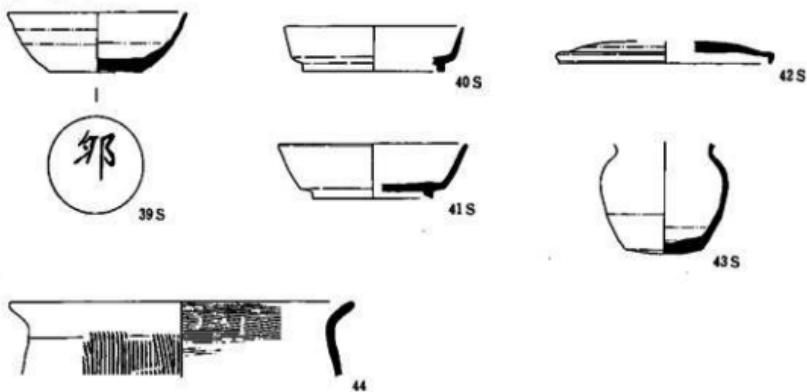
第45図 出土土器(4) C地点

第3号住居址

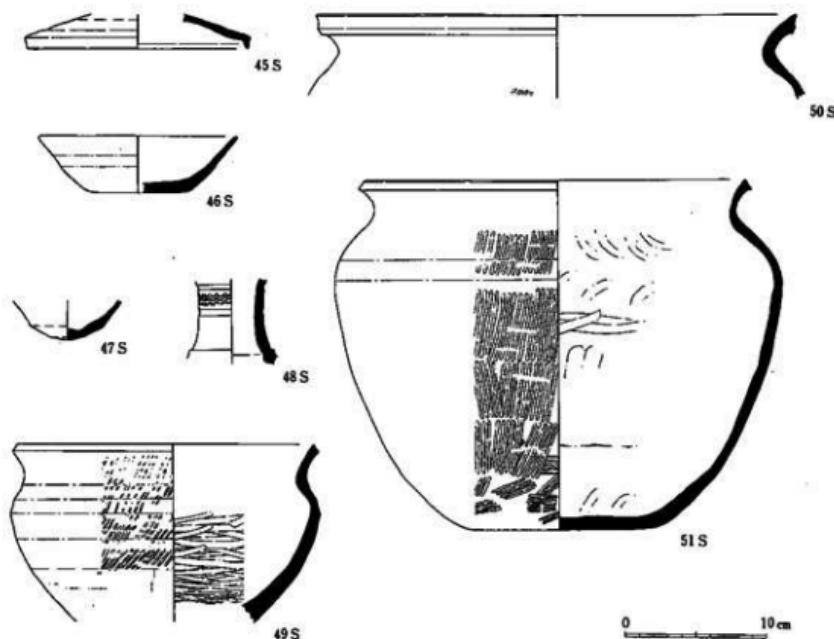


第46図 出土土器(5) C地点

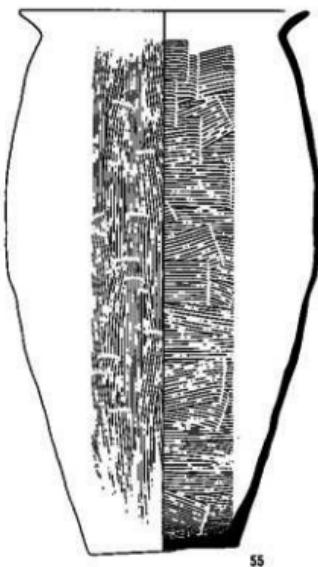
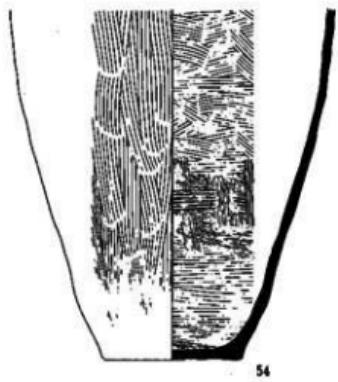
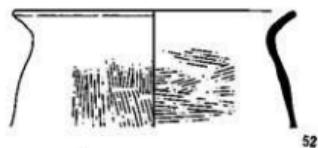
第4号住居址



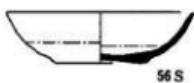
第5号住居址



第47図 出土土器(6) C地点

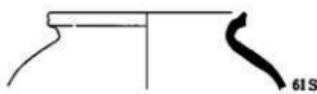


第6号住居址

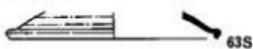


0 10cm

第48図 出土土器(7) C地点



ピット 24



ピット 29



検出面



0 10 cm



第49図 出土土器(8) C地点

2. 石器

A・C地点から5点の定形的な石器が出土している。内訳は打製石斧1、敲・磨・凹石3、砥石1である。このうち、磨石と砥石はA地点第3号住居址に伴うものである。前者は住居址の覆土からの出土で、ほかからの流れ込みと考えている。砥石は床面から出土しており、住居址に伴うものと考えている。他は検出面からの出土である。このほかに、黒曜石・チャートの剥片が少量ではあるが出土している。しかし、いずれも小片で使用痕や2次加工は見られなかった。

1は硬砂岩製の打製石斧である。平面は撥形を呈しており、刃部は円刃である。背面には広く礫の皮一自然面が残っている。なお、この自然面にはほとんど湾曲がないので、原材の硬砂岩礫はかなり大きいものだったと考えられる。腹面には主要剝離面が残っており、素材が横長剝片であったことがわかる。側縁部には着柄痕のつぶれ、刃縁部には使用痕のつぶれが見られる。また、刃部の剝離面にも使用痕である顯著な摩耗が見られ、光沢を帯びている。

2は安山岩製の磨石である。使用によって礫に底面=磨面が形成されている。被熱による赤色化が顕著に見られるが、磨面にはほとんど見られない。なお、この磨石は破損面がかなり風化していた。3は安山岩製の敲・凹石である。片面に凹部が1つ、反対側の面に凹部が2つみられる。礫の一端は敲打に使用されているため、表面の剥落や敲打面の形成がみられる。また、被熱により赤色化と炭化による黒色部分がみられる。なお、この黒色部分内にある凹部には黒色化が見られないことから、少なくとも凹部については被熱後に形成された可能性がある。4は安山岩製の凹石である。両面に一つの凹部が見られる。以上の石器については縄文時代の遺物と考えている。

5は砂岩製の砥石で、第3号住居址からの出土である。砥面は5つ見られ、いずれも凹状の砥面である。住居の床に接していた部分には鉄分の集積物が付着している。

出土石器一覧表

打製石斧

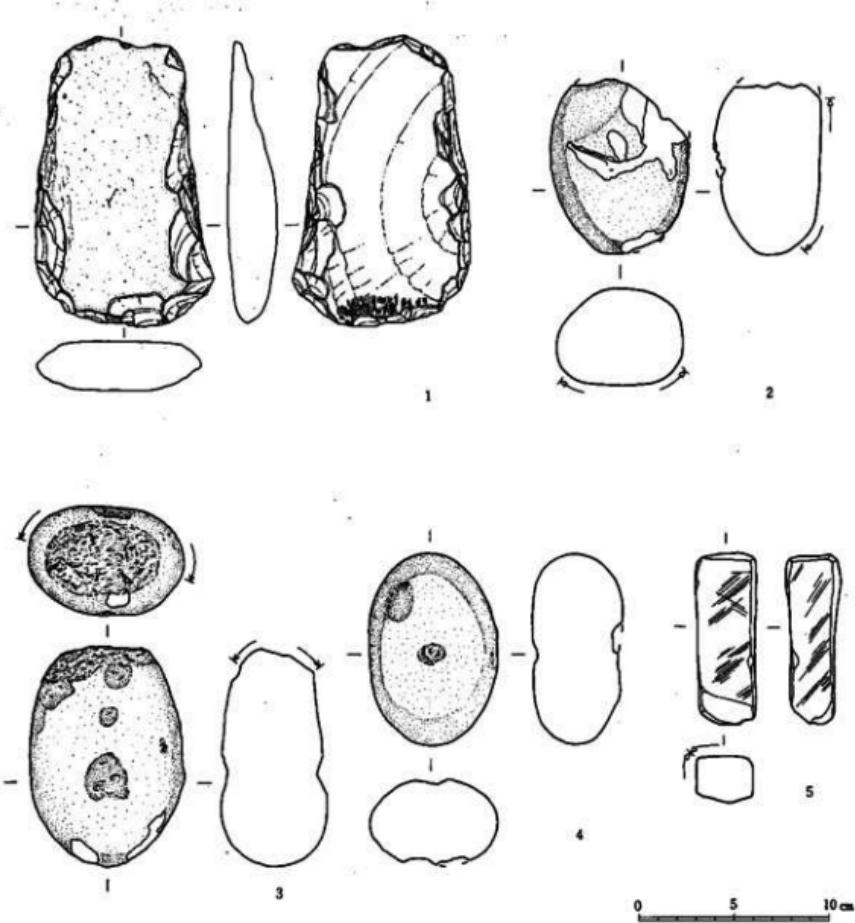
No	図 No	分類	注記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況
1	1	撥・円刃	A地点、検出面	(5.35)	9.24	2.52	(460)	硬砂岩	頭端部欠

敲・磨・凹石

No	図 No	凹部	敲打痕	磨面	注記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備考
1	2		○		A地点3住	(8.75)	(7.07)	6.53	(415)	安山岩	1/3欠	被熱痕
2	3	○(1+2)	○		A地点、検出面	11.24	7.91	5.81	(590)	安山岩	完形	被熱痕
3	4	○(1+1)			C地点、検出面	9.61	6.62	5.24	423	安山岩	一部欠	

砥石

No	図 No	注記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備考
1	5	A地点3住No25	(8.59)	2.79	2.63	(112)	砂岩	端部欠	砥面5



第50図 出土石器

3. 土製品・石製品

土製品は2点出土している。いずれも検出面からの採集資料である。

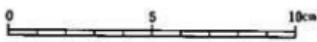
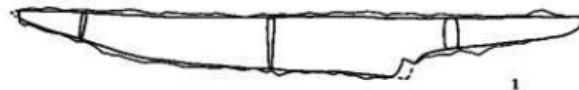
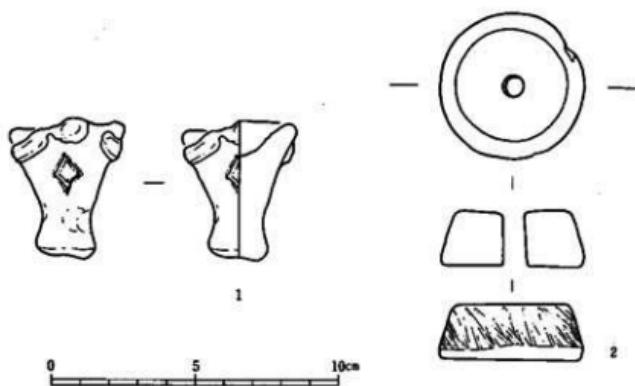
1はA地点の東側検出面で採集されたもので、ミニチュア土器として扱った。寸法は口径4.0cm・底径2.1cm・器高4.6cmである。口縁に近い胴部には菱形の切込みが2ヶ所に設けられている。そして、この菱形をはさむように口縁部外面に2つの粘土紐を貼付けている。外面が橙～暗橙色、内面が褐色を呈し、胎土には石英・雲母の混入をみる。なお、内面が非常に浅いこと、置いたときに座りが悪いことからミニチュア土器と特定するには一部疑問がある。底部外面の表面が剥落しているので別の土製品の一部である可能性もある。他に類例を知らないが、土偶の脚部の可能性があることを付記しておく。時期は縄文時代のものと考える。

2はC地点の北側検出面で採集された紡錘車である。寸法は最大径5.0cm・器高1.9cm、孔径0.75cmである。外面には細いミガキ調整がみられる。また、黒色処理が行われている。しかし、その後に最大径側の底面と側面の一部にケズリか研磨のような調整が行われている。その結果、黒色化部分はなくなり淡暗褐色の胎土が平滑面で見えている。また、側面には面取りを行ったように稜が形成されている。時期は不明である。

石製品はヒスイの原石1点（カラー図版参照）が出土している。A地点の南東部で、重機による掘り下げの際に、検出面近くで採集したものである。礫の外面が平滑で、稜も丸くなっていることから、河川の転礫を河口近くで採集したものと考えている。研磨痕等は全く見られない。

4. 鉄器

本遺跡出土の鉄器は4点と少ない。そのうち器種の判明した3点を図示した。1は刀子で全形のわかるものである。全長は19.7cmで、刃部は13.2cm基部は6.5cmである。刃幅は最大2.2cm、基幅は最大1.7cmである。厚さは鏽のため不正確であるが最小5mmである。遺物は三つに折れ、刀の先端部は細かく鋭利に尖り、刃先を前にした場合やや右に曲がっている。基も先端を細く尖らせている。重量41.0g。2は鎌の先端部で断面は鍛鉄を刃側で折り曲げ、二枚を合わせているが、その合わせ目が密着しておらず、細い空洞になっている。厚さは5mmである。1・2ともA地点第2号住居址No.1出土。3はC地点第6号住居址No.1出土のものであるが、最大径8mmの先端にゆくにしたがって細くなる棒状のものである。形状からして紡錘車の軸ではないかと思われる。重量は9.15gである。図示しなかったものが1点ある。土が詰りついたままで長さが4.3cm、太さは1.3cm、厚さは0.9cmである。断面は芯の中が空洞になっている。A地点第3号住居址カマド北側出土。53.5g。



第51図 土製品・鉄器

第4章 調査のまとめ

1. 神田遺跡の歴史的環境

神田地区周辺に遺跡が存在することは古くから知られていたが、発掘が行われることがなかったためその実態はよくわからなかった。

最近になり、この地には場整備事業に先立つ緊急発掘調査が行われるようになった。隣接する里山辺地区では林山腰遺跡・千鹿頭北遺跡などの発掘調査が相次いで行われている。これらの調査の結果、縄文～平安時代にわたる集落の存在が確認されている。特に、千鹿頭北遺跡では古墳時代前期～平安時代の竪穴式住居が60数軒も見つかっている。薄川南岸の扇状地にある遺跡は背後に古墳群を控えていることから、今後、古墳（群）と集落の関係を考えいかなければいけないだろう。

また、付近に「筑摩」の地名があることから、東間（筑摩）郡の都衙の存在を考える説がある。この真偽はともかく、松本工業高校敷地遺跡などで平安時代の布目瓦が見つかっていることは付近に大きな建物の存在をうかがわせる。

以上のように、神田遺跡周辺は古墳時代～平安時代にかけて松本平の歴史を考えいく上で重要な地域であり、今後の調査が期待される。

2. 調査の成果

今回は現在の神田集落の南側でA地点を発掘し、遺跡の範囲を確認するためさらにB・C地点を発掘調査した。A地点は約1800m²を発掘し、竪穴式住居址3軒と建物址5棟ほかを検出した。いっぽうB・C地点は計150m²の発掘にも関わらず、竪穴式住居址7軒ほかを検出している。また、縄文～平安時代にわたる遺物が出土しているが、住居址に伴うものが大半である。竪穴式住居については伴出土器からその年代が推定されている。結果は、A地点では3住が奈良時代前半に、1・2住が平安時代中頃と推定した。また、B・C地点の1住は時期不明であったが、C地点の2～6住は奈良時代前半から平安時代前半に位置づけられる。

これらの結果から、今回の調査の成果を次のとおり位置づけたい。

1) 神田遺跡周辺の土層堆積状況の把握

神田遺跡の遺構検出面を層として捉えることができた。A地点の土層観察から推定すると現在の耕作面より下に黒～黒褐色土層が見られ、その下層に遺構検出面があると考えている。今後の発掘調査の際の目安になると考えられる。

2) 遺跡の年代の上限・下限について

今回の調査では縄文・弥生・奈良・平安時代の遺物が出土している。検出面ではA地点で弥生・奈良・平安時代の遺構が、B・C地点で奈良・平安時代の遺構が検出されている。しかし、3地点とも検出面より下で、別の遺物包含層や遺構検出面が確認されているので、今

後は縄文時代の遺構も検出されると考えられる。

3) 神田遺跡の古代集落の内容

奈良時代～平安時代中頃までの集落遺跡と考えられる。そして、C地点周辺が集落の中心だったと思われる。A地点は調査面積の割に住居址が少ないと、建物址・柱列があることから、集落内ではあるが居住地とは別の性格を有していたのかも知れない。

なお、今回の調査では中山古墳群との関係から、古墳時代の遺構・遺物の検出が期待されたにも関わらず、該期のものは全く出土していない。今後の周辺地域の調査による確認が望まれる。

3. 住居址のカマドについて

今回の調査では、竪穴式住居内のカマドに関するいくつかの良好な資料を得ることができた。

1) A地点第2号住居址石組カマド例

住居の床面にカマドの構築材だったと思われる被熱礫を含む大形河原石が置かれていた。一般にカマドの構築には河原石を欠くことができない。特に、石組カマドの場合には適當な大きさの礫を多量に必要とする。本址の礫の出土状況は、かかるカマドの構築、または廃棄行為に関する可能性一例例えば石材の備蓄等一があると考えている。

2) A地点第3号住居址粘土カマド例

カマドの上面から土師器の甕1個体、下面で須恵器の壺4点が出土している。須恵器の壺は位置的には完全にカマド内部に位置しているにも関わらず、2次的な被熱痕は見られなかった。おそらくはカマドの廃棄=住居の廃棄の際に入れられたものと考えたい。この行為のもつ意味については様々な解釈ができるだろうが、類例の増加を待ちたい。

3) C地点第2号住居址石組カマド例

住居内にカマドを構築していたと思われる礫（被熱礫を含む）が住居内に散乱している。さらに、カマド本体も石組が崩れている上に主柱穴と考えるピットを破壊していた。これらのことから、本例はカマドの破壊例として捉えることができる。

4) C地点第5号住居址石芯粘土カマド例

カマドの上面で土器がつぶれた状態で出土している。さらに、その下で平面と土層断面の観察からカマドの構築法に関する情報が得られた。カマドは当初大きめの穴を掘った後、カマド石が倒れないよう穴の外側を埋め、さらに両側のカマド石間も土で埋めてカマド石を固定している。その後、支柱石を配置している。なお、本例では支柱石に甕の底部を逆さまにかぶせてあった。甕と支柱石との間のクッション的役割を意図したものと考える。

最後に、今回の調査に当たり神田地区は場整備組合の方々には多大なるご協力をいただきました。また、11月末から1月にかけての寒気の中発掘調査を支障なく行うことができましたのは、調査に従事された作業員の方々のご理解とご協力によるものです。記して感謝の意を申し上げます。

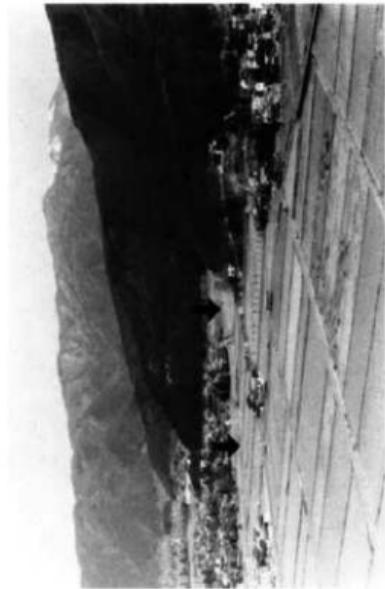
図 版



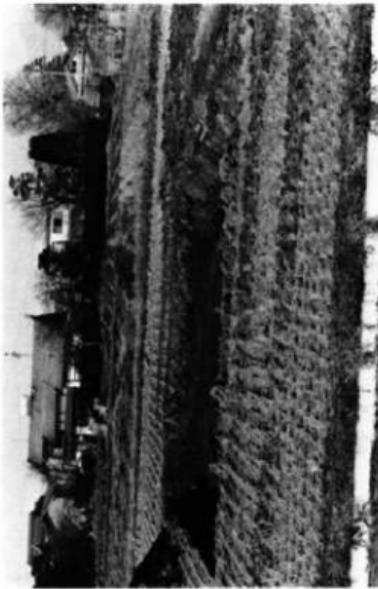
A地点（西から）



C地点（東から）



調査地遠景（矢印右：A地点 左：B・C地点）

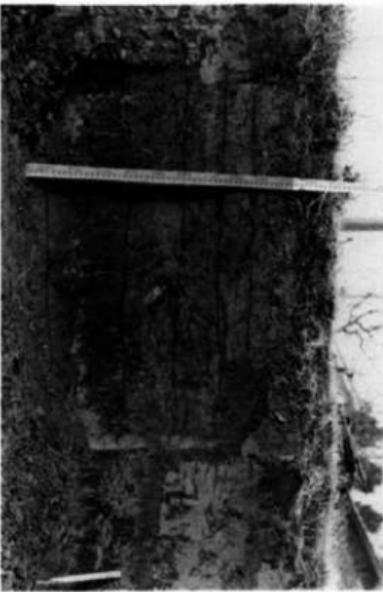


B地点（南から）

B地点基本土層（耕作）



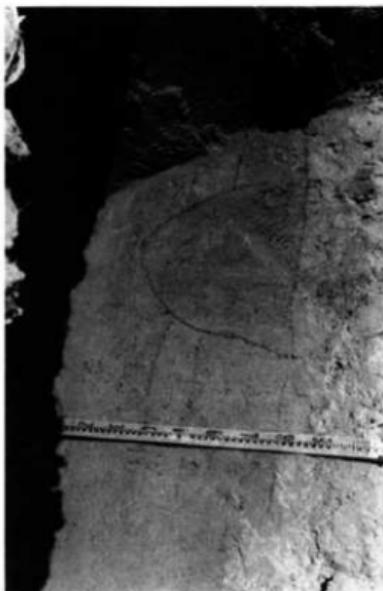
A地点基本土層（調查区土壤）



(一) A地点基本土層（調査区土壤）



C地点基本土層（ヒツトコロ）





同・出土状況 (地表)



同・掘りあげ (地表)



A地点第1号住居址・出土状況 (地表)



同・土層断面 (地表)

同・カマド(櫻から)



A地点第2号住居址・櫻群出土状況(南から)



同・カマド(上から)



同・カマド・櫻群(上から)





同・耳皿（床面から19cmの覆土中から出土）



同・握り上げ（床面から）



A地点第2号住居址・刀子（床面から6cmの覆土中から出土）



同・高台をもつ皿

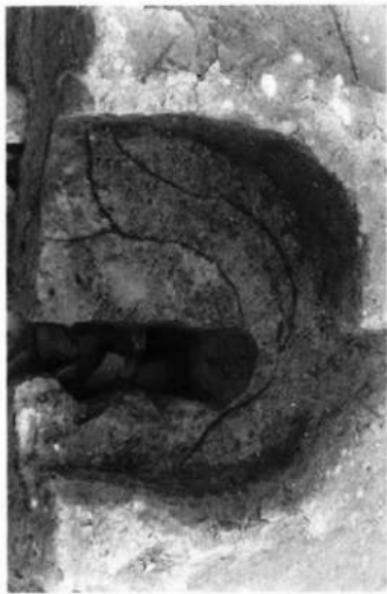
同・カマド上部の土師器・甕 (14)



A地点第3号住居址・検出状況 (西から)



同・カマド上部の土器

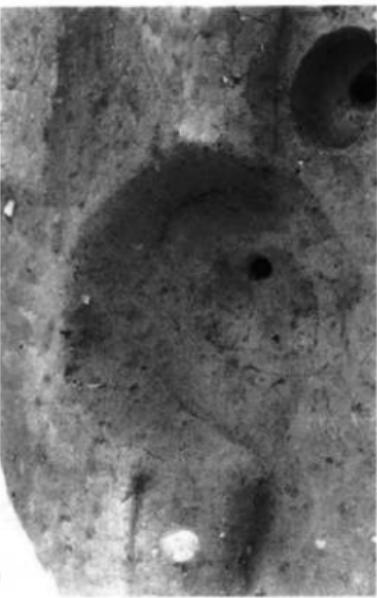


同・掘りあけ (西から)





同・カマド下部の土器出土状況 (→)



同・カマド掘りあけ

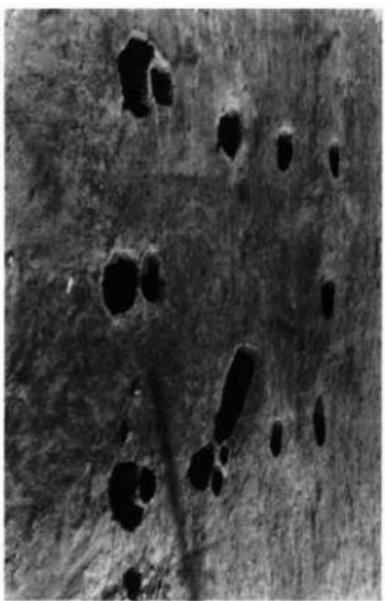


A地点第3号住居址・カマド土管堆積状況

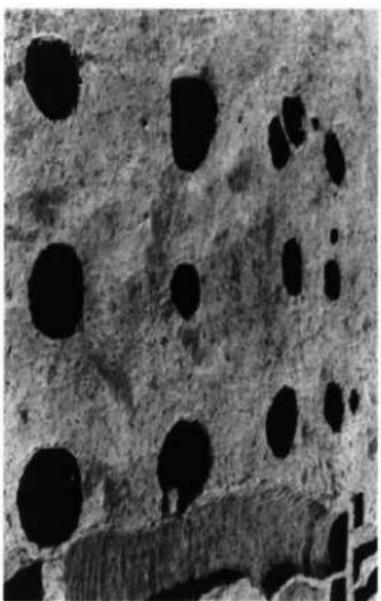


同・カマド下部の土器出土状況

同・植物社 3 (西から)



A 地点・植物社 1 (北から)



同・植物社 5 (西から)



同・植物社 2・4 (西から)





同・柱列(北から) (→)



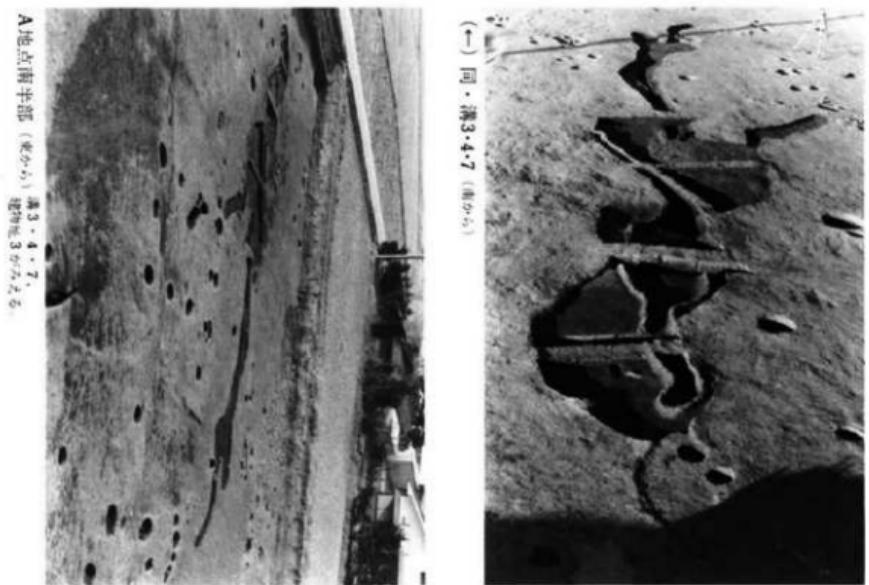
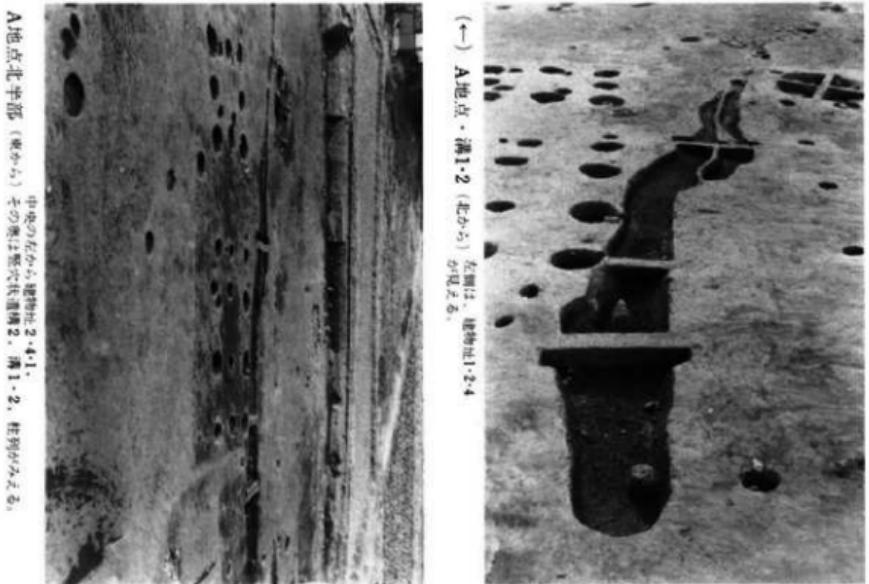
同・ビツト71(西から)



A地点・建物址1・P6(柱列)



同・壁穴状構2・土壤3(南から)



第11図版

B地点全景(西から)



同・土壤・ビット(北東から)



B地点・第1号住居址(南から)



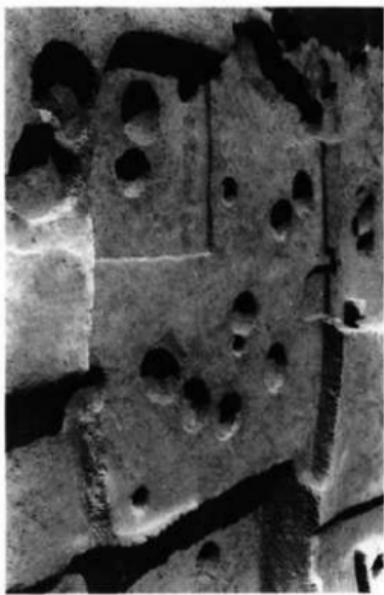
同・第2号住居址カマド（北から）



C地点・第1号住居址（南から）



同・第3号住居址（東から）



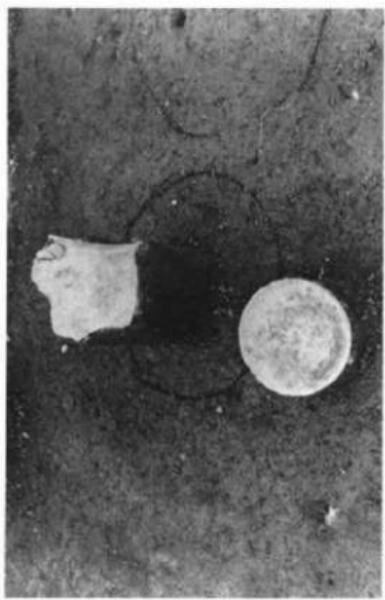
同・第2-3号住居址（西から）



同·須惠器·鉢39



同·須惠器·鉢39

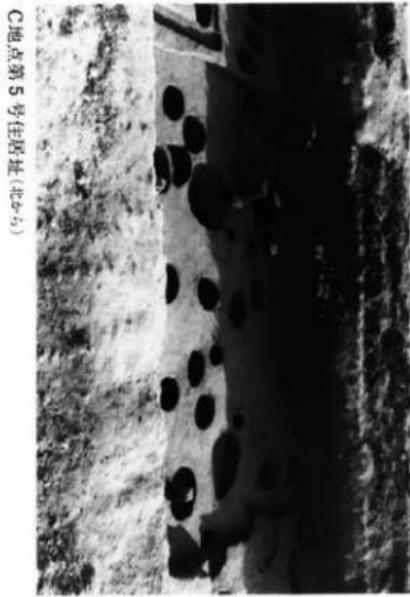


C地点第3号住居址·須惠器·鉢39

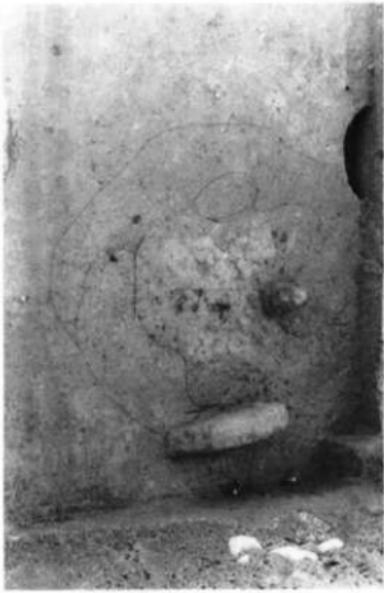
同·須惠器·環39



同・カマド・遺物出土状況



同・カマド・平面土層





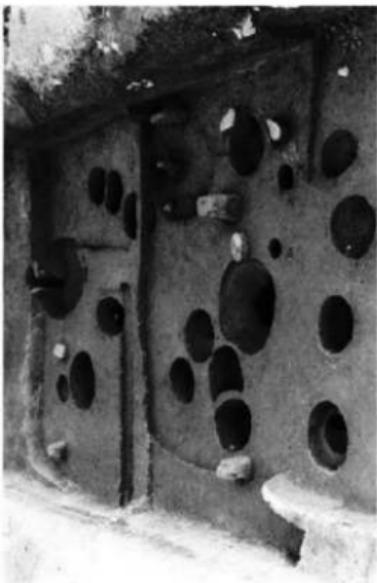
同・カマド・掘りあげ



同・カマド



C地点第5号住居址・カマド・土層



C地点第6号住居址 (西から)

同・暗渠（裏から）



C地点・土塊3（北から）



同・暗渠（拡大）



同・ビット29（北から）





A地点 第1号住居址
土師器・甌(1)



同
土師器・甌(2)



同
土師器・甌(3)



A地点 第2号住居址
土師器・耳皿(4)



A地点 第3号住居址
土師器・甌(5)



A地点 第3号住居址
土師器・甌(6)



同
土師器・甌(7)



同
土師器・蓋(8)



A地点 第3号住居址
填土器・环(9)



同
填土器・环(10)



同
填土器・环(11)



同
填土器・环(12)

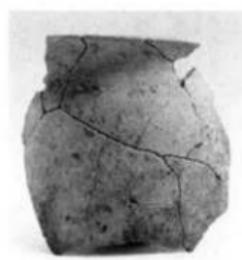


(左) A地点 第3号住居址
(下左) 同
(下中) 同
(下右) 同
填土器・环(13)
土器・甕(14)
土器・甕(15)
土器・甕(16)





A地点 第3号住居址
須恵器・鏡29



B地点 ピット12
土師器・鏡4



C地点 第2号住居址
須恵器・环27



C地点 第3号住居址
須恵器・鏡33



C地点 第4号住居址
須恵器・环29



C地点 第6号住居址
須恵器・环56



左
C地点 第3号住居址
須恵器・鏡38

右
C地点 第5号住居址
須恵器・鏡59



C地点 第6号住居址
須恵器・鎌鉈



C地点 ピット29
須恵器・环84



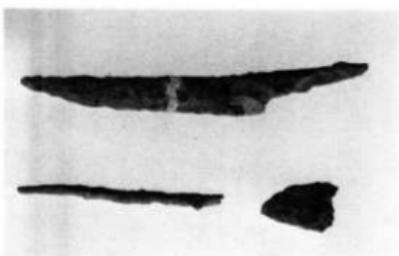
A地点 檢出面
ミニチュア土器



C地点 檢出面
紡錘車



(左上) 出土石器
(下) 出土鐵器
(右上) 棺護山3号墳出土須恵器・環



松本市文化財調査報告No.73

松本市神田遺跡

平成元年3月20日 印刷

平成元年3月30日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 アサカワ印刷機
